

---

# 魔法少女と悪を背負った者

幻想の投影物

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女と悪を背負つた者

### 【Zコード】

Z4512Y

### 【作者名】

幻想の投影物

### 【あらすじ】

不幸によって振り回された少年がいた。彼は最後まで不幸に囚われその命を落としてしまう。その先にあつたのは白い世界。そこで神と出会い、新たな命を歩むと共に、背負うべき力を選択する。そうして『この世全ての悪』となつた少年は希望と絶望が渦巻く世界へ訪れたのであつた。全てを背負うことを決めた彼に訪れる結末とは……物語参考はコミックです。作者はハッピーエンド主義者です。

## 不幸・転生（前書き）

もつひとつの方でスランプになりましたので、逃げの一手として書かせていただきます。というかこちらがメインになるかもしないのでどうかよろしくお願いします。  
マンガをベースに書いています。

## 不幸・転生

「ここは全てが真っ白の部屋。ここにあるのは白い椅子と白い机。その椅子に座つてこちらを見ている老人だけであった。

「よくぞここまできた。まあ、座るといい

そう言つて目の前の老人は着席を促してきた。それに従い素直に座り、老人に向きなおつて言を紡ぐ。

「それで、やっぱり俺は死んだんですかね」

「・・・理解が早い。その通りだと言つておひつ」

やはり想像どおりらしい。だが未練は無いし、残すようなこともしなかった。生来より人よりも運が悪かつただけ。小さい頃はいつも大きな怪我をしてばかりであつたし、かつあげ等もざらであった。死因もそれと同じで、運悪く重傷を負い、運悪く病院に着くまでの間に処置が間に合わなかつただけだ。思考の海から浮上したその時、老人が感心したように口を開いた。

「激昂しないのだな、久しぶりに見るパターンだ」

「いや、したところで何が変わる。というわけでもないですし、あなたが悪いわけでもないでしょ」

「いや、実は私のせいだ。」

「は?」

生前の考え方事が吹き飛んだ。いやいや、この人何をおっしゃつてい  
るのか？まさか魂を連れていいく死神か人の魂を管理する閻魔

「後者の回答が近しいであろう」

「人の考え方事に口はさむのはどうかと、とゆづかやつぱり読めたん  
ですね、心と/orが頭の中。」

「That, straight. ついでに私は『神』だといっておこ  
う」

そのたたずまいからある程度の予測はしていたが、面と向かつて言  
われるとより一層、目の前の人物が神々しくも見えてくる

「それはともかくあなたがやつたと？」

「つむ、それで間違いない」

要するに俺はこの御老公のせいで死んだと……

あるんだなーそんなミス。神様も万能ではないってか

「That, straight. あと、君のそつなつた原因は管理の  
時にまれに起こつづるミスでね、『今』の君にあるはずの幸福を入  
れ忘れ、平均値・2くらいの量で輪廻から送り出してしまつたのだ  
よ。」

「はあ。つまり、俺の今までの不幸はそれが原因でもたらされたと。  
先ほどパターンって言つていたということは他にも何人かいて、そ  
れでこれを聞くと殴りかかってきた。ということですか？」

「先ほどから実に察しがいいな。それで私に掴み掛かるかね？それで君の憂さが晴れるならことと付き合おう。」

「そんな度胸も趣味もないでの遠慮します。で、死んだことはそうとして、こうして話すということはこのまま死んだ先には行けないとこつことですね？」

「ああ。その他にも事があるのでここに留まつてもらつたが、君に對する謝罪をせねばなるまい。こんな言葉でも受け取つてほしい。すまなかつた」

「いいですよ。俺が怖かったのは、死んだ先は何も考えられない『無』しかないのか、それともつてとこつだけでしたか？」

「なかなか面白いことを考へる。普通、その年の頃はもつと楽しむものだとも思うがね」

それからしばらくの間、二人は会話を続けた。内容はこれからのことについて。これまでの不幸な人たちはこのままリセットされ輪廻に戻つていくが、記憶を持ったまま輪廻に入るというもの。後者はいわゆる『転生』で元々居た世界とは違う法則がある世界に行くというものであり、生きたい世界があるのなら自分で選べるらしい。だが、前者と後者のどちらの場合も蘇つたとき、自分で選んだ特典を持つことができ、その特典の制限はその世界によつて変わらるが、神に匹敵するほどの力はつけれず、地球全体規模の大災害程度が限界らしい。（十分だと思うが

また、どんな能力であつても、神が思考を読み取り、その力を決定すること。ちなみに、その力を使つて世界の運行に危害を加える、もしくは世界を滅ぼそうとすると、この神とは関係なく『世界』自

身からのペナルティがあるようだ。要約すると「この世界に入れてやつたんだから勝手に暴れるな」とのこと。世界とて生きているのだから当たり前だとは神の談。

しばらく思考にふけり、出した答えは

「分かりました。『転生』にします」

「あいわかった。特典のはづきどうある?」

「『』の世金ての悪アンリ・マコでお願いします」

「……アレとて神の一柱、神には近づけぬといったが?」

「いえ、f a t eというゲームに出てくる聖杯の泥と彼の英靈としてのスペック、加えて俺の考えた追加要素さえあればそれでいいです」

「ふむ、本当に変わった奴だ。今までにはない新しいタイプだよ。どれどれ、……ほつ、これはまた面白い。まさに信仰を受け力をつける神、いや畏れを形成し形作る妖怪のような存在が近しいか。承諾しよう。君はその道を歩むことに迷いはないな?」

「ええ決して」

「なにばら送り。世界はどうする?」

「ハンドルでお願いします」

「それらの願いは確かに受け取った。これは定型文だが君にも送つておこうか

次なる人生こそ君に多くの幸あらんことを  
これから悪を背負わされる者に言つのも変なことだが、謝罪と一緒に

に受け取ってくれたまえ。

ではさらばだ。選んだ力とその特性ゆえに、一つビルの世界に留まることは難しい、かつ渡ると同時、その世界にとらわれるという奇妙な現象が起るため、君の魂はもつ輪廻に来ることも無いだろう

う

そう言つたと同時に、俺の内面の変化と足元には底の見えぬ大穴があいた事に気づいた。

「ああ、言い忘れていたがすでに力はついている。魂の進化とも劣化とも取れぬ異例ゆえ年齢の成長は打ち止められているだろうな。」

「りょーかい。俺はオレとして楽しませてもうりますかね……!? グアッ……」

そう言い残し『悪』となり口調も魂も変わった少年は穴に落ちた瞬間、苦悶の表情を浮かべながらこの白の世界から姿を消した。  
そこに残されたのは再び神が一人だけ。

「ふむ、本当に面白い。元々が背負わされたモノゆえに、人の負の感情を吸い取り、自らの力へと変え、泥へと還元する能力か、まあ今回の峠を越えた後、あ奴の生きざまを覗いてみるのもよからうて」

依然と終始変わらぬ口調で神はひとり呟いた。

ふと何かに気付いたようで、感慨深い表情から一変。初めのような無表情になり、姿勢を正し、ある方向を向いてその言を紡ぐ。

「よぐぞここまできた。まあ、座るがいい」

これからも神は魂を導き続ける。それがこの神の役割であるのだから。

## 不幸・転生（後書き）

あいも変わりず短いです。このよつな文を読んでいただきありがとうございます。

## 人物・紹介（前書き）

調子に乗つて人物紹介です。これだけはこれからも書き続けていこうと思います。

## 主人公

### アンリ・マユ（この世全ての悪）

#### 特徴

生前は高校生。生まれ持った不幸に嘆きつつも、それを受け入れたのが小学校頃だったので、常にというわけではないが、何事に対しても冷静思考を巡らせることができる（あくまで思考であつて、表情や表現は人並みにしている）。決して某フラグメイカーの様に髪がツンツンしていたり、赤みかかつたりはしていない。そして「不幸だ」とも「なんでさ」とも言わない……かもしれない。

名前は生前の名前を輪廻の際に置いてきたのでそのまま自分が貰つた能力『アンリ・マユ』を使用している。身体的特徴はほとんど原作のアヴェンジャーと変わりないが、元々の主人公の容姿をしるため、身長や体重はそれに準じたものとなっている。性格そのものは元の人格がベースのため、一般人と何ら変わりない感性だが、戦いや殺人、残酷な行いに対しても気分が高揚する一面が追加されている。加えて口調など、一人称が『俺』から『オレ』になるなど、いくらかの変化はあるようだ。

#### 能力

前の話で神様が言ったことと同じ。基本スペックは『英靈アンリ・マユ』だが、聖杯からあふれた魔力と惡意の塊の『泥』や彼自身がつけた能力のうちの一つに『人の惡意や負の感情を他人から回収し、自身の一部である泥へと変化させる』という能力がある。神の言った通り、人々の『惡意』を『信仰』や『畏れ』のような祈りへ変え、己を保つとともに自分自身の魔力限界量（要はMP）を底上げして

いるため、かなりの長時間の使用をしない限り、実質上の『魔力切れ』の現象が起きない。

他にも、原作 *Fate* の似非神父のように泥を投げつけたり、真っ黒に染まつた後輩のように鞭や人型として使つたり、更にはその泥に乗ることで空中戦闘をも可能にした。

ちなみに、ホロウの『繰り返しの四日間』に出現する『無限の残骸』<sup>アンコミティッド・レイズ・デッド</sup>もこの泥を宝具として再現可能であるため、一対多数や諜報活動、身代わり等の時は重宝できるが、泥自体が（本人がなるべく抑えているとはいえ）悪意と魔力の塊なので案外容易に発見される。パロメータは神の加護もあり（悪が神の加護を受けるというのもおかしな話だが）、基本的に原作よりいくらかの上昇をしたため、低～中程度のランクの英靈とならは渡り合えるだらう強さとなつていて。泥そのものは地面から染み出でたり、虚空から現れるので奇襲にも有効である。

## ステータス

クラス：アヴェンジャー

真名：アンリ・マコ

性別・年齢：男・17～18（外見年齢）

属性：虚無

身長：174cm

体重：59kg

パラメータ：（）内は泥でブーストもしくは何らかの方法で強化時

筋力・D（C+）

耐久・E（D+）

俊敏・C（B+）

魔力・B-（EX-）

幸運・C

宝具・D B+

クラススキル

無し

保有スキル

対魔力 : D

一工程による魔術を無効化する。効果としては魔除けの護符程度。まどマギで換算すると強化した契約前さやかの魔法コーティングバツトをノーダメージで防げる程度。

殺害権限 :

人類に対する絶対殺害権限。英靈クラスの超人であろうと、魂のあり方が人間である限りアンリ・マユには勝てない。しかし、本当の『英靈』や『人外』が相手の場合、勝つことは難しくなるだろう。ランクがないのはこれを保有する『英靈』が他にないので、彼だけの神秘の独占により神秘性が向上しているから。

聖杯 : EX

聖杯とつながりがあると付属されるスキル。召喚後の現界維持だけでなく、その他の魔力も聖杯からのバックアップを受けることができる。ランクによって受ける恩恵（魔力）が増減し、一時は聖杯そのものであった事に加え、常に壊れた聖杯を所持しているような状態なので、魔力を消費する行動すべての恩恵を受けることができる。

神性 : C + ( A + )

元は悪神であり、本来は最大の神靈適性を保有するのだが、彼自身は背負わされた人に過ぎない。だが、魂を管理するほどの神格者と魂が触れ合ったことにより、いくらかの適性を得た。

単独行動 :

マスターからの魔力が絶たれても現界していられる能力。ランクがないのは、上記のとおりに聖杯（泥と惡意）からの無限のバックア

ツプによつて魔力が死きることがないため。

今後の作品で追加あり

宝具  
『ヴェルグ・アヴェスター 偽り写し記す万象』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：1人

由来：ゾロアスター教經典「アヴェスター」の写本

「報復」という原初の呪い。

自分の傷を、傷を負わせた相手の魂に写し共有する。仮に右腕がなくなつた場合にこの宝具を使うと、相手の右腕が同様に吹き飛ぶことはないが、感覚がなくなり、動かすことも出来なくなる。条件さえ満たせば、全ての相手に適用できる。高い魔術耐性を持つサーヴアントであつても問答無用である。

しかし、発動は対象一人に対して一度きり、放つのは自動ではなく任意発動。軽症ならばさして障害に出来ず、かつ今後同じ相手には使えなくなり、一方、致命傷では死亡してしまつため使うことができない。使いどころが非常に難しい上、互いに重傷を負つて動けないという困つた状況が出来る。本家アヴェンジヤー曰く「傷を負わねば攻撃できない、クソッタレの三流宝具」。

なのだが、神が手を加えたので一人に対しても何度も使用可能という利点を得た。ランクやその他は上記の三流より推測したもの

『アヴェスター 遍く示し記す万象』

ランク：不明 種別：対界宝具（？） レンジ：？ 最大補足：？

由来：不明

起きた出来事を自動的に記録していく宝具。

言葉にならない感情や、本人も気付いていない感情をも言葉として記録する事を可能とする。その名に相応しい、何者も傷つけない宝具。戦闘には一切使うことが出来ない。

「偽り写し示す万象」はいわばこの宝具の贋作のような物。これは神が仕込んだ記録用の宝具であり、アンリ本人はこの宝具を知らないし、使えない。本当に単なる記録媒体。

『無限の残骸』  
アンリミテッド・レイズ・デッド

ランク：B+ 種別：対人（自身）宝具 レンジ：1 最大捕捉：

1人

由来：不明

もとは『繰り返しの四日間』で出現したアヴェンジャー本人の残骸だったのだが、このたびは宝具として昇華された。聖杯の泥を形成し、疑似的なサーヴァント（分身）を造り出す能力である。

ランクはF a t e / N e r oのアサシンから拝借。アサシンと違いその形と色はどのようにでも出来るのだが、上記のとおり元々が『人の悪意や負の感情』で出来てるので諜報にはあまり向かず、常に負のオーラを撒き散らしているので、アンリ本人を知る人なら気配で気付かれることもある。

燃費が悪く、使用した分だけ泥の量は減り、戦闘終了後に残った泥は全ての悪意を行使者に押し付け、構成する魔力は空気中に霧散する。現段階では、泥が一日に1000?溜まるとすると、1時間の使用量は100リットルと言った具合に、所有者に厳しい欠陥宝具。この宝具は常時発動しているようなもので、アンリ本人が無意識下で『アンリ・マユ』の形を造っている。ただ本人を形作る泥は元々の人間の体がベースとなっており、悪意を撒き散らすことはないのと、彼自身と対峙しても、悪意にさらされることはないだろう。

オリ宝具その一

『この世の全ての悪背負わされし者』  
アンリ・マユ

ランク：D 種別：対人宝具 レンジ：無し 最大捕捉：保有者と

同じ惑星に存在する全人類

由来：無し

主人公が『この世全ての悪』となる時に神に頼んだ「加えたい能力」が宝具となっている。最大捕捉人数からもわかるように地球上に生きる全ての人たちの悪意や負の感情といった人間の負の面を際限なく吸収し、魔力と泥へ変える宝具である。

これも無意識下での常時発動型の宝具であり、『この世』の『人間』すべての負を対象とし、負を魔力へと変換する宝具である。意図して一定の対象からの負を吸い上げることも可能。

欠点として、無意識下なのは魔力の『貯蓄時』であり『使用時』は意識的にせねばならない上、使った分だけの人間の負の感情が魔力とともに使用者に流れ込んでくるという欠陥も併せ持つ。どんな状況であろうがそれを止めることはできないので、これもまた「クソツタレ」宝具の一つといえよう。だがこの宝具により、事実上は無限の魔力を保有している。

ランクが低いのはあくまで対象が『人間』限定であるためと、元々伝承として残されたわけでもなく、歴史が無く神秘性が低いため。ちなみにこの泥の魔力はアンリ以外は使用できない。（悪意に呑まれ廃人になるからもある。）

もしも、『このアンリ・マユ』が伝承として綴られ、歴史家に紐解かれるようになるまでの年月と伝説を残せばランクが上昇し、今以上の一高率で魔力泥に変換できるであろう。

二つ目の条件としては彼自身が一定以上の人間に信仰されるうことになれば、信仰と神性スキルと共にランクが上がる。なお、最高ランクはBである。

例・・・現段階：一日10000？ ランクC：一日50000？ ランクB：一日100000～（リットル表記はあくまで一例。実際はもっと多い。

オリ宝具その2

『？？？』

ランク：？ 種別：？？？ レンジ：？？ 最大補足：？？人

由来：？？？

全てが謎に包まれた宝具。本来の形は当然存在するが、誰もその形を知らない。

そもそも宝具と呼べるかどうか怪しいシロモノで所有者が真の祈りを捧げると発動するが、アンリはこの宝具のことを一切知らないし、感じ取ることもできない。

## サブキャラクター

神

特徴

言わずと知れた魂の管理者。輪廻する魂を延々と浄化と回収を繰り返し、送り出している。神といえど、彼（？）一人でそれらの『作業』をおこなっているので、当然何年かに一度のミスがある。が、この作品の主人公の様に不幸だったりと、ミスした人間には死後、その魂を自室に連れてきて念入りに『転生』させる。主人公の後に来た人物がいたようだが、本編には何のかかわりもないのでご注意を。

作中には登場しないが、他の神やその眷族からはその役割上「管理人さん」とさん付けで呼ばれるほどの人気（？）をもつ。その世界では割と有名神のようである。

地の文だけに止まるが、後々出番はあるかもしれない。

能力

基本、人の魂の管理という大きな仕事に就いているので、『万能』といつても差し支えないほどの力を持っている。あくまで『力』なのでミスもあるが、それをこの能力で補うことができる「使い勝手のいい能力」とは本人の談。浄化を行わず、送り出す『被害者』た

ちに能力をつけるのもこれを使用している。

『被害者』たちが浄化を行わずとも再び送り出すことができるのではなく、ミスをした場合は魂の中身に空きができるので、「その空き容量に記憶と人格を突っ込み、他の部分を浄化したと同時に能力を授ける」という力技ながらも纖細極まりない方法を使っているため。

ちなみに『被害者』と会話をしている際も並列思考で次々と魂の管理をしているので、ゆっくり話すことには管理の弊害はない。むしろ人間と話をすることができるので、新たな刺激にはちょうどいいとも考えている節がある。だからといって罪の意識がないというわけではない。

## 人物・紹介（後書き）

妄想全開で主人公設定です。偽り写し記す万象は公式から拝借し、ランクと効果範囲は想像です。

宝具と保有スキルが多すぎるかもしれません、この程度がちょうどいいかとも思っていますので、どうかご容赦を。

今回も来てくださった方はありがとうございます。初めて来た方もこのような自己満足の小説をお楽しみいただけたらと思います。

追記：2011/11/20 身長・体重変更 163cm 17  
4cm 54kg 59kg 宝具：???? 追加

2011/11/28 宝具『この世の全ての悪背負わされし者』ランク向上条件追加

**生贊・悪神・召喚（前書き）**

時系列は原作開始3年前あたりです。

先ほどの白い世界とは一変し、真っ黒で真っ暗な闇の世界がある。そこはいわゆる世界をつなげるトンネルのようなもので、普通の人間ではまず、お目にかかることも無いだろう。だが、苦悶の表情を絶やさず、痛みに耐えられぬ悲痛な声を張り上げ、誰にも聞かれることなくただ下に墜ちてゆく肉塊が一つ、そこには存在していた。

「ギイ ガツあ！ウゲ・・・ぎツアああ嗚呼ああ嗚アアアアあ  
あ嗚ああああああああああああアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアツア！――――――！」

その肉塊からはこの世のものとは思えぬほどの奇声。もし、これを聞き続けていた人間がいるとすれば、その人物は確実に発狂するだろうというもの。

彼が望んだ『力』は『この世全ての悪』の『英靈』としての能力と  
いう選択をしたことが入っていることに起因する。元々、原作の英  
靈となつたアンリ・マコ。生前は魔術を知らず、加え、呪いなどの  
人を苦しめる魔術が発達した村で悪神として祀られ、苦しめられ、  
名前をはぎ取られ、この世の悪を『背負わされた』、ただの青年が  
そのまま英靈の座へ登録された。ゆえに英靈として彼と  
同じ存在、それを強化したような形に成ろうとするのなら、同じ手  
順をこのトンネルの中で『世界そのもの』から受けねばならない。  
それゆえに彼は苦しみ続けているのだ。

「アがあ、ギイ・・・・・・・・力ハあツ！－！－！」

痛みは、苦しみは、憎しみはまだ終わらない。だが気絶することも死ぬことも許されない。それでも自己を『保たされて』、延々と墮ち続けてきた彼は、いつのまにやら。ただの肉塊から人の形へと近づいていた。

「ヅウあツーゴオエエエー！」

とどめと言わんばかりに『右眼』と『咽喉』を貫かれたような今までとは比べ物にならないほどの痛み。それを最後に、儀式は終了した。ついに意識を手放した彼は、世界の中を墮ち続けるのであつた。

あれから何時間。いや何日・何月もの日がたつたのだろうか？

『この世全ての悪』となる儀式を終え、自我と理性を取り戻した彼・・・いや、アンリ・マコはいい加減、墮ち続けるこの状況に飽き飽きしていた。

「オレの受け入れ先つてどんな所かねえ？さつやと自分の足で歩きたいんですけど！」

訂正。少しばかりキレていた。それも仕方がないだろう。これまでの間、彼は自分の能力の確認と実証を繰り返し、完全に使いこなせるようになるまで、時間を使いつぶしたのだから。……まあそれを以つても世界の壁を越えることはできなかつたのだが。はたから見ると危ない人の様にブツブツと一人、愚痴り始めた彼は

今やただの肉塊から立派な人の形をしていた。

ボサボサの黒い髪に、額には赤い布のバンダナ上半身は裸同然であり、腕には黒い包帯のようなものを手の甲から肘のあたりにかけて巻いている。足にも同じものがあり、こちらは踵かかとを除いて脛すねから足の甲にかけてだ。ぼろ衣を腰布として使っているように深紅の布が巻かれ、その下には原作と違い、しっかりと赤い布の下着をはいている。その全身には呪いの印である黒と赤の模様がのたうちまわるようになっていた。

望み通り、サーヴァント『アンリ・マコ』としての彼がそこに居た。それはともかく、相変わらず墮ち��けていたことは変わりないが。さか一召喚か？

「・・・んん？ 何だこりや。なーんか引っ張られるような感覚。まさか一召喚か？」

その予想は当たりである。彼を受け入れる世界によつやくたどり着いたのだ。なにかに引っ張られるような感覚は、世界そのものか、魔力を持つた人物が彼を召喚したことには他ならない。

期待で興奮しながら待つ、彼の居た世界にひびが入る。

ピシイ！ パキッと音を響かせながら世界が開き、彼にとつては久しい地球の景色が無かつた。

「ハア？」

そこに在つたのは全てがねじ曲がつたような空間。ドロドロとした空気は人を不快にさせ、そこに存在する物は見るだけで嫌悪感を呼びような形状をしている。だが、ここに入ったその瞬間、彼に負の感情が流れ込み、自身の泥の絶対量が増加したのを感じた。

「なるほど。人間の負の感情をそのまま世界として創られてやがる。

『固有結界』みたいなもんか』

『固有結界』それは展開した本人の心情風景を現実へ侵食する『大禁呪』のことである。彼が一人納得を浮かべると、その世界に不釣り合いな明るい感覚を感じた。

それはマスケット銃と呼ばれる武器を携えた少女で、その少女にはあまりにも不釣り合いなほどの大さの砲身には、これでもかといふほどの魔力が感じられる。

彼女の銃口はその眼前に存在する大きな目玉に直接、髪と口がはりついたようなグロテスクな外見をしていて、その眼球からはその少女がやつたのか、毒々しい色に染まつた血が流れている。

「ティロ・」

一段と砲身の魔力が高まつた。どうやら必殺技を打つようだ。

その時、彼女の後ろに小さな影が浮き上がる。彼女は眼前の化け物に神経を注いでいて、気付いていないようだ。それを見た瞬間、彼は獣となつて駆け出した。

「フィナーレ！」

大爆発。煙が晴れるとあの化け物はいなくなり、黒い卵のようなものが残つていた。だが、彼女の後ろに在つた影が実体を持ち、腕だけの化け物がその掌にある鋭い歯を覗かせて襲いかかる・・・！

「え？」

悪寒に気付いて振り返つた少女は心底不思議そうな声を上げる。目の前には大口を開け、その歯で切り裂かんとする化け物がその瞳に映つていた。

だが、時既に遅し。銃を取り出すスペースも時間も彼女には不足していた。あわやその手が少女を「生きものにせんとした瞬間。

「シャツハウ……」

ズシャアツ！と肉の裂かれる音と共に、眼前の化け物がその距離わずか数センチというところで真つ一つにされた。切り裂かれた化け物は面に受けた空氣抵抗に従い、少女の両脇をすり抜けながら力なく地面へと落下し消滅した。

その場にへたりこみ、化け物を切り裂いた人物をただ、茫然と見上げる。

化け物を切ったと思える、歪な形をした逆手の短剣を両手に持つその『男』は、少女に笑いかけながらこう言った。

「お譲ちゃん、アンタがオレの『マスター』かい？」

そこまでが限界だったのだね。今まで溜まった恐怖が体を巡り、なぜか心に残った掛けられた言葉の意味を疑問に感じ、少女は意識を手放した。

「う……ん」

少女が目を覚ましたその場所は自身がよく知る場所、自室のベッドの上だった。

「よう、目覚めたかい？」

聞いたことがある声色に気付いた反射的にその方向を見る。

「混乱してつとこ悪いが、バスも繋がってる。どうやら嬢ちゃんがオレを喚んだらしい」

バス？喚んだ？状況が分からず、初対面の男の前で首をかしげる。そこでようやく本来の意識を取り戻した少女が投げかけた言葉は疑問だった。

「あなた、誰なの！？何で使い魔を倒せたの？どうして私の家を知っているの？こたえなさい！」

「オーケー、オーケー答えながらちょいと落ち着け、な？ほら深呼吸。吸つてー吐いてー吸つてー吐いてー」

思わず言われた通りに深呼吸をする少女。その目はいくらか落ち着きを取り戻し、理性的な光が灯った。いつの間にか黄色い宝石を胸のあたりに携え、再び問う。

「じめんなさい。私としたことが取り乱してしまったようね。それで、改めて聞くわ。あなたは誰？使い魔をどうやって倒したの？私の家を知った理由どうして私を運んだのかを答えなさい」

「うわ、質問増えてる」

「いいから答えなさい」

「へいへい、そんじゃ一つ目。

オレはサーヴァント。クラス名はアヴェンジャー。あんたが召喚し

た英靈つて存在だ。これは肩書きで真名は別にある。・・・おいお  
いそう睨むなもつちよい冷静になつてから教えるつて。

氣を取り直して「一つ目、さつき言つたよつにオレは英靈だ英雄が化  
けモノ一匹倒せん通りもねえだろ。

三つ目はしばらくなつたらきた真つ白なしゃべる小動物に聞いた。ま  
あ、家聞いたら答えてすぐどつかに消えたが。

んで最後、アンタを運んだのはあんたがオレのマスターだからだ

素直に答えた男にも驚いたが、中にも驚愕に値する単語が入つてい  
た。『サーヴァント・アヴェンジャー』『英靈・英雄』そして『マ  
スター』。英雄の部分は理解できるが、英『靈』であつたり、そん  
な存在を自分が『召喚』したことであつたり疑問は尽きなかつた。  
が、仮にも自分の事をマスター（主）と呼ぶのだから答えるだらう  
と思い、警戒を続けながらも、さらに問いを投げかけてみた。

「聞きなれない単語が多くて、少し混乱していたみたいね。私がマ  
スターというのなら答えなさい。詳細にあなたの正体と英靈、それ  
からマスターについて」

「マスターとしての命令なりやつしますかね。んじゃ、よーく聞い  
てくださいな」

おどけたようなしぐさをしたのち、真剣な表情に切り替わり、一呼  
吸を置いてアヴェンジャーは話し始めた。

「英靈つてのは生前、その功績をたたえられた人物が伝承となつて  
『英靈の座』つてとこに登録された奴の事だ。一口に英靈といつて  
も純英靈と反英靈がいる。前者は名の通り正義だかヒーローだか呼  
ばれる奴らだ。後者はその逆、ヒーローと相対した悪だつたり退治  
された化け物だつたりするのもいる。そういうた奴らを『英靈の座』

から魂をコピーして大量の魔力の塊『エーテル体』で構成された最上位の使い魔の事だ。

大抵、英靈は宝具つていう必殺アイテムを持っている。『アーサー王ならエクスカリバー』、『クー・フーリンならゲイ・ボルグ』って具合にな。

それから、オレ自身は『反英靈に属している。まあ英靈のなかでもオレに負けるような雑魚はいないつてぐらいの『最弱の英靈』だがな。大抵英靈が召喚されるような事態は『聖杯戦争』か『人類の危機の殲滅』の二つだが、今回はイレギュラーな召喚だと言つとこう。』んで、『マスター』つてのはあんたが思つた通りの存在。つまりは英靈の召喚主であり、主様だ。この権限が必要なのはさつき言つた『聖杯戦争』でな、名前の通り『聖杯』つていうなんでも願いをかなえることができる御都合満載の杯を取り合つ二人一組のマスターとサーヴァント七組の殺し合いだ。

聖杯は最後に残つた一組を認め、その前に姿を現す。さつきイレギュラーつたのはこのことでな。その戦争にマスターの体のどつかに英靈つつ規格外の存在を縛り付ける絶対命令権『令呪』が現れるんだ。だが、聖杯もねえのにあんたの左肩に令呪があつたから、イレギュラーながらもあんたがオレの主つてわけ

少女はそれを聞き、幸い半袖だつた左肩の服をまくつてみると『逆月に一本の絡み合つた線があり、それを囲むように円が描かれている模様』確認し、息をのんだ。

「見つけたみたいだから話を進めつぞ。その令呪は三回まででな、最後の一回を使うと英靈はマスターからの魔力供給を離れ、徐々に魔力をなくして消滅し、座にもどる。

ま、魔力は心配スンナ。オレを喚んだことにいくらか使つたみてえだが、オレの宝具のおかげで魔力の供給はいらねえし、オレ単品で行動できる。

最後にオレがいる利点についてはさつきみてえな化けモンとの戦闘の手助け、それからどんだけ離れてても、その令呪から繋がったパスを通しての距離が関係ない念話ぐらいだ。」

そう言い括り彼は沈黙した。・・・もつともにやけ笑いをしながら、だが。

沈黙が続き数分、彼女は意を決して口を開いた。

「自己紹介をしましょ？」

「・・・ハ？」

「唔然。アヴェンジャーの表情はそれに尽きた。だが少女は構わずまくしたてる。

「あなたは反英雄といったけど、キュウべえもあなたに私の家を教えたということは悪い人じやないみたいだしね。

私の名前は『巴マミ』。ここ、見滝原町の平穏を守る『正義』の『

魔法少女』よ。これからよろしくね？アヴェンジャー』

「クツ・・・ハハハハハツハツハツハツハツハツハ・！ああーー面白え！久しぶりに馬鹿笑いさせてもらつたもんだ！」

突如、大声で笑い出したアヴァンジャー。その奇行に、名を名乗つた黄色の少女、巴マミはその職業柄、人とあまり触れ合わないゆえ、なにがいけなかつたのか判ららず慌てだす。

そのコメディちっくな場面は続き、笑い終えたアヴァンジャーは挑戦的な笑みを浮かべ言葉を返した。

「たしかにそうだ！まずは名前の交換がマスターとサーヴァントの

契約。ならば名乗ろ。う

オレの真名は『アンリ・マコ(この世全ての悪)』。

ここに契約は完了した。これよつこの身はアンタの盾となり、剣となるつ。

クソ古い悪神を背負つただけの雑魚だが、それでもいいなら。オレはアンタにつき従おう!』

そうしてその夜、一組の奇妙な主従が生まれた。

方や人を守り、『希望』を導く正義の魔法少女。

方や人に怨まれ、『この世全ての悪』を背負う反英雄。

彼らがこれから紡ぎだす物語は一体どう転ぶのか?救いが存在しなかつた『絶望』の世界に異物の『悪』が紛れ込み、『舞台装置』の歯車もまた、動き出す。

## 生贊・悪神・召喚（後書き）

マリヤさんの口調が合ひにいか心配です。原作ちりぢり資料ちりぢり見ながら書いてるのであんまり矛盾はない・・・はず! あつてもご都合のタグで打ち消せるといいなあ。キユウべえさんは様子見のため姿を隠しました。

とにかく今回もありがとうございました。

## 魔・世界・魔法少女（前書き）

説明編、紹介編はここで終わります。

今回、あの台詞を勝手に改造しました。すいません

## 魔・世界・魔法少女

「魔術に聖杯……ねえ」

「魔法少女に魔女……ってか」

「にわかには信じられないけど、あまり意味はないよつだ。その結果が地球の科学と同じなら、その程度のエネルギーじゃ宇宙は救えないよ」

あの夜から一夜明けた。

その日の午後、マミが小学校から帰ってきてから、情報交換として各々の世界の『特殊な事情』を互いに話し合つた。

誰もアンリの服装に突つ込まないのは御愛嬌である。

アヴェンジャーが魔術についてこんな簡単に話したのは、キュウベエという存在が居たからもある。帰ってきたマミの方に乗ついてた白い生物。もといキュウベエが言つには、もしこの世界に魔術の歴史があつたなら、自分たちがすでに発見し、その理論について研究か何かを進めてあるはず。と言つたからだ。

その考えをまとめるようにキュウベエが口(?)を開いた。

「とにかく、君の言つ『聖杯』があるならともかく、魔術じや宇宙の延命はできない。男の君が魔力を持っていたりと中々興味深い話だけど、僕はこのあたりでお暇するよ」

「あっ、おい！魔術にはまだ続きが……って行っちゃったよアイツ」

アヴェンジャー改めアンリが引き留めようとするも、その願いもむ

なしぐ、キュウベえは姿を消した。どうやら他の魔法少女の候補を探しに行つたようだ。

ちなみに彼が引き留めたのは、キュウベえに魔術について話したことは『科学で再現できる』ことは魔力を使つたものと手順は違えど同じ結果として現れる『ぐらいのものあり、『魔術回路』や『サークル』、『』について等は全く話していない。・・・もつとも『回路』と『』については誰にも話す気はないのだが。

「キュウベえには後で私が話しておくれ。それでアンリ、こちらの魔法少女についてはこれで全部話したと思つけど、魔術の続きつて？」

「ん？ ああ、わざわざいつが言つてたエントロピーをも覆すかもしれないつてのが、オレのいう『魔術』だつて言いたかったんだが、・・・アイツも気が早いもんだ」

「魔術？ 魔術と何が違うのかしら」

「よく言われる言葉ベスト3のトップをよくぞ聞いてくれましたつと。それはともかく、魔術はさつき言つた魔術と違つて『どんだけ金と時間をかけても科学では結果をもたらすことができない』つていう反則の塊でバカげたシロモノだ」

「ふーん、アンリはどんなものがあるか知つているの？」

「つつても全部の説明はできねえんだけどな。全部で5つあつて・・・えーと

第一魔法は『無の否定』。実際のとこ知らん。使い手はすでに死んでるらしい。

第二魔法は『並行世界の運用』。ゼルレッチつづの爺さんが使える

んだが、よくわからん。

第三魔法が『魂の物質化』。死んだ人を蘇らせる]こともできるらしい。不老不死の足掛かりにもなるつてつて聞いたことがある。

第四魔法なんだが、これ本当に誰も知らないんだよなー  
最後に第五魔法で『青』。詳細マジで不明。使える奴は青崎青子つて女で、歩いた後にはペンペン草一本生えないとかゆう物騒な噂しかないから、『破壊』に関するかもつて噂もある

あいも変わらずの長話。まだ小学生だと『マミ』に聞かせるのも難しい単語が多く、普通なら首をかしげるであろうそれを、マミは少々特殊な生い立ちゆえに積み上げてきた知識を使い、アンリの話を真剣に聞き入つていた。

「確かにとんでもないものばかりね。それじゃ本当に魔法よ。私たちのとは全然違うのね」

「だからこそ、魔術師たちも魔法つて呼んでるんだがな」

呆ながらも一人して同意する。アンリはその魔法にも再現できなかつた世界そのものからの移動をどうやって果たしたのか。と考えるまでの思考には行き着かなかつたのが、まだ幼いゆえだらうと思ひ、魔法についてを話していたその内心で、ここにいる理由を聞かれずホツと息をつく。いざとなれば令呪があるからだ。  
だが突然、思い出したかのようになにかは話を切り出してきた。

「やつ言えばアンリは反英雄つて言つていたわよね?・昨日の時の自己紹介で悪とか神様とか言つていたけど、どこの英靈なのかしら」

どうやらアンリ・マユについては知らないようだ。

確かに、いくら知識をつけようと、それは大人の様に自分ひとりで

何でもこなせるようになるためであり、ゾロアスター教などはその宗教の人には悪いが、日本人にとって雑学の域といつても過言ではない。

キュウベえはアンリ・マコの名称からその正体をすでに一部は看破できていたようだが、マミは知らない。説明が面倒だと思った矢先、いい方法をアンリは思いついた。

「あ、そうだ。マスター。チョイと皿をつむってから、オレに集中してみてくれ」

「え？ ええ・・・」

いぶかしみながらも言われた通りに皿をつむり、アンリに意識を向けてみる。

「あら？ なにかしら、これ。頭の中に表が・・・」

「そいつがオレの能力を現すパロメータだ。真名がわかつてゐるなら説明もわかるだろ」

どこか投げやりに説明をするアンリ。彼とて多少は疲れたようだ。マミの頭にはこんなものが映っていた。

クラス：アヴァンジャー

真名：アンリ・マコ

性別：男性

属性：虚無

身長：160 165cm

体重：52 54kg

パラメータ：（）内は何らかの方法で強化時

筋力・D (C +)

耐久・E (D +)

俊敏・C (B +)

魔力・B - (EX -)

幸運・C

宝具・D B +

クラススキル・アヴェンジャー

保有スキル

対魔力・D

一工程による魔術を無効化する。効果としては魔除けの護符程度。

殺害権限：

聖杯・EX

神性・C + (A +)

単独行動：

宝具

△詳しく述べは人物・紹介にて△

両者ともに静かになつた。マニはこのステータスを読み取るのに集中しているようである。

対するアンリは喋り疲れたとも取れる表情をし、己がマスターの集中を乱さぬよう静かにその場から退室。何か時間をつぶせることだが

ないかを探しにリビングへ向かった。

時は流れ、外はすっかり日が落ちている。マミの片手には辞書があり、読めない字や意味はそれで何とか読んでいるらしい。

だが、その近くにアンリはいなかつた。彼は台所でマミの夕飯を作つていたからである。マミの好物を知らないので、マミでも食えそうなものを、と考え生前の家事スキルを發揮し、簡素に栄養バランスのとれた晩飯を作つていた。

・・・余談だが、恰好は英霊時の服装そのままである。

とりあえずは完成したので、いつたん食事をとらせようと思つて、パロメータの読み取り作業を中断させるためマミの部屋に呼びに行つた。

アンリが部屋に入った瞬間、何かが腹のあたりに飛び込んできた。耐久がEのアンリは「ウグッ」とむせながら、ぶつかつてきたマミに目を移した。

「どうして最初に言つてくれなかつたのよ！あなたは何も悪くないじゃない！あんなふざけて理由で殺されて、それで・・・それでえ・

・・！」

突然のこと驚いたが、マミからかなりの悲しみと怒りを感じる。ステータス内のプロフィールにある『このアンリ・マコ』の生い立ちを見て、これほど感情的になつてまで自分を心配してくれたようだ。

何故かはしらないが、マミから発せられる悲しみや怒りといった負の感情が異様に多いので、宝具の効果を集中させながら彼女からの穢れを吸収する。

そうして泣きやむまでの間、子供を諭すように頭をなで、アンリは

「いつ言った。

「別にマスターがそこまで悲しむ必要もねえだろ？すでに死んじまつたもんはしょうがねえし、オレはここに『いる』つてだけで十分だ。

それによマスター、オレはアンタと出会えてよかつたと思つてゐるし、そのおかげであの世界の狭間を彷徨い続けなくて済んだ。だからそう泣かないでくれよ。アンタは一人のヒトを助けた凄い人間なんだぜ？」

彼の一一度田の生は所詮、借り物の力と命だ。ここに存在することができるのはマミがこの世界に召喚からであり、それが無ければこの場所にはいない。加え、このように他人の理不尽に嘆く事が出来る優しいマスターだからこそ、彼もこの居場所を持つことができたのだ。

泣きじやぐるマリの顔を、食事に使わせよつと思ひ持つていた手拭いで拭きとる。

「ああつと、それどづいぶん集中してたようだから晩飯。簡単なものだが作つといた。

いろいろ聞いて、今みたいに泣いて疲れただろ？マスターは飯食つて風呂入つて十分に英気を養つといてくれ。

明日つからまた魔女退治はじめるんだろ、オレもついてくから。な？」

「・・・ええ、ありがと。アンリ」

まだ涙目ながらもアンリの励ましでいくらか調子を取り戻し、気丈にふるまつマミ。アンリはその手を引いてダイニングへと連れて行つたのであった。

夕飯の後、いつの間にかキュウベえも姿を現し、いつものマミの自室にて明日以降の予定を一人+一匹で話し合っていた。

「さつきはありがと。しつちが逆に慰めて貰つちゃたわね」

「いや、マスターの管理も従者の役サーサーヴァント田タケですね。そう気にすんな

「？僕がいない間に何かあつたのかい」

「いや別に」

「まつたく、わけがわからないよ

そして二人は笑い始めた。昨夜の様なものではなく、ただ純粋な可笑しさとして、ただ一匹、キュウベえは理解できないようだが。

「昨日魔女が倒されたわけだし、私のソウルジエムにも反応がなかつたから今日は大丈夫だったけど、明日からまた探索を始めよう。ちょうど学校も土日の休日だし、アンリの戦いを一度ちゃんと見ておきたいしね」

「了解だマスター。オレも「ああ、そうだ!」……ビうじた?マスター」

「それよ、その『マスター』って呼び方。私のほうが年下だし、こ

「だから名前で呼んでくれるかしら」

「へいへい、そんじゃマリと・・・ああ、やつぱこつちのが呼びやすい今度からそう呼ぶさ。それと、言いかけたが明日は『靈体化』してついてくから人目は大丈夫だ」

「靈体化？そんな魔術があるのかい？」

「いいえ、サーヴァントの能力の一つらしいわ。他にもアンリから色々聞いたけど・・・やっぱりキュウベえには秘密にしておこうかしら」

「へえ。地球の科学でまだできないことのようだけど・・・まあ魔術にあまり期待していなかつたからね。別にいいさ。明日、アンリが能力を使うときがあるなら、その時にまた来るよ。じゃあねマリ、アンリ」

そう言つと例の『ごとく、キュウベえは夜の闇にまぎれ溶け込んでいつた。

（ん？ そういうやアイツ、負の感情が全く感じられなかつた。常にポジティブ思考の持ち主なのか？いや……）

吸収できるのは『人』の負の面だけだが、その性質上、人の感情にも敏感なアンリは見るたびにキュウベえが怪しく見えてくるのだが、気の迷いだと思考を払う。その時

「明日、戦いがあつたらアンリのバックアップは任せで。絶対に守るから」

マミが決意のこもった瞳をじめに向け、話しかけてきた。それに対しアンリは

「むしろマリを守るのがサーヴァントの役目だ。そつちの支援なんざいらねえぐらこあつといふ間に勝つちまうからそつちこそ覚悟してけよ?」

と、いつもニヤケ顔で勝ち誇るように宣言した。それに答えるようには釈をし、眠りに入るマリ。アンリは靈体化し、屋根の上に移動して己がマスターの家を荒らそうとするふとどきものがいかにか警戒に入るのであつた。だが、アンリが最強なのはあくまで人間に対してであつて、人外には最弱のはず。それでも勝つといったのはマミの信頼に対する意気込みだろう。

虫の音が響く夏の夜、『この世全ての悪』を受け入れた見滝原町の運命は僅かに狂いながらも回り続ける。

初陣の時は

近い

## 魔・世界・魔法少女（後書き）

なんかやつむかこました。マリもんつていいまで感情的だったか？という疑問もありますし、いくら親がいないからといって魔術を俺解釈で聞かせるのもどうかと。って投稿してから思いました。皆さんでイメージが壊れてしまったという方がいらしたら、誠に申し訳ございません。

それでは、次回でついにアンリがまともに戦います。彼はどんな戦いを魅せるのか、作者にもわかりません。

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。

## 夢見・宝具・潔癖・初陣（前書き）

オリジナル魔女出しました。原作始まる前にはまた、キャラクター紹介入れるつもりなので、そこで解説はしておきます。

## 夢見・宝具・潔癖・初陣

高速道路……だらうか。何台もの自動車が押し合い、潰れ合い、横転している。どのフロントガラスにも赤い液体が飛び散り、それを流す人々は皆が痛みと恐怖で顔が歪んでいた。その中には、前方席を上から押しつぶし、他の車に乗られた一台の車がある。

そこで視点は変わり、中にある人物かららしく、景色がかすんでいる。その外には白が特徴的な不思議な生物がこちらを見ていた。唐突に頭の中に声が響く。

〈君の願いは？〉

すがれるものが見つかっただからだらうか、その視界からは左手が白い生き物に向かって求めるように伸ばされる。その人物の願いは決まっていた。

〈助けて…〉

視界は暗転し、意識が浮上する。

「…………はつ！？」

夢を見ていた様だ。赤と黒の特徴的な男  
し思考にふける。

（やつべえ、今のつて多分マニアの……）

アンリは、目を覚ま

そこまで考え頭を振り、思考を放棄した。そして思考を切り替え、急ぎマミの元へ向かつ。

あの『夢』はバスを通じ、マスターとサーヴァントがそれぞれの記憶の一部を垣間見る現象であり、F a t eの遠坂凜と衛宮士郎も体感していたものと同質である。マミからの記憶が『契約』したときの光景だとする。ともなれば、マミは自分が『力を授かった』時の光景を夢で見た可能性がある。いくらグロテスクな魔女との戦いに慣れていても、あの光景はさすがにまずい。

そういう考えのついでにマミの部屋までたどり着いた。

「マミ！大丈夫か！」

バタン！と勢いよく扉を開けた先に居たのは

「ひゃあーべ、どうしたの？アンリ？」

いきなりのアンリの登場により驚愕で腰が抜けたマミがいた。主の無事を確認でき、女堵の息を吐くアンリだった。

なんやかんやあって朝食後の午前9時

「なるほどね。近くに魔女でも出たのかと思つたけど、そういうことだったの

「朝っぱらからアホな勘違いでバカ騒ぎしてすまんかったー！」

そこには日本の誇る謝罪方法『土下座』で頭を下げるアンリの姿があった。

「それにしても契約のバスによる記憶の流出か……私が見たのはそちらの魔術についてが少しあつたわ。でも、アンリはやっぱりあの時のを見ちゃつたのね？」

「……ああ。」

すがすがしい快晴の朝に似合わず、氣まずい空気がその場には流れだす。だが、そこでマミがゆっくりと口を開いた。

「まあ、いいわよ。過ぎたことだし、それに生きていればそれでいいって、昨日私に言つたのは誰だつたかしらね？」

その言葉にアンリは頭を上げ、口を開きながらマミの顔を見た。

「あー、オレ。です」

「ハイ、よろしく」

アンリが召喚されて一日目。この一人の間にはしっかりと主従関係が結ばれていらし。…………だが、想像してほしい。この時、高校生ほどの男が小学生の女の子にいよいよ遊ばれるところ、かなりシユールな場面であることを。

それはともかく、マミは満足そうな表情をしてアンリに言つた。

「その夢の事は置いといて、今から魔女を探しに行くわよ」

その言葉に反応し、アンリは血の塊を両手で呑こして氣を引き締める。

「よし……。了解だ。そつこや魔女はビビッサつて見つかるよ~。『魔女の口付け』でマークイングされた奴の後でも追いつのか?」

「残念ながら違つわ。魔女を見つけるのはこれ

そつこつつ懐から取り出したのは、マリの『ソウルジム』

「これが魔女の魔力に反応して光を放つ。後はこの光を頼りにって……あら~。」

「んあ?~したよ、なんか調子でも悪いのか?」

「いえそれがね、一昨日から魔力を使ってから『グリーフシード』にもあててないのに、濁りがほとんど無いのが気になつて……」

不思議そつこ頭をかしげるマリ。それに心当たりがあるのか、アンリは氣付いたような表情で囁く。

「たぶん、『あれ』じゃねえか?昨日、マリが泣きついてきた時「ちよつ!~!」……まあその時にオレの宝具使って負の感情を吸いだしたんだよ。そんときにマリの魔力も少し大きくなつたから変だとは思つたんだが……あれ?~い、ビビついたよ」

「あなたの宝具にそんなものがあつたのは覚えてるけど、それってへ問い合わせを投げかける

「あなたの宝具にそんなものがあつたのは覚えてるけど、それって

吸い取つた後にその人に魔力を与えるものなの?」

「いや、吸われた奴は気分爽快!ぐらいにはなつても魔力が回復したりはしねえ。それに、オレの魔力は普通なら他人に分けることはできない仕組みのはずだ」

それを聞くとマリは少し考え込むが、一つの可能性に行き当たる。

「契約のパスのあるからかもしれないわね。それ以外はあまり考えられないけど・・・そちらの魔術って不具合が生じたりはしないの?」

「むしろ穴だらけつつもいいかもな。記憶の代わりに知識として見ただろうが、第五時の聖杯戦争でキャスターがアサシンを召喚するとかルールの穴をついたこともできたから、今回は『戦争』つてわけでもないし、上手いことオレの宝具の穴について魔力だけが持つて行かれたのかもしれん」

疑問は尽きぬばかりである。

「あーもう!そこまでだ!ここにいたが暮れちまう。その間に魔女に人が食われんのも胸糞わりい。わからん事はほつといてわつわと行こ」

「それもそうね。このことはまた今度にしましょ」

このままではよくないと思いしづれを切らしたアンリが無理やり話を変えた。マリもそれに同意し会話をきりあげる。

「それじゃ探ししましょうか。アンリは靈体化してちょうどだい

「ねつ

「氣合いを入れなおし、玄関に出た一人。魔女を探しに町へと向かうのであつた。

家を出てから魔女は見つからず、すでに時計は午後の6時を指している。

赤く染まつた夕焼けの下、光を放つソウルジエムを手に、人気のなくなつた路地裏を歩くマミの姿があつた。

どうだ?かれこれ9時間くらいは経つたが、反応あるか?

ええ、こここの奥から。ソウルジエムが反応してゐ

念話で互いの意思交換をする。ついに魔女の反応を見つけたりし。

結界に入つたらすぐに実体化する。魔女がいるところまではそれぞれで探す。見つけたら念話で集めだ。それでいいか?

異論は無しよ。それじゃ、行きましょう

結界に飛び込んだマミの傍らでアソリが姿を現した。

「つひやー、これまた趣味の悪いこいつだ

「・・・」の魔女はずいぶん派手好きの様ね

そう言つた二人の前にある結界は装飾過多といつても過言ではなかった。

路地裏の薄暗い壁とはうつて変わり、城の様な建物にこれでもかといつほどそこかしに張り付く宝石や金銀財宝。それが普通の物ならまだしも、その貴金属はどこか色がくすみ、外観も関係なくバラバラにくつついでいることなどことなく不快感が漂う。

「来たわ！使い魔よ！」

「わかつてゐ。ンじゃまた後で！」

出てきた使い魔は、ピッケルやスコップを持ち、ぼろ布をまとったミイラのようだった。この使い魔の役割は『発掘』である。

それを見て走り出した二人。マミの手にはいつものマスケット銃、アンリの手には先日の使い魔を切り裂いた歪な形をした二つの逆手短剣。『右歯<sup>ザリチ</sup>噛咬<sup>ヒ</sup>』と『左歯<sup>タルウイ</sup>噛咬<sup>ヒ</sup>』を出現させ、一一手に分かれて使い魔を掃討してゆく。

アンリの振るう剣には型など無く、本能のまま力任せに剣が振られる。その剣はソードブレイカの役目通り、彼にむかって振りかぶられるピッケルを巻き取り、もう片方の刃で使い魔達を切り裂いてゆく。

たとえ英靈として最弱であれど、神の加護により、下位ながらも同じ英靈と渡り合える力を持つた彼の前には、化け物たる使い魔であれどもその勢いは止められなかつた。

対するマミも負けてはいない。リボンで敵を縛り上げ、それを銃でまとめて葬り去るという効率のいい戦法を行つてゐた。迫りくる大數を縛り、撃つ。縛り、撃つ。

使い魔達はその数を減らしていった。

それを繰り返し、一人が十分離れたところでマミからアンリに念話を入った。

魔女を見つけたわ！ええと、場所は・・・

アンリがそこからすぐに行き当たりを右に曲がって直進したところだよ

キュウベえ！？

まったく、アンリの力を見る頃にはそつて行くと言つてたじゃないか

どうやらキュウベえが正確な位置を教えてくれたようだ。そのことに驚きつつも、アンリは言われた通りに歩を進める。曲がった角の先には一人が見えた。

「見つけたっ！無事か！つと、ありがとなキュウベえ」

「ええ、こつちは平氣よ。キュウベえもありがと」

「ソーカい。しつかし、あれが魔女か・・・キモッ」

「氣をつけてね、私の銃じやあまり傷がつかなかつたわ」

そういつたアンリたち三人の前にいる魔女の名は『ハイミー・ナルシッソス』。

『潔癖の魔女』であり、その性質は『傲慢』。その体はギラギラと輝く宝石や金が不出来な球体に張り付いていて、球体自身も垂れた脂肪のようにぐにょぐにょと蠢いている。

突如、その表面に張り付いていた宝石が離脱し、三人に襲いかかつてきた。

「甘じわー！」

ギギギギイン！と弾き返した音が響く。マミはリボンを田の前に展開し、その全てを防ぎきったのだ。アンリがリボンの合間を走り抜け、叫んだ。

「ちよつとー・アンリー！？」

「我慢してくれよ？ちょっと氣分が悪くなるかもしんねえがなあ！マミー・キコウベえーそこからじっかり見ておきな！」

『無限の残骸』<sup>アンリミテッド・レイズ・デッド</sup> オーーーーーーーー

「あやーー！」

「これは・・・」

その言葉をきっかけに、虚空や地面からは次々と見るもの全てが不快にさせられるような漆黒の『泥』が湧き出る。そのほとんどが魔女に向かい、内一つの泥の塊がアンリの足下からも出現した。

「ガツアアアアーーークソがあー・マジで頭痛えな畜生ー！」

その宝具の特性ゆえ、湧き出た分の悪意や悲しみ、怒りに晒されるアンリだが、それでも動きを鈍らせない。泥を操作し、魔女へと直線に向かった。

宝具を発動させてからは何故か先ほどより動きが鈍くなつた魔女だが、一直線に己に進むアンリを黙つて見ているはずもない。こちらに飛ばす宝石の量を増加させるだけでなく、同時に周りの金をいくつもの刃の様に変えて泥を切り裂いている。その近くには残つた使い魔も集合し、泥のバリゲードとなつていた。

「あんまり無茶はしないでちょ'うだい。」

後方からいくつもの銃声が鳴り響く。マミの援護により、アンリに向かつた宝石を撃ち落としたのだ。

「サンキュー！」のまま突つ切らせてもいい。「」

防ぎきれなかつた何体かの使い魔が泥にのまれ、その規格外の悪意に耐えきれず内側から自壊してゆく。何かに怯えるように金製の刃を増やしていく魔女だが、防ぎきれずに泥の一部がその体に触れた。

使い魔のように消滅はしなかつたが、魔女は不快な鳴き声をその結界に響き渡らせた。金や宝石は力を失うように地面に落ちる。当然ながら、アンリがその隙を見逃すはずもない。

「へりひとか！……」

間を詰め、掛け声とともに泥を纏わせた『右歯嚙咬』<sup>ザリチヒ</sup>を力任せに横薙ぎに振りぬいた。延長された斬撃は奇声をあげ続けていた隙だらけの魔女を、近くの使い魔ともども一刀両断にする。魔女がいた場所からはグリーフシードが出現し、それを空中で掴み取る。それと同時に結界は消え失せ、すっかり暗くなつた空の下に静かな路地裏が戻ってきた。

武器を消し、頭を右手で抑えながらも、軽い足取りでマミのいる場所にアンリは駆け寄つた。

「よつ、お疲れさん。あの泥にや触れてないな？」

「大丈夫よ。私自身は何ともないし、掠つてもいいわ」

「そいつは良かつた。あんときや援護サンキューな

「ええ、ちょっと危なつかしくてつい手をだしちやつた

「おかげで邪魔もなくたどり着けた。マミもやるもんだ」

パチン一と二人でハイタッチ。互いを健闘し合ひ、初陣が無事に成功したことを喜び合つていた。その後はすぐさまグリーフシード（以下G・S）でマミのソウルジェム（以下SG）の穢れを吸収する。それを見てからキュウベえが疑問を挿んだ。

「アンリ、やつるのは一体なんだい？やつのは泥からは絶望なんて比じやないほどの何かを感じたけど」

「ああ、お前には言つてなかつたか。ありや宝具つつもんでな？オレら英雄のシンボルが武器になつたようなもんだ。・・・まあオレの場合、使うのに大量の魔力がいるわ、疲れるわ、頭痛がやべえわの三重苦でな。あの泥を使つた分の悪意<sup>デメリット</sup>だけ全部こつち来て、残りは全部魔力が霧散するつづド二流の宝具だ。つたく、まだ頭が痛え」

「・・・へえ、やうかい」

どこかトーンが落ちたようなキュウベえの声。

「まあ、君が戦つてくれるなら魔女も倒せるだろ？ これからもマミをよろしくね。アンリ」

いつもの調子に戻つてそう言い残すと、キュウベえはGIGを咥え、路地裏の闇に消えた。

「？ なんだつたんだ、アイツ」

「あ？ キュウベえもいろいろ考えているんじやない？」

そう言つと、二人もまた帰路についたのであつた。

その帰り道、周囲には人影も見えないので実体化しているアンリは、ふと思いついた提案をマミにしていた。

「なあマミ、オレになんか服買つてくれないか？」

「服を？またどうして服なんか」

「いや、もし誰かにオレの姿を見られたときは、さすがにこの格好じゃあまりいだろ？そのもじもの時のために何とか言い訳できるよなことを」

「言われてみればそうね。それじゃ明日は服屋に行へからじんなのが欲しいか靈体化しながら教えてくれりうだい」

「おひ、ありがとな……ん？あー！」

「服を買ひ」とを決定したはいいが、彼はまた何かの問題点に気づいたようだ。

「今度はどうしたの？」

「いや……戸籍どうしようかなって……

「え？ああ……」

そう、召喚されてこの世界に来たアンリは戸籍といつものが存在しない。こんな幼な子の家に住み着いて、服を着ていたとしても全身刺青で身元不明の男……どう考えても怪しそうだ。

「これも明日、服買つたら役所行つて何とかするしかねえか。ハア……どう説明すればつかまらねえんだろ……色々オレってアウト過ぎただろ」

初陣で高揚した気分も、途中で気付いた大きな見落としにアンリの

気分は底に沈んだ。

「私も何とか手伝つから、ね？」

「つ、すまん……」

そして年下のマリに慰められるアンリ……これまたシユールな絵がここにあった。そしてこの後日、アンリは天氣を見て大きな問題に直面する。

その力の一端を見せ、勝利を收めながらも日常の罠にはまつた『この世全ての悪』（笑）。彼は新たな世界で今日も生きていくのであつた。

次回は裁判所で……ところどころならなこので、安心を。  
最初の方の『記憶』ではなく『知識』の流出は、全部神様つてやつの仕業なんだ……。

戦闘シーンつたなすぎつー短つーと書いてから軽く反省しています。  
だが、後悔はしていません。それから今回もマミさんが大人過ぎる  
気がする……。キャラ崩壊のタグを入れるかどうか迷いますが、  
しばらくはそのままにしておくことにします。

戦闘の泥の使い方は黒桜さんを参考に「できるかな?」と思つてや  
りました。宝具としての発動なしで鞭にできる桜さんマジぱねえつ  
す。

それでは今回もありがとうございました。

口算・両会（前書き）

今回は閑詫みたいな物です。何気ない休日のひと時書かせていただ  
きました。

日曜日。

それは職業問わず、大多数の人が休みの日であり、一週間の憩いの時間を連想する人もいるだろう。一人も例にもれず、この日曜日は魔女の探索をやめ、住民登録の手続きと衣服を調達する予定だったのだが

「雨、降つてんなあ」

「そうねえ」

ザアアアア・・・と天から降り注ぐ雨。見た目の問題上、アンリは着の身着のまま人の前に姿をさらせないので荷物を持つことができない。ゆえにマミが買って帰るしかないのだが、この雨天では買ったものが濡れてしまう。

このままでも埒が明かなしのてしるしるといった表情でアンリが切り出した。

「マミ、金渡してくれ。自分で服買つたらそのまま国籍の手続き済ませてくれるか?」

「えええ！？」

マミが驚くのも仕方がないだろう。上半身裸・赤い腰布一丁・全身  
刺青・肌の色 etc . etc ..... ここまで記した他にも突っ込みの  
入れようは多々存在し、外を出歩くだけでもきつい問題点を抱えて  
いるのだ。

「でもさすがにあなた一人じゃ、ひょっと…ねえ？」

「よく考えたら、オレみてえなのがマリの傍にいるともっとヤベヤヒトもいるんだ」

追記事項：誘拐疑惑　までが追加されよつもにならば、確実に刑務所が待っている。さすがにそれは不味いと考え、先の提案をしたのである。

「そつこにわけだか！」マリは家で待機しとつてくれ

「ハア、仕方ないわね… それじゃ、はい。」

「ん。おお、結構あるな

渋々といった表情のマミカラサ、アンリへと衣服の予算と黄色いチエック柄の傘が手渡された。その額は結構なものであり、彼女には市からの補償金が出ているのである。

玄関前まで移動すると、バツ！と傘が開かれる。

「頑張つてくれるからなー。行つてきまーす！」

「気をつけてー！行つてらっしゃー！」

右手をひらひらと振り背を向けて歩き出す。後ろのマリから見送られ、この日初めて、別行動を開始するのだった。

「嗚呼、周囲の視線が痛かつた…」

數十分钟后、何とか赤いサイレンのお世話にはならなかつたものの、  
とあるデパートに行くまでの間、周囲の通行人からは好奇の目で見  
られ、アンリはうんざりしていた。

「わざと探すか。ええと服、服は、と。…ああいつちか

衣服「一ナーナーを見つけ、そちらに向かつた。その中にいる店員を発  
見し声をかける。

「すみません」

「あ、はい。どうなされましたかお密せ………？」

「いや、落ち付いてください。普通に買い物しに来ただけで不審者  
ではないですから！」

「し、失礼しました。コホン！本口などどのようなものをお求めで？」

さすがに驚きはしたもの、咳払いと気持ちを切り替え、すぐさま  
営業スマイルへと変わる店員。まあその口は少し引き攣つてしまつ  
たが。

「ええと、この刺青が上手いこと隠れて黒か赤の模様が入つたの  
ありませんかね？予算は6万円位なんですけど」

「それでしたらどうぞ。」案内いたします」

注文の内容から、まともな人であると判断した店員は通報の考え方

思考の隅に追いやり、アンリを田辺の「コーナーまで案内した。これで第一関門突破といったところか。

「 いわゆる品はいかがでしょうか？お客様の「」要望通り、上下セット。色合には黒地に赤のラインがデザインされたライダースーツですが・・・」

「（金ぴかの色違いつぽいなこれ）まあ、これがちょうどいいか。あ、そつちのシャツも一緒にいいですか？」

「承りました。ではレジにてお支払い」

そこまで言つて店員は服を持ってレジへと移動する。アンリもそれに続いた。レジに到着するとバー「」コードを読み取り、値段が表示される。

「 いわゆる上下セットが一品といわゆるシャツが一枚。合計で36896円になります」

「じゃあこれで。あ、更衣室借りていいですか？出来ればすぐに着替えるといんで」

「40000円ちょうどお預かりします。ええ、それでしたら左手の道をまっすぐ行った先にあるので」田中：どうぞ。それではこちら3104円のお返しになります。レシートは「ああ、要りません」はい。それでは、またのご来店をお待ちしております」

説明された通り移動し、早速、更衣室に入つて着替え始めた。

おそらく値段は違えども、その服はギルガメッシュのライダースジャケットと同系の物であり、その違いといえば、下のシャツが黒い

「」と入ったラインの色が赤色で一本と二本あります。

「ん。こんなもんか。しつかし似合つてんのかねえ？」

肩を回してサイズや動きやすさの確認をして、同じように靴屋に向かう。こちらは無難にスポーツ用のショーツ（黒）￥4980を購入。何故か足に巻いてあつた黒の包帯が伸びたので、足全体に巻いて靴下変わりにした後、再び確認してから店を出た。

着替えた姿で市役所へと足を進める。先ほどより視線の数は減ったが、今度はその格好とはジャンルの違つ傘の色合いで、少し目立っていた。

「まあこんなもんでいいだろ。次は、つと

もつ慣れたのか、そんなこともどこ吹く風。一いちに来てから叩き込んだ頭の中の地図を思い出し、役所へと歩を進める。

「おうわ！？」

が、突如激しい光がアンリを包んだ。

光が消えたのを確認し、顔を覆った手をどかすと、見たことのある場所にいた。

「久しぶりだな？そちうでは3日ほど経っているか」

後ろから聞こえてきたのは、懐かしい知神ちじんの声であった。

「つたぐ、いきなりびついた、神さんよひ？」

当然、そこにいたのは、いつぞやの自分が転生してくれた神である。

「ふむ、突然すまないな。頃合いだと思つて声をかけたまでだ『この世全ての悪』。中々その格好も似合つているぞ」

「へえ？そりや、ありがとよ」

お互い親しい雰囲気で会話を始める。久しい再会に両者の顔はいい笑顔であった。

突如、右手のひらを上に向け、神は一枚の『用紙』を虚空から出現させてアンリへと渡す。

「これはお前の住民票の『しだ』。受け取つておけ。すでに生活面の資金も公的な理由で済ませてあるから心配はいらん」

「ハアア！？」

なんと、その用紙にはアンリが見原滝町の住人の一人ということが記されていたのだ。

「いや、え？いいのかよ？こんな」とやつまつて

「いや、私ではなくそちらの『世界』が用意したものだ。情報としては日本の巴家へ世話になりに来たといふ内容のはずだ」

内容はほぼその通りであり、登録名は「巴・M・アンリ」、追記事項には「一族に捨てられた『忌み子』を巴夫婦が旅行先で引き取り、養子として登録」と記入してあった。

「この族、てえのは?」

「実際に存在する部族で、『この世全ての悪』を生みだした村の末裔たちだよ」

「マジか! ? つうかむ、なんだこの設定」

「別になんでもない。ただの世界の修正力だ。まあ、お前の情報に限定されたものだがな」

そこでいつたん区切り、神は続ける

「そういえば、お前へ言わねばならぬ」とがあった。あのキュウベえという固体を知つていろな?」

「ああ、アイツって負の感情が全くないから、最近は薄氣味悪く思つてたんだが、なんかやらかしたのかよ?」

「あやつの種族『インキュベーター』のしていふことだがな? しばらく様子を見ておくといい」

「そりやまだどうして? あいつのやつてることは、人類にとつて危険な化け物退治の手伝いみたいなもんだろ?」

「あ奴らもまた『抑止』の一種、『真祖』のよつなものなのが……まあ、君には『氣をつけてほし』のだよ」

「へへへ、御忠告は心にござりぬるをまかよ」

「向の因果が出来つてしまつたが、今回の『再会』はナヒリの世界からの干渉<sup>おせっかい</sup>で起つた現象だ。一度田はなこののびな、……先の事はしつかり覚えておくことだ」

そう言つと右手を掲げる神。そのまま振り下ろすと蜃氣楼の様なものが現れ、その向にアンリがここに来る前の景色が映つていた。

「これをくぐれば戻ることができる。今度はわざわざ、だな」

「お、こんな奴にこひこひあつがとよ。もし、また会えたらそんときわざやつへつ、茶でも飲もつね」

「ほへ、嗜好品としては悪くない。ちよつとした約束とこいつか?」

「やつやあこいー約束だ。そんじや『また会おう』や」

「ああ、『また』」

果たされる」となじない『約束』。それを交わし、アンリはなんだ景色を通る。再び視界は光に閉ざされる。静かに田を開けると、それまでの役所までの道に戻つてきていた。

「ロマンチックだねえ……約束だぜ? 神わざ」

その呴きは誰にも聞かれず、人びとみなまぎれでこくへであった。

時間は午後の5時半。いくつかの袋を抱えてアンリは田舎に帰宅していた。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさいー。びびだつた?」

「（）都合展開があつてな、何とかなつたよつと。ああこれとこれ冷蔵庫に入れといてくれ」

流石にあの神に再会したとは言えないので、事実をはぐらかす。帰りに余つた金銭で買つてきた食材を片づけ、リビングに集合。一服ついてから、あの用紙をマミに渡した。

「ほいこれ、親御さんを理由付けに使つたのは悪いが、こいつこいつになつた」

「別にいいわよ。それにしても田・ミ・アンリねえ…これは義兄妹とじてかしら?」

「いや、保護者としている。年齢欄も18になつてんだろ?」

「あら、本當ね。これからどうするの?」

「現状維持。『お偉いさん』が面つらが、生活費の問題も無い」と  
や。

そういうアソリはカーペットに寝転んだ。

「大丈夫? だいぶ疲れているみたいだけど…」

「平氣平氣、問題ないから先に飯食つてくれ。今日はピザ買つて  
きたから」

「はいはい。それじゃ休んでおいてね?」

「おひ、今日はこのまま休むさね」

そつまつて靈体化して消えたアソリ。彼はそのまま自分の部屋へと  
移動した。

「さて…」

時刻は午後11時。流石に雨の降る外にいるわけにもいかないので、  
あてがわれた部屋にて彼は瞑想していた。

「ちょっとやってみるか…」

そつまつて、彼は

「『I』の全ての悪意負わされし者』…………アソリ・ニア」

宝具を発動した。

ありがとうございました。

まさかの神、再登場の巻です。最後の宝具発動は何なのか？作者にも分かりません。

次回、時系列が一気に飛びます。もう少ししたら本編はいるので、この小説をどうかよろしくお願いします。

## 夏休・休暇・紅檜・桃青（前書き）

最初はアンリ視点です。  
次回は説明会になります。

宝具の実験をしたあの夜から、すでに2年もの時が過ぎている。マニは見原滝中学校へと進級し、中学2年生となつた。その間に倒した魔女は数え切れず。何度もオレの腕やら足やらがページしたこともあつた。

そうして今季節は再び夏。それも夏休みに入った頃であり、現在ママは早いうちに宿題を終わらせるため、家で課題をしていく。ここ数日の間に魔女を倒したから、しばらくは平氣だらう。といつことでオレは暇つぶしに街で散歩していた。

「おー、これがおのれの本だよ。」と喜んでいた。」

「ほんにちは。おお、大きくなつたな坊主」

「あら、アンリさん。うちの子がすみません」

「別にいいですよ。来年から」の子も小学校だつたつけか?友達た  
くさんできるといいつすね」

「はい、あつがとうござむ。せりさん。今からお買物でしょ？」

「ほーい！またね！おにぎりさん！」

「ね、今、またな」

この会話からもわかるようにオレはすっかりこの町に馴染んでいる。この2年の間、マミが学校に行ったりして、暇な時間はこの町の

の魔女探しを兼ねて「ミ拾い、公共施設の掃除などで時間を潰していたからである。（悪神が悪いことするつてのも随分アレだが…）そういうつた慈善的なことやつていたからかは知らないが、時に学校側から子供たちの教育の一環として一緒に町の掃除や、演説をすることもあつた。

この見た目については経歴にあつた通り、部族から忌み子として捨てられた時に刻まれたこの全身の模様が成長をなくした。という設定が、この町に住む人間全員に知れ渡つている。（なぜか全く怪しまれない）

まあ、そんなこんなですっかりこの町の一員になれたオレが何をしているかといつと…

「「」の辺も異常なし…」と。次はあつち行つてみるか

一つの習慣と化した散歩（魔女探し）中である。

先日倒したばかりなのでこの日は出ないだろつとは思つてゐるが、せつかくの中学校生活全てをこのことに消費してマミの青春をつぶすのも忍びない。だからたまにこうやって、オレ一人で探索をしていふ。

「「」も異常なし！んー。今日はこれまでか？」

まだ昼前なのでいつたん家に帰ろうと思つたその矢先、様子のおかしい男性を見つけた。

「あれは……やつぱりあつたな、『じるし』だ。ちょっと後つけてみるか」

首筋にあつたのは『魔女の口づけ』。魔女の絶望に惹かれた被害者

だつたようだ。

魔女を探した場所が場所だつたので、すぐさま靈体化して後をつけ  
る。

しばらく尾行は続き、行き着いた場所にあつたのは、隣町が近い廢  
ビル。そこまで確認すると

「案内」苦労さん。ゆつくり寝てな。起きる頃には終わつてるだろ  
うと「ひつ」

マーキングされたその男性を氣絶させ、ビル入り口の前に移動する。  
結界に入る前にバスを通じて念話を行った。

よつ、結界見つけたからパパッとひづけてくる。重いひざは帰る  
から心配はいらん

了解よ。あんまり無理はしないでね?

ほいほい。そんじゃまた後で

そう言つて念話を切り、結界へと突入した。

ここは結界内。ビルの内部をそのまま使用された壁には、おさりく  
血であるつ落書き、人骨が材料のオブジェが乱立していた。

「おつかしいな? 使い魔の影も形もねえぞ」

アンリの言つとおり、そこにあるのは結界のみ。使い魔の安定しないものとは違い、しつかり安定した不安定な空間は魔女の物には違いない。にもかかわらず、結界のそこらじゅうにいるはずの使い魔が一匹たりともいないのだ。

一応は罠の可能性を考慮して警戒しながら進んでいたアンリだが、少し離れたところで爆発音が響いたのを聞き、その場所に向かつた。そこについたのは

「愚絵工工工工工…！」

「煩い奴だねえ！さつさと消えな！」

ボロボロになつてゐる画材道具を張り付けた魔女と、いくつもの槍を操る『紅い魔法少女』。不思議なのはほとんどの使い魔がそこにいるのも関わらず、その魔女少女が狙うのは魔女だけであるという点か。

だが、この騒乱もその槍が魔女を貫いたことによつて終わりを迎えた。結界は焼き消え、使い魔達は主を失つたことで散り散りになる。だといふのに魔女少女はそれを追つそぶりすら見せない。マミ以外の魔女少女を見て感心していたアンリだが、すぐさま宝具を発動させた。

「何やつてんだ！『無限の残骸』オ！…」

「ツ…なんだ、アンタ！？」

泥の氣配に気付いて此方を見据える魔女少女だが、それを無視して全ての使い魔を泥に飲み込んだ。自壊させず、本当に飲み込ませてから、その泥を使い魔ともども魔力として霧散させる。直後、背後から殺氣を感じ、そちらを振り向くと、件の魔女少女がいつの間に

かグリー・フシードを手に持ち、一いちばく槍をつきつけた。一いちらへ槍をつきつけた。一いちらも『右歯嚙咬』<sup>ザリチョ</sup>と『左歯嚙咬』<sup>タルワ</sup>を顕現させ、対峙する。

「もつたいねえことしゃがつて。どいつやつたかは知らねえが、なんで奴らを消した？」

「ハア？ 危険な芽を摘むに越したことはねえだらうが。こちどり必要以上に戦いを増やしたくねえんだよ」

「なんだ、事情を知つてんのか、そんなの自分の必要な分だけ狩りやあいいハナシだらうが？」

緊迫する空氣。正に一触即発の中、だが唐突にアンリは武器を消した。

「あーもひ、アホらしき。んな事よつとつあえず座れ。まずは情報交換どこいひや」

「……アタシが乗るとでも？」

「好きにしゃがれ。オレにとつて必要以上の戦いは面倒だつてだけだ」

「チツ！ 白けちまつた、しきうがない。話だけは聞いてやるよ」

押し負けたのか。変身は解かないが、武装解除してアンリと向き合つて座る魔法少女。アンリにとつて無益の戦闘はなんとか回避できただようだ。

そしてアンリから話を持ちかけた。

「そりや何よりだ。まあほ皿几口紹介といひつ。オレはアンリ。アンタはなんていひ?」

「……杏子。『佐倉杏子』だ。それより、なんでアンタは奴らを消した。もひとつ育ててからグリーフシードを収穫したほうが効率いいだろ?」

「なーる。そういう魂胆つてか?なかなかに甘美な提案だが、無関係な奴を巻き込んでまで魔力を保つこともねえだろ?が。ま、他になんかあんなら答えるが?」

「結局アンタもそういう性質かよ…。じゃあ次だ。アンタは『男』だつてのこ、わしきのは何だ?何で男が使い魔とやりあえる?」

「佐倉も魔法少女ならキコウべえから聞いたことはあるだろ。『英靈』って言葉に聞き覚えは?」

「ああ……アンタがあの『アンリ・マコ』か。御大層な名前だねえ。アンタが戦えることはわかった。でも、何でいちいち首を突っ込む?アタシらと違つてグリーフシードも要らないだろ?」

「自分の住んでる町を守ろ?と思つのは当たり前だと思つが?お前も……いや、ほんのほんのやり方でやつたところでのやり方が変わるわけでもねえか」

「いい子ぶりやがつて…でもまあ、よくわかってるじゃないか。アタシの知りたいこともわかつたし、ほんのりお暇させて貰つよ」

そう言つて立ち上がつた杏子。しかし、アンリがそれを引きとめた。

「まあちよつと待て

「あ…まだ何か用でも…」

「『』の世の全ての悪霊魚わされし物『アンリ・マコ』」

「なにつ…?」

突然宝具を使つた。変化した空氣に杏子は警戒態勢に入るが…

「まあ予想通りつてか?ちょっと話しを聞いてもらつた足止め料だから受け取つときな」

「おこ待て!今どつやつてソウルジムの穢れを…!」

「じゃ、また今度な~」

聞く耳持たずといふように靈体化してその場を去つたアンリ。杏子が一人残される。彼女はといふと…

「今度会つたら絶対絞めてやる…!」

不穏な考えを巡らせていた。アンリに幸あれ。

その後田を覚ました男性を介抱し、町を悠々と歩くアンリはマコと念話をを行つていた。

終わったぞ。今そつちに向かってる

お疲れ様。どうだつた？

別の同業者に会つた。お前は佐倉杏子。槍を使って戦う紅い魔法少女だ。だが、もし出合つたら気をつけとけ

～どうじかしら

実は…

……悪神説明中。

そつ…そつにかして説得できないかしりつ。

ありや無理だ。話だけで納得なんかするタイプじゃない。それよりほんとに氣をつけろよ～アイツ口悪かつたし、ただでさえママは豆腐メンタルなんだから

ちよ…～それどうじつ意味！～？

そのままだよ。じゃあな、やっぱ夜まで帰らんから宿題頑張れよ

（

待ちなさい！まだ話は終わってな

「ブツツとな。ハア…またやつまつた

強制的に念話を終わらせた。帰つてからのお叱りが面倒だが、いた仕方あるまことに自分の口の軽さに頭を抱えていた。

午後5時。

場所は変わってCDショップ前。そこには桃色と青色の少女がアンドリと会話していた。

「へへへ。恭介落ち込んで……アンリさんはどうしたらいいと思いませんか？」

「ん~音楽家を目指していた、つてことならその恭介って奴が好きそうな音楽関連のものでも見舞い品にしたらいいんじゃないかな? こちもちゅう「ビックロ」売ってるしよ」

「そっかあ。いよしそうしてみるよ。ありがとうございます、アンリさん！」

「せやかちゃんの相談に乗つてくれてありがとうございます」

「ああ、人の愚痴を聞くのもオレの趣味だから、そっかしこまらないてもいいって。鹿田ちゃんもなんか相談あつたらオレに言つてみな?」

「わ、私は別に大丈夫です。でも今度なにかあつたら相談してもいいですか?」

「おう! どんと来い。あ、そうだ。美樹ちゃんもその恭介の見舞い、今度つき合わせてくれないか? 暗くなつてやつはオレが明るく仕立てあげてやるよ」

「それなら是非お願ひします! でも恭介は洗濯物じゃないですよ!」

彼と談笑している一人は『美樹さやか』と『鹿田まどか』。ここ数ヶ月の間に知り合った駄弁り仲間である。

きっかけは、マニの通う見滝原中学校から彼女らが属するクラスが授業の一環としてアンリのところへインタビューをしたことからである。そのインタビューの代表としてこの一人が来たときに仲良くなつたのが始まりだ。

「話している間にもう5時半か…そろそろ帰つとけ。夏休みだからつて遊んでばかりはダメだからな?」

「アンリさんまで先生みたいなこと言つんだ? ま、そりや そうだね。それじゃあまたねアンリさん! 約束忘れないで下さこよーーー!」

「アンリさん、また今度」

まだ夏ゆえに日は高いが、彼女らは中学生。元気に帰宅したのだった。

「気をつけるよーーー……『約束』かあ。神さん元気にしてんのかね?」

一人を見送り、あの言葉を思い出した。一年も前のこととはいえ、彼の中ではずっと記憶に残つていて。

「じつかしマニの説教どつすつか…この間無視して靈体化したらいきなり泣き出したしなあ……」

そう言うとアンリも帰宅した。

この後、家に帰つたアンリがどうなつたかは想像にお任せしよう。

かくして、役者はそろつた。

左手に絶望を抱えた少年は、この後アンリに心を洗われた。

青髪の少女はそれによつて心に余裕ができる。

桃髪の少女も『この世全ての悪』に尊敬を抱いている。

赤髪の魔法少女は彼の力を利用するつもりでいる。

何より金の少女はもつとも関わりを持ち、一人の孤独を味あわなかつた。

残るは一人、時の少女である。

小さな変化を抱え、物語は本筋へと移る。絶望は一人が受け持ち、希望が広がつた。この変化は、やがて襲来する圧倒的な絶望にどう立ち向かうのであろうか？

組み立てが終わつた時計の針は今、動き出す。

夏休・休暇・紅檜・桃青（後書き）

キャストはこれでだいたい揃いました。

次回はこれまでに出てきた魔女の説明と原作との違いについてです。

もう少しで本編開始なので楽しみにお待ちください。

## 人物・設定・変更点（前書き）

人物紹介です。  
詳細設定です。  
……です。

## 人物・設定・変更点

魔女

エコー・ド・ナルシッソス 美貌の魔女

性質：陶酔

冒頭でマミにフィナられた魔女。

見た目は2メートル大の大きな眼球であり、綺麗な瞳の下に直接口が付いていて、美しい金色の髪が瞳から円形に1メートルほど離れたところから生えている。？ こんな感じでもつともつさり

この魔女は昔に褒められた箇所がそのまま巨大化してこの姿になると推測される。弱点はその美しい瞳と髪を傷つけられることなどが、結界に入った者に例外なく見せつけてくるので簡単に隙を作ることがができるだろう。

使い魔

役割：人体・自贊

魔女に使われていない人体のパーティがそのまま使い魔となつた。ただ、魔女を褒めるためにその全てのパーティにはギザギザの歯がついた口がある。

この口は魔女の「他の人にも褒めてほしい」という望みをかなえるためなのだが、それが自分自身の自画自贊である限り、決して魔女は満足できないだろう。

大きさは魔女と違つて標準サイズ。

## アントワヌス 潔癖の魔女

性質：傲慢

初めてアンリが戦った見せ場用の魔女。

潔癖の名の通り、汚いものが大嫌い。故にアンリの宝具の泥に触れた途端に無防備になつた。

見た目はおよそ3～4メートルほどの脂肪の塊で、その醜さを隠すためにキラキラした宝石や金銀財宝を張り付けている。ただ、この宝石や金を剥がすことができないと物理的なダメージは入らないので、汚す物を所持していない場合は爆薬や炎などでダメージを与えることが有効。

使い魔

役割：発掘

大きさは約1・5メートルほどの人型をしたミイラ。見た目は魔女とは反対にボロボロの布を纏つてゐるみすぼらしい姿。常に城の壁に張り付いた宝石を発掘し、魔女に献上している。

基本は魔女の絶望や望みから出来てゐるが、この結界の宝石に目がくらんだ人間も素体となつてゐることがある。全員がピッケルやスコップなどの発掘用の道具を所持していて、攻撃方法が物理攻撃しかないため、見た目とは裏腹に素早い動きをするから注意が必要。

## エイミー・ウェインズ 紋心の魔女

性質：指導

杏子がアンリと出会つたときに倒された魔女。

自分の使い魔達に絵心の名の通り、芸術について教師の様な事をしている。だが、使い魔達が一切学習できないので結界は常に授業中であり、この中に足を踏み入れたものは強制的に『授業』に参加させられる。

見た目は顔がパレットで隠れた女教師で、体のいたるところに画材道具が張り付いている。

魔女の中では珍しく、敵対意志を持つ者にしか攻撃をしない。熱心に授業を聞いていれば、それだけで捕えた人間を解放することもある。一応、授業はそれなりに形になつてるので、もしも絵について学ぶのなら結界に入つてみるのも一興かもしない。

この魔女の結界内の文字は魔女文字そのままだが、見た瞬間に翻訳された内容が頭に浮かぶ便利仕様。

使い魔

役割：無知

絵心の魔女の使い魔。延々と授業を続けさせるために生み出された。その姿は幼い人が描いた落書きの中の人物の様な形をしていて、魔女と同じく、敵意を持つ者以外には攻撃をしない。よつて、この使い魔が魔女となるには相応の年月が必要である。……実際は臆病なだけだが。

アンリの泥にのまれてその全てが蒸発したように見えたが、実は一匹だけ逃れていた。

言わすと知れた魔法少女の先輩。

最大の変更点はアンリと暮らしていること。豆腐メンタルは変わらないが、原作と違つて両親が死んでからはアンリが家族となつたために独りではなかつたので精神的に余裕ができ、少しほは心理的に強くなつた。

バトルの面では大きな成長を遂げていて、アンリが泥を剣や銃、鞭などに変えるトリックキーな戦法だつたために、その場に合わせての連携がこの上なく上手い。

彼女特有の『ティロ・フィナーレ』はアンリが魔力回復を受け持つため、大幅強化して健在。

佐倉杏子

原作との相違点は殆んどない。だが、アンリがホイホイとソウルジエムの穢れを吸い取つたのを見て、次に会つたらひつとらえて利用しようと考えている。

原作までの一年の間に一応はママミと邂逅するが本作では語らない。

暁美ほむり

逆行した精神が映るまでの間にもアンリと出合つてはいないので変更点は無し。

魔法少女候補（現段階

美樹さやか

アンリの駄弁り仲間その一。お軽い活発な性格や、おちゃらけた言動はそのまま。主人公の呼び名は「美樹ちゃん」

アンリについての認識は「頼りになるお兄さん」であり、事故にあつた恭介のお見舞いを相談するあたりはかなり親しい仲といえよう。最初の出会いは、学校の総合の時間の課題「見滝原町で有名な人についてまとめよう」でアンリをインタビュー相手として選んだことから。余談だが、彼女たちのグループは見事当選した。

鹿田まどか

アンリの駄弁り仲間その二。普通を体現したかのような中学生なのに桃髪とはこれいかに。呼び名は「鹿田ちゃん」

さやかと違つて、アンリへの認識は「尊敬する憧れの人」。そのため、アンリの前での言動は少し丁寧な言葉遣いになる。出会った当初は「刺青の怖い人」だったのだが、上記のインタビュー中の会話により打ち解けた。それ以来は町で会うと宿題や勉強について相談することもしばしばある。

強大な魔法少女の素質は今はまだ持つておらず、暁美ほむらが出現すると同時に発現すると予想される。現在はまだキュウベえの存在を認知できない。

サブキャラクター

すでに入院中の身。この後闇話にてアンリと出会つたため、変更点の詳細は省く。ここで語れるとするならば、悲劇は回避されるかもしないということだろうか。

志筑仁美

アンリの事はまざざや伝いに聞いている。そのため、認識は「一度はお話ししてみたい相手」であり、直接面識はない。本作ではあまり接点のないキャラクターのために登場の場は少ないが、語られる事はあるかもしない。

その他 小話的な設定……

アンリ・マコ 巴・M・アンリ

転生者。まじまぎ原作の事は一切知らず、知つてゐる創作作品は「*at e*」などのみ。

作中での彼の一年間の趣味は自身の宝具の実験であり、世界の狭間で出来なかつたことを確認している。

例として

悪意の感じない泥製の諜報動物 成功。（集中力が多大に必要。実証者マリ。が、この後悪意にあてられ一時ノイローゼ。）

無意識下での発動と、意識下での発動の泥の貯蓄量 一部成功。（特定できる個人に限り多量の『負』の吸収が可能。不特定多数は

失敗。五話目最後にて実験  
などである。

杏子とアンリの口調はかぶりやすい……など

## 人物・設定・変更点（後書き）

少しふざけ過ぎました。とくに最後が……  
一応あの魔女の複線設定もありますが、お気づきになられたでしょうか？

次回は閑話の予定です。

追記：同日21時頃 全話魔女の名前改変  
エスマラルダ エコー・ド・ナルシッソス  
グリドルナ アントワヌス  
ティシェルバ エイミー・ウェインズ

閑話・聖夜・一人（前書き）

最初に謝ります。すいません！

総合PV20000・ユニーク3000突破の記念としてテンショ  
ンあがつてやつちゃいました！

さやかとアンリが約束した年のクリスマス。外はすっかり日が暮れ、雪が降る夜である。見事ホワイトクリスマスになつたこの日、アンリは

「へえ、ここがその病院か…」

「そう。ここが恭介のいるところ…」

肌寒い外に揺れる黒と青が特徴的な二人。美樹さやかとアンリは例の人物が入院するとある病院の入り口附近に集合していた。アンリは中々立派な病院に感心して見上げている。

（宗教が違うつてもなあ…聖夜に悪神が人をお見舞いつてどうなんだか…）

まあ内心引き攣つた笑みを思い浮かべていたが。

「んで？ 病室は何番だ？」

「……3階の××号室。個室で治療してるんだ」

「そこまでひでえ怪我なのか…」りや喝の入れがいがあるかもなあ…。ま、いこづけ

「うん。じつち

そうして二人は病院へと足を進めた。

××病室にて

「恭介ー。」

「… ややかかー？ またお見舞いに来ててくれたのかな？」

「ふつふつふ。 今日は紹介したい人がいるのー。」

「？ 一体だれがく…」

その言葉をさえぎるよつて病室の扉が開かれ、アンリが入室した。

「よひ、アンタが上条恭介だな？ はじめまして… になるな、巴・M・アンリだ。 今日はよろしく。」

「えつ…… アンリって、ややかのよく言つてた…」

こちらに二ビルに笑いかけてくる、思いがけぬ人物の登場に一時放心する恭介。

当然、口を衝いて出るのは混乱した言葉であり…

「ややかの彼氏さん？」

「「いや、それはないからー。」」

息のあつたツツ 「//」をもじり。 ややかの部屋は笑い声に包まれた。

少し落ち着いた3人は姿勢を正し、それぞれが向かい合ひ「ようじ」して座った。

「すみません。」Jの口に連れてくるような人ですから勘違いしちゃつて……」

「問題ない。悪いのは美樹ちゃんだつてだけだ」

「ハハ……それはともかく、ビリしてあなたほどの人人が僕なんかの所に？」

「いやな、美樹ちゃんがアンタに喝を入れてほしいなんて……」

「いやいやいや。見舞いに行きたかったのはアンリさんのはうでしうう……」

「まあ、喝を入れときたいのはマジの話だ

「は、はあ……」

身に覚えがないが、何かしてしまったのかと恭介は不安になる。ここで突然さやかが立ち上がり、

「それじゃアンリさん。後はよろしく……」

と軽く敬礼して部屋を出てしまった。苦笑し、アンリは言へ。

「やうおびえなさんな……。で、だ。ちょっとした相談役のお兄さ

んだと思つて話してほしきんだが、恭介君はバイオリンやつてたんだつて？」

「あ、はい。でもこの手になつてからはびひも諦めがちで……すいません。診断はもう少し経つてから出るといこんですが、びひこも治るのか不安で……」

「そのことだが、別に治らなくてよいにいんじやないか？ 繊細な動きは無理でもリハビリすればよつとは動くんだろ？ それなら、日常生活に支障も無いだらうしや」

「……」

爆弾発言をアンリは投下した。

恭介は今までバイオリン一筋でやつてきたのに對し、あまりにもな言こと草である。こんなことを聞かせられて恭介は黙つていられない。で下をこ……！ そんな言葉はもつ聞きあきたんですね……」

「あなたに何がわかるんですか！ ！ ！ 僕の手が治らなくてもいいとでも言うんですか！ 他に道があるからその道を進めと、ふざけないで下をこ……！ そんな言葉はもつ聞きあきたんですね……」

言葉を続ける」とこしほんでゆく音量。恭介の田口は涙があふれておつ、それが寝ているベッドのシーツを濡らせる。

「すつせつしたか？ せんじや続けるからよーく聞きな」

そんな恭介の様子にもピクリとも反応せず、あきれた表情のアンリは言葉を区切つて溜息を吐いた。

「そりやあ恭介君がバイオリンができなくなつて悲しきだらうや。

オレだつて自分の手がそんなことになつたら恭介君と一緒に周りにあたつちまつ

「なら……」

「最後まで聞けつて。でもな? 手が無くなつた訳じやあるまいしさあ、大げさすぎるんだよ」

そこまで言つと恭介はアンリを睨みつけ、部屋は静かになつた。

「でもな? 最近じや腕まではいかねえが、指をはやす魔法の粉みたいのまで開発されたつて話だ。そんな風に日々、医療は進歩を続けてる。まあ何が言いたいかつてえどだ……」

「……」

「お前も歩け。道がなきや作ればいい。手が無いなら腕」と落としつでも走つたと走れ

「……は?」

最初と最後で話のつながりがほとんどない。それどころか、腕を落とせとはどういう意味なのだろうか?

「面倒いからお前つて言つがな? お前さん、ずっとこの病院でくすぶつてゐるらしくじやねえか。見舞いの客がいなかつたら独りで声を殺してみつともなくペーぺー泣いてよお、それでも手前は男かつてんだ」

「え、え? 何でそのこと…」

「アンリさんは何でも知ってるんだよ。最後にひとおーつーー！」

結局答えにもならな「よつな」と言つたことに加え、初対面の人物が他の人も知らないことを知つていた為にうろたえるが、その疑問にも聞く耳持たないアンリ。指をズビシ！といつ擬音でもつこうかといつ勢いで恭介につきつけ、言つた。

「動かないもんは氣合いで動かせ！お前一人が立ち止まるつてんなら周りを巻き込んででも進ませる。それでも左手の事が不安なら、オレがその不安を貰つてやる。だから近くの人の手をその手でとつてやるくらいの事はしる。ほら…よつとー。」

「うわーー？」

強引に恭介の怪我した手をとつたアンリ。突然つかまれた痛みと驚愕で恭介は目を白黒させている。するといつ之間に戻ってきたのか、横からもさやかの手が伸びてきて、二人の手と繋がる。

「さやか…？」

「あたしも恭介を引っ張るから一緒に歩いひつゝ、幼馴染じやない」

「あ……」

「そういうわけだ。頑張りな？少年」

しつかりと一人の手が重なつたことを見届けたアンリは、一人から離れて窓に手をかけた。

「「アンリさん!？」

「おーう、すっかり息ぴたりじゃねえか?その調子で頑張れ、オレも陰ながら応援するからよ?そんじゃ、またな!」

そつと窓から飛び降りたアンリ。驚いた一人はそつと窓から身を乗り出し、アンリを探すが……

「ちよっとこじろ階……ーーって、え?」

「いなー……一体どーだ?……?」

アンリの姿は影も形も無く、呆然とする。それこそやかはうつかり言葉を口にした。

「あーもー、打ち合わせと違つ……あ。」

「わやか?打ち合わせ?ビーフ?とかな?」

気付いても時既に遅し。やうと此方を見る恭介からは、いかにもなオーラが立ち上つていた。

「えつと、その、ね?アンリさんが恭介励ましてくれるって言ったから一人で最後は恭介と手を取り合つてハッピーエンドでしたっていうかなんていうかその全部恭介のために最後だけは仕組んでそれ以外はアンリさんが話持つて行つてその……あの……」

「ブツ……」

「へ?」

「恭介……？」

さやかが必死に言い訳したところ、突如笑い出した恭介。不安になるさやかだったが、笑い終わつた恭介はこう続けた。

「始めて見たよ。さやかのそんな取り乱したとこ。シハハハ…ああ、面白かった」

「え？ ちがうとやれど二つ……」

「もしかしたら」のためかもしれないね。アンリさんの狙には

明るい顔に戻つて恭介はそう言つた。さやかは元の明るさを取り戻した恭介に内心安堵するも、その言葉の意味が分からず首をかしげる。

「あんな風に言つてたから、僕とさやかをくつつけようとしてもしてたんじやないか？僕らは幼馴染なのにさ、アンリさんつてホント不思議な人だね」

「それは、まあ不思議だけど。私もびっくりしたし…」

「今度会つたらどうやつて姿を消したのか聞いておかないとね」

「…………そう、だね」

先の言葉を聞き、さやかは恭介の方向に体を向かせ、手を握りなお

した。今度はさやかの纏つ霧囲気が変わったのを感じ、恭介はさやかを見据える。

「さやか？」

「恭介、あのね……あたし、あなたの事が……」

自分の中の勇気を絞り出し、意を決してその言葉を伝えた。

そのころ、病院からそれほど遠くも無い路地裏で

「ま、これでハッピーハンド。ってか？痛ツツ……慣れない魔術  
は使うもんじゃねえか……」

アンリが出血する右腕を抑えながら一人の様子をうががっていた。  
ここにいるのは、あの時、靈体化で姿を消し、ここで諜報様に作つ  
た泥の動物で一人を見ていたからである。

それだけのはずが何故、怪我をしているかといふと……

「『GEOFU』と『ANSUR』と『KEN』、そして『EO』  
か……魔力任せに無理やり正常発動させようとするとこうなっち  
まつとはなあ……固有結界のオーバーロードでもないつてのに、魔力  
もかなり持つてかれたしよ、難儀なもんだ」

ルーン魔術の強制使用。恭介の手をとつた時、保有スキルも無いのに代価は全て自分持ちで祝いをかけたからである。

GEOFUは『贈り物』を意味する。それで関係を『ごじらせない』うにした。

ANSUは『口』つまりは言葉を意味し、少し積極的になれるようとした。

KENは『火』。その意味の中にある自分の力（回復力）を助長させるために使つた。

EOLHは『保護』の意。それを逆位置として使い、自分がその負担を請け負えるように仕向けた。

そうして恭介の読み通り、二人の仲を進展させるようにしたのだ。

「つたくよお。オレは『セイギノミカタ衛富士郎』でも、その皮をかぶつてゐるわけでもねえんだから、これつきりにしないとな?ツクク

自分の在り方を思い出し、苦笑したアンリ。だが、その顔は、とても満足げな表情であつた……

町には雪が降り続く。聖夜の下で一人はどうなつたのか？それはまたのお話。

そして悪神は絶え間なく動き続ける。彼の周りの負を全て背負つために……

“あやあああーやつぢまいました。説教ひじゅぎ・恋愛（笑）・キヤラ崩壊！の三重苦！

大変の見苦しい物をお見せしてしまいましたが、これだけは書いておきたかったんです。“めんなさい。あと変なテンションでいつも以上に駄文に……”

次回からはついに本編は入りますので、最近空気になつていたマミさんも見せ場たっぷりです。よろしくお願いします。

ついに本編開始です。……やばい。自分の拙い頭じゃ原作に取り入るすきを見つけられない！

「それで、後2日は右肩から先が動かないですって？」

「靈核に直接ダメージ入ったから修復に時間がかかる。戦えない訳じゃないから安心しろって」

「そういう問題じゃないでしょーまつたく……『正義の味方の真似をしてくる』だなんて訳の解らないことを念話で亥いてから数ヶ月。いきなり居なくなつて何をしていたのかと思つたら……」

「まあ反省はしている。しかし後悔はしていない」

「『ど』の情緒不安定な加害者よー…むかへ、そんなになるまで無理しないでじょつだい……」

「あー、つと?すまんかった。(やべえ、殆んど自傷行為でした。なんて言えねえ… )」

すっかりマミも中学校の最上級生になつたある日の午後、アンリはひょつこつとアパートに姿を見せた。どうやら、これまでの数ヶ月の間(闇話含む)、マミから離れて自由行動をとつていたらしい。ちょくちょくと念話で連絡はとつていたようだが……。

まあ、ご覧の有様である。アンリは内心大焦りで冷や汗をかき、マミはマジ泣き寸前の大惨事。彼女の方は、アンリが居なくなつた嬉しさと怪我をして帰つてきた悲しみで心が安定していないのだ。ちなみにこの日は夜までの時間全て、アンリが慰めに費やしたらしい。

後日、快晴の朝

ピペペ……

鳴り響くアラームが自己主張を始め

運命の一月が始まった。

その朝、リビングにて

アンリがまた提案を持ちかけていた。どうやら令呪の使用を促しているようだ。

「どうしたの？ 令呪を使ってほしいだなんて」

「まあまあ、いつもの実験だ。この紙に書いてある事をそのまま呼んでくれたらそれでいいから」

飄々とした態度でそういう言い、紙を渡す。渋々ながらもマミは納得し、残り3画の令呪を発動する準備に入った。

ちなみに、こここの令呪は何故か魔力を持たない（魔力の運用を出来ない）人間には視認できないので、今までそれで問題になつたことはない。

「ハア、あなたの判断だもの。仕方ないわね…………ええっと？」

『令呪を以つて命ず。新たな主従の契約を交わす事を許可する』  
……つて、ええ！？』

すらすらと読み上げ、その内容に驚くも時既に遅し。左肩から熱を感じると共に『円』が消滅した。

### 令呪・残数2画

マミは熱が引くと同時に理由を聞いた。内容が信じられないものであり、アンリに見切りをつけられたかと思つたからだ。

「オイオイ落ち着けつて。オレの魔力が他の奴にも供給できるかの実験だから、マミとの契約が嫌になつた訳じゃない。いわばオレにも『使い魔』ができるかどうかの実験で心配だつたから令呪のブーストをかけて貰つただけだ」

「よかつた……」

だがそんな筈もなく、本当にただの実験だと知つて安心した。同時に時刻は登校時間が近いことを確認し、再び驚愕する。

「いけない！ もうこんな時間！？」

「あ、やつべえ……じゃなくて…さつさと着替えてこい！ 荷物の準備はこつちでしておくから！」

「ありがと！」

長年の経験より、慌てながらも作業分担はしつかりこなす。今日は一段と騒がしい朝になつたようだ。だが、そのせいで一画消費されただけのはずの令呪が『形をえていた』ことに二人は気付かない。

キーン コーン…

鳴り響く終業のベル。今日も無事、見滝原中学校の授業が終了した。3年生のとある教室では、マミが帰り支度をしていた。魔法少女といつ危険な役を持つている彼女は当然のことながら部活動には入っておらず、くる日も早々に帰宅するのである。そんな彼女の本来の史実と違う事は

これから巡回に入るから、いつも通り準備をお願い

りょーかい。……今そつちに分体を送った。今回の形状は狼。触つても悪意の感染も無いステキ仕様だぜ？

もう、おふざけまほじまほじこね?

ハイハイわーかつてゐて

そう、彼との会話である。先ほどのやり取りからも伺えるように、元々警戒態勢の日々は学校が終わってからは、いつもして連絡を取り合っていた。

最近は彼の宝具、『無限の残骸』を器用な制御が可能になつてからというもの、いつもして動物を模した泥を2体までなら宝具の解放無しで操作できるよつになつたので、マミの元へフォローするため送つていたのだ。

夕方。

所変わつて場所は中学校にほど近いカフュテラス。町に住む人たちの明るい声をBGMに、マニアは搜索を続けていた。

「まじか、CD買つてもいい?」

「うふ。いつものだね」

同じ制服を着た少女たちの何気ない会話もマニアにとって力になる。心は明るぐ。しかし決して表には出さず、歩きだすのであった。不意にSGがわざかながらも発行を始めた。

見つけたわ。反応からして使い魔だけ……

はいよ。そういうや、あいつらはマニアの周囲10メートル以内にひそませてある。それと、そっちの結界を特定した。その狼についていってくれ

解つたわ。そつちは何してるの?

使い魔と交戦中だ。……って危ねつーすまんまた後で ブツッ

「え!?ちよつと ……って切れちゃつた。ま、アンリなら大丈夫よね」

アンリも使い魔と交戦中だつたようだ。心配だつたが信頼はしているので、指示された狼が居たのでついて行つた。だが、次に聞こえたのは彼女のよく知る者の悲鳴。

助けて……

(キュウベえ！？)

その声を聞き、歩みを速めた。結界に入つたので変身を済ませ、捻じれ曲がった道を進んでゆく。その先に居たのは

「あわわ…」

「うわ…」

使い魔に群がられている、さきほどカフェテラスで見かけた印象的な髪を持つ二人。鹿目まどかと美樹さやかである。しかもその腕に抱えられていたのはボロボロのキュウベえだ。それを見た彼女の行動は早かつた。

魔法を使い、リボンを出現させて蝶の様な使い魔を縛り上げた。

「「…？」

「キイ！？」

「あなた達、危ない所だつたわね。でも、もう大丈夫！」

「…どちら様？つてなにコイツ！？」

さつそつと一人の前に現れるが、突然の事に頭がおいつかないようだ。それにかまう暇も無いので、狼が一人を守つた事を確認し、その一人を尻目に行動を続ける。

「使い魔ども、すぐに終わらせてあげる……喰らいなさい」

巨大な砲身を縛つた使い魔に向け、一縷の容赦もなく発射。所詮は

使い魔だ。それに耐えきれるはずもなく、この世から姿を消した。  
そんな未知の体験をした二人は「

「…」

「す、ぐ…」

放心するように見とれていた。危険が去った事を確認したのか、アソリの狼もその身を魔力へと還した。

ひと仕事を終えたマミは近くに他の気配を感じ振り向くが、その黒髪の人物は舌打ちと共に去つて行つた。

「…よし」

「ふー… ありがとうマミー。おかげで助かっただよー。」

場所は同じくして。

キュウベえの怪我を治療し、一息をついていた。キュウベえの感謝を受け取るが、それをまどかたちに譲る

「お礼はこの子たちに言つて。私じゃ間に合わなかつたかも知れないもの」

「うん！ ありがとう！ まどか！ さやか！」

「なんで名前知つてんのー？」

さやかの突つ込みが入るが、キュウベえは昔からそういうタイプだったので気にはしなかつた。つづけて互いに感謝を預け合い、それ

ぞれの自己紹介に入る。

「私の名前は……」

言いながらも魔力を霧散させ、変身も解く。すっかり制服に戻った彼女は両親からもらった名をこいつと諧らしげに言った。

「巴マリ。あなた達と同じ見滝原の生徒よ。よろしくね？」

「変身したー?」

「いえ、じつはうわー!」

「そしてこの子がキュウベえ」

「よろしく」

同時にキュウベえも紹介する。前の二人の反応は様々だが、衝撃には違ひなかつたようだ。その直後何かに気付き、キュウベえに疑問を投げる

「ひょっとして、この子達も……」

「うふ、そうだよ……まどか、さやか。実は君たちにお願いがあるんだ

「お願い?」

「あたしも?」

再び戸惑う一人。その一人にキュウベえはにっこりと笑いながら運命の言葉を掛ける。

「あのね、僕と契約して」

そうして

「魔法少女になつてほしいんだ」

舞台装置の歯車が回り始めた。

その夜、マミのアパートにはあの一人も来ていた。

「もう一人同居が居るけど、彼も関係者だから気にしないでね？ た  
だいま！」

「うわあ…」

「素敵…」

二人は、思わず感嘆の声を上げる。それもそのはず。マミの家は整えられたヨーロッパ風のきれいな部屋であつたからだ。そこに一人、新しい人物が声をかけてきた。

「お帰り。それといらつしゃい。紅茶と菓子を用意しといたからお  
客人のもてなしは出来てるぜ」

「あら、ありがと。アンリ」

「「アンリさん!？」」

「よーう、ひつさしふりだなお前ひ。美樹ちやんはこないだのクリスマス以来だな?」

「あら、知り合いだつたのね」

「ちょっとした駄弁り仲間だ。…ほらほら席についとけ。」

「あ、はい」

「はーい」

そうして皆が座ると、キュウベえが居ることに気付く、アンリは口にする。

「なるほど、候補者だつたつてわけか

「そう。だから連れてきたの。それじゃ一人とも、魔法少女について説明するわ」

「大体終わつたら呼んでくれ。それまで晩飯作つてるな」

そうしてアンリが退室し、説明が始まった。

ソウルジエムや使命について。そして叶えられる願いやその危険性。それを聞くたびに候補の二人は一喜一憂の反応をしていた。その中、まどかは気になつた疑問を口にした。

「マリさんその他に魔法少女はいるんですか？」

「あ、そつそつとあつき話した例の転校生とか…」

「ええ、私も見かけたけど、彼女も魔法少女でしうね。かなり強い魔力を持つてるみたい」

その問い合わせはイエスだった。加えて、長年の洞察力からその力量を計りとる。次に魔法少女の対立、報酬の奪い合いについての説明を聞き、悩む一人。

マリはせっかくの候補生を無下にするわけにもいかないので、ある提案を考えた。

「ねえ、それなら一人ともじばらく私の魔女退治に付き合つてみない？」

「ええ…？」

「魔法少女がどんなものか、自分自身の目で確かめてみればいいと思つの！」

危険な事につき合わせるのは忍びないが、二人を守るのは彼なら作案も無いだろうと考へた故の決断である。

「そういうわけでお願いね？アンリ」

「了解だマスター。つてな？そういう事から守りは任せとけ…」

「アンリさんも戦えるの？魔法少女でもなさそつだけど…」

「それは明日になつてのお楽しみだ。それじゃ今日は解散だ」

そうしてその夜は解散となつた。まどかとひなやかはそれぞれの家に帰り、四人は明日に向けての準備を整える。

最初の一日は無事にその役目を終える。

黒き天に輝く逆月は、ひつそりと町を照らす。

次の日、放課後の廃ビル前には靈体化したアンリが立つていた。目をつむつて集中しておつ、念話をを行つてゐるようだ。

そこにはじ近い廃ビル前、結界を発見だ。ちょうど来るところはマーキングされた奴が屋上から出てくるだらうからフォロー頼む

解つたわ。今そつちに向うから待つて

あれ？ アンリさんも念話使えるんだ。それにマーキングつて

説明はちゃんと確保してからな？ おお、見えた見えた。おーい！  
こつちだ

念話で話すうちに二人の姿が見え、廃ビル前に集合する。ちょうど屋上にはアンリの読み通り、飛び降りようとしている女性がいた。しかしそれを見逃すはずもなく、マミは瞬時に変身し、リボンを出現させて落ちてきた女性を優しく受け止めて地面にトロリす。

「マリやんつー！」

「大丈夫、気を失つてるだけ……魔女の口づけ……やつぱりね」

「口づけ？」

「詳しい話は後ー魔女はビルの中よ。追につめましょー！」

「「はいー。」」

マーキングを確認し、急ぎビルの中へ入る三人。彼らを後ろから覗き見ている黒髪の魔法少女が居ることを確認し、一人靈体化を解いたアンリは声をかけた。

「よう、追わねえのかよ魔法少女サン？」

「ツーーー？」

よほどこの場に彼が居るのが予想外だったのか驚愕を隠そつともしない少女。気にせずアンリは質問を投げる。

「お前が例のストーカーさんか。ビッチにじる鹿田ちゃんに何か用があるのかい？」

「あなた、一体何者？」

「英靈だ。あんたも魔法少女ならいつ聞えればわかるだろ？」

逆に問い合わせ返してきた魔法少女へいつもの問いを返した。かつて杏子と問答した事と同じだ。だが違つたのは……

「英靈？残念ながら知らないわ。もう一度答えなさい、あなたは何者？」

英靈の事を知らなかつた。とすると疑問が生じる。居なくなつていった数ヶ月のうちに、キュウべえには「なるべく多くの魔法少女に穢れを吸えるオレの事を伝えておけ」といつた内容の伝言をしていた。故に、国内の魔法少女には彼の事が伝わつてゐるはずなのだ。キュウべえ自身からも確認はとつており、目の前の少女は明らかに日本人だ。

仲の様子が心配になつてきた彼が次にとつた行動は

「訳わからんねえ。とりあえず後で！」

「待ちなさ……消えた！？」

逃げであつた。

制止の声を振り切つて靈体化し、マミの場所へ向かつた。

その頃、中では大立ち回りが繰り広げられていた。

四方八方から迫りくる先日と同系の使い魔達を、空中に拡散させたマスケット銃で片つ端から撃ち落とす。候補の二人の周りには、いつの間にか出現した真っ黒な狼と鷺があり、一人へと迫る敵をその爪と牙で引き裂いている。

その調子で結界を進み、扉を開いた先にある円形ホールにて魔女を発見した。

「あれが『魔女』よ」

そう示した先にいたのは、薔薇園の魔女『ゲルトルート』

八足の馬の様な体系に蝶の羽が生え、頭はバラのついた泥で包まれている。

初めて魔女の姿を拝んだ一人は、その醜悪な外見に嫌悪の感情をあらわしている。そんな一人を安心させ、マミは攻撃態勢に入った。

「パンー」と足元に狙いをつけて撃つが存外に素早い魔女には当たらない。続けて一発二発と続けるが、それも外れた。なかなか当たらないマミに対してさやかは焦りだす。

「ちょ……マミわあん！ 当たってないじゃないですか！」

「まあ見てなさいって」

それをものともせず、反撃のためこちらに向かう魔女にクスリ、と笑みをこぼす。その瞬間、なんと外した地面に埋まつた弾丸からリボンが生え、上を通つた魔女をがんじがらめに縛りあげたのだ。泥の狼と鷺も動きを抑えるために魔女の足を食いちぎつて拘束する。驚く一人を前に、マミは出現させた巨大な砲身へ昨日以上の魔力を集結させる。

「これが私の戦い方！ 未来の後輩に… カッコ悪いとこを見せられないもの…！」

照準を魔女へ固定。魔砲を放つ！

「ティロ… フイナーレッ…！」

なんの遠慮も無く込めた最大威力の一撃が命中する。

使い魔と同じように、魔女はその命を可憐に散らした。グリーフシードが出現し、主を失つた結界は速やかにその役目を終える。長ら

く住人を失った廃ビルは静けさを取り戻し、また一つの平和がもたらされるのであった。

さきほど拾つたグリーフシードを見せ、説明を開始する。あらかたの説明が終わつた時、マミは振り向いて言つた。

「あと一回ぐらい使えそつだし、このグリーフシードあなたにも分けてあげるわ

暁美ほむらさん?」

「……

ちらりと視線を移した先にいたのは、さきほどアンリと相対した魔法少女『暁美ほむら』だつた。ちょっとした皮肉もこめて報酬の分けを話したが、彼女の答えは

「こりないわ。それはあなたの獲物よ。自分だけのものにすればいい……」

拒否。そう言つた彼女はその場を離れ、マミ達の前から姿を消した。

廃ビル前、操られていた女性が目を覚ましたのでそちらのフォローを行つた後。姿を消していくアンリも集合し、今日の事を話し合つていた。

「もつ、ビリに行つっていたの?」

「わりいわりい。ちよいとばかし鬼じつこをな?」

「アンリさん、結局何もしてなかつたね」

「む？失礼な。お前の近くに狼と鶯が居ただろ？。狼は途中からオレだつたんだからな」

「ええ！…アンリさん狼男だつたの！？」

「違つひつの！能力の応用での姿になつてただけだ！」

どうやら魔女の足を食いちぎつた辺りからはすでに居たらしい。その後、こつして遅れて姿を現したのは宝具の影響だと説明した。

「宝具？何それ？」

「ああ実はな……キュウべえ、後は頼んだ」

「やれやれ、しづがないな。後日改めて話しておくれよ

「ま、そつこつわけだ。今度からはちゃんと人の姿でついて行くからよいじく」

居なくなつていた間にキュウべえには一つの宝具について話しておいたので、その方向で話は落ち着いた。その後、英靈について軽く説明して解散したのであつた。

深夜。魔女と戦つた廃ビルの屋上に一つの影があつた。

「ひととこ浮び出したからしさ、わざわざ答えてくれるんで  
しょ？」

「おうとも。渡しあった紙にも書いてあつたわうが。そちらこそ、  
来たからにはオレの質問には答えてくれよ？」

「約束は守るわ。それじゃ話してくれるかしら？ 英靈について、あ  
なたについて。そして宝具について」

「いいとも。英靈つてのはな

二人はそれぞれの考えを持つて探り合つ。包み隠さず全てを喋り、  
自分の目的のために互いを利用するためには

暗い夜は、まだ明けない。

相違・契約・布石・暗躍（後書き）

取り入る隙がない。つてかほとんびアンリが空氣じゃん。な今回で  
した。

なんかほむらつて暗躍が異様に似合つ氣がする。

今氣付いたが、偽り<sup>ヴェルグ・アヴェ</sup>書き記す万象全然<sup>スター</sup>使つてない……！

それでは、ありがとうございました。

眞実・分岐・呪文・菓子・家族（前書き）

ついに物語を大きく変えてみました。どうぞお楽しみください。

草木も眠る丑三つ時。

「チイ、『冗談にしちゃあ話ができるさ』ってやがるってか?……シザケんな! んだよそれはよおー?」

「それはこちらの台詞よーあなたの存在はキュウベえ達にとつては最大のイレギュラー。むしろ自分たちのしていふことを真つ向からケンカ売られているようなものじやない!」

かの魔女の巣窟となつていた屋上では、会話が進むごとにヒートアップし、互いの『情報』と『信念』を晒し合い、それぞれの事実に激昂する一人が居た。一人がなぜこんなことになつたのかは以下のとおりである。

アンリ・マコは魔法少女の眞実を知り、いづれ魔女へと至る運命ともう一つの可能性について自分の予想が当たつていた事を呪つていた。

暁美ほむらは彼の宝具とそのあり方についてを知り、今までの逆行で現れなかつた事を怨んでいた。

そのどちらもが正しく認識していたことを、正面から捻じ曲げられたようなものだ。神から送られていた言葉「インキュベーターには氣をつけろ」を今更ながら痛感し、アンリは提案を持ちかける。

「なあ、協力しないか? オレは鹿田ちゃんが奴と契約するのを防ぎ、その『ワルブルギスの夜』を倒すことを手伝つてやる

「…」どちらにとつて魅力的な提案な事は確かね。でも、あなたのメリットが入つていなかつやないかしら?」

「あるわ。ホレの、メリットは…」

そこで言葉を区切る。今までになに悪意を無理やり押されつけ、続ける。

「『インキュベーター』の策を片つ端からぶつ壊す」ことができるので事だ。魔法の無駄遣いをする奴らに元に炎を据えてやることもできるしな」

「わかった。それじゃ交渉成立ね。……私が居ないと云うのは、まだかを、お願い」

「ああ、重々承知だ。わざこや一つ頼みがある

「? なにかしら」

「今までの繰り返しどマリを喰こいやがつた魔女についてなんだがな? 実は

「

その頼みもほむらは承諾し、ここに新たな決意が芽生えた。協力体制をとつたこれからの一人の願いが叶つかは、まだ誰にもわからない。

ほむらが居なくなり、アンリは一人、暁の空を眩しそうに見つめながら呟いた。

「第三魔法 魂の物質化、か…」の借りは返すからな。神さる」

その言葉が届いたのかは定かではないが、昇る日の光に負けじと一

つ、流星が輝いた。

次の日の放課後、上条恭介の個室にはさやかがいつもの見舞いに来ていた。

晴れて思い人どうしになつた二人の耳には、片方ずつイヤホンが繋がれており、さやかの持つてきたCDと一緒に聴いていた。

「…………つ…………つ…………」

「恭介？」

唐突に恭介が涙を流し始める。彼女は心配げに訪ねたが

「…………大丈夫。僕の手が動かせるようになるつて聞いたら、つい

そう、彼の手は傷は残るものこのままりハビリを続けければ『確實に弾けるようになる』と医師から診断されるほどに回復していたのだ。

実はアンリの意図せぬところで、『火のルーン』『K E N』の持つ『自分の力を助長する』という効果が發揮され、彼の前向きな意思と手を動かそうとする祈りが影響したおかげで、つぎ込まれた余分な魔力を無意識に使用し、確実にその手を癒していったからである。

「うん。よかつたね…………本当に」

「ああ。これで聴かせることができるから……ね

窓から吹き抜ける風が、一人を祝福するかのよつこじて吹き抜けて行つた。

また、次の日。

病院には、まどかを連れてさやかが再び見舞いに来ていた。

「あれ？ 早いね。上条君、会えなかつたの？」

「集中検査するつてやー。劇的に治つたきつかけを検査するためだつて医者が必死に言つてた。恭介も勢いにのまれて苦笑いしてたし

「アハハ……」

「んじや、帰ろつかー」

「うん」

そつ言つて病院を出た一人だつたが、まどかが何かに気付きその方向を指し示した。キュウベえが確認しに行くと

「ーー」れは……グリーフシードだ。孵化しかかつてゐー。」

「ーーなんでこんな所にー？」

危険を感じし、そこから逃げる」ことを提案したキュウベえだつたが、先日マミと話した事を思い出したさやかが叫んだ。

「あたし、ここで『イツを見張つてる』まどかはマミさんかアンリさん呼んできて!」

「え…! ?」

自分がここに残り、危険を承知の上で提案をした。その事にまどかとキュウベえは絶句するが、恭介という思いの人を見捨てられない一心もあり、その決意は固い。

キュウベえもさやかの元で電波塔の役を果たすことを誓い、そんな友人の心境を計りとつたまどかは急ぎマミかアンリを探しに行つた。そして、ついにその場所は結界に呑まれ、さやかとキュウベえは孵化寸前のグリーフシードを見つめていた。

「怖いかい? さやか」

「そりやあ、まあ当然でしょ」

「願い事さえ決めてくれれば、この場で君を『魔法少女』にしてあげられるけど?」

「ん… いざとなつたら頼むかも。 でもまだ遠慮しとく」

まだ自分には頼れる人物があり、守りたい人もいるのだ。願いではなく自分の力でその人たちを守ればいいのである。

「あたしにとつても大事なことだから。いい加減な気持ちで決めたくないし」

そういうつた彼女は、とても頼もしく見えた。

その頃、結界の外では

「マリさん、アンリさん、リードすー...

「ええー...

「おうー...

戦える人物が到着していた。マリがソウルジムをその空間に掲げると結界に穴があき、それに3人は乗り込んだのだが……

「フリイな？ お先に！」

「あー、また勝手に……」

アンリが先行しながら靈体化して姿を消した。いきなりの事もいつも通りのため、マリは立て直してキュウベえに連絡を入れた。

「キュウベえ、状況は？」

先行したアンリはすれ違いまで使い魔達を自らの剣で切り裂きながらも、一直線に進んでいた。

「暁美ちゃん、足止めは頼んだぞ……」

一応心配だったので例の狼を彼女の影にひそませておいたが、今回の『策』はスピードとの勝負である。

「……見えた！無事か！？」

「ま、間に合つた……」

「グリーフシードが…孵化が始まった！」

キュウベえの言つとおり、グリーフシードには変化が訪れていた。しかしアンリはここで宝具を使用する。

「『アンコリトシ・レイズ・トック無限の残骸』…そして、『アシタ告げる』…」

発動させた宝具の泥が魔法陣を描き出し、その勢いにさやかとキュウベえは魔法陣から急いで離れる。それを確認し、彼は詠唱を開始した。

「『告げる。』

汝の身は我が元に、我が命運は汝の業に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』」

そこで『マミ』とまどかの二人が到着し、直接感じ取れるほど膨大な『マナ』が溢れかえる。

「キュウベえ！アンリは何をしようとしているの……？」

「解らない……こんな膨大な魔力、今まで一度も使われたことが……」

「みんな！あれ！」

まどかが指した先にいたのは、完全に姿を現したお菓子の魔女『シヤルロッテ』。

ぬいぐるみの様な愛くるしい姿をした、魔女の中でも珍しいタイプだ。だが、その身は周りの空中を漂う泥に囮まれ、それに触れないようにするために魔法陣の中心から動けていない。

アンリの詠唱は続していく。

「『誓いを此処に。

私は常世全ての悪と成る者、  
私は常世全ての善を敷く者。』」

善悪の入れ替わった詠唱。身を預けるのは契約者の背負う業。そして最終段階に入る。

「『汝三大の言靈を纏う七天、

我が呼び声に応えて来たれ、天秤の崩し手よ

！』」

中心へと収縮する魔法陣。辺りを漂うマナはその勢いで突風を起す。肌に感じる魔力が痛みを感じるほどの限界まで圧縮され

閃光を放つた。

「うう……あれ？」

マミ達3人が目を覆つた手をどけると結界は消え失せていた。アンリの姿を探していると、辺りを漂う煙が晴れる。人影が見え、そこにはいたのは

「実験、成功だ！な？『シャルロッテ』」

「（^ - ^）」

頭の上に魔女を乗せたアンリが居た。なぜかその魔女は嬉しそうにしている。結界が無いのに外に出てくることができる魔女に危険と判断し、マミは銃を出現させる。

「アンリ、早く離れて！危な…」

「大丈夫だつて、実験成功だ。つつただろ？」

「（ - - - ）フー」

「え？……会話できるー？」

「「「「ええ！ー？」」」

が、なぜか魔女と一緒になつて呆れていた。そこでまだかが魔女と意思疎通できるようになつてていることに気付き、今度は四人そろつて驚くのだった。

勘のいいキュウベえはすぐさま立ち直り、ある可能性にたどり着いた。

「アンリ、まさか君はその魔女と…」

「当たりだ。コイツと『契約』させてもらつた。もつ理性もあるから人は襲わねえし、むしろ役に立つ」

そう、サーヴァントとの契約の呪文。あれは使い魔として最上級の存在である英靈を従えることができるものであり、メテューサが人の姿で理性を持つて召喚されたことから、一つの可能性としてアンリが考えていたことだったのだ。

繋がったバスに流れるのは魔力ではなく、『絶望』。アンリが泥を使つたときにも流れれる負が全てシャルロッテに渡り、シャルロッテがその絶望を魔力へと変換してアンリへ渡す。いわば簡易的な『永久機関』を作成したのである。

「そんな……こんなことが」

「おいおい、ビーしたよ? キュウべえ」

あまりの事に絶句を通り越しているキュウべえ。そのままキュウべえが居なくなつたので、流れ的にその場は解散となつた。とりあえずまだかとさやかには後日、説明をするとして、アンリとマミも家に戻つたのであつた。

マミ。リビングにはアンリとマミが向かい合つており、その表情はいつもより真剣だ。場には重い空気が流れ、一人は沈黙している。……ただ、シャルロッテがアンリの頭上に居ることで、シリアルもぶち壊す勢いだが。

それはともかく、アンリは話し始めた。

「アリ、令呪でやつてもうつたことがこれ『魔女との契約』だ。この件に関しては手じたえとして令呪サポートで向とかなつたから感謝してる」

「それは解ったわ。その魔女に害がないのも理解できる。でも、その他に話したいことって何かしら?」

「それは、だな。……いや、言おう。心して聞いて欲しい。これは信頼できる筋からの情報だがな……」

決断してアンリは話し始めた。魔法少女はキュウベえ達『インキュベーター』が宇宙の寿命を延ばすための手段として創りあげたエネルギーの搾取手段でしかないという事。

魔女は魔法少女が絶望し、ソウルジエムを完全に濁らせた時、魂の穢れと共に変化した成れの果てであるという事。

その時に心の天秤が傾き、第二次成長期の少女が持つ希望が墮ちることで、膨大な『感情エネルギー』が発生し、インキュベーターはそれを回収する事を繰り返してきたという事だ。

マミは話が進むたびに顔が蒼白になってゆく。アンリが言ったことは信じられないが、同時に、彼自身を信頼している自分がその言葉を受け取ってしまう。ないまぜになつた感情は言葉となつて飛び出し、自分を抱えてうずくまつてしまつた。

「ソウルジエムが魔女を生むなら……みんな……死ぬしかないじゃない……私はどうすればいいのよ……?」

「落ち着け!マミー!『氣をしつかり持て!…ツクソ、『この世の全ての悪を負わされし者』!…シャルロッテ、お前も手伝ってくれ!」

「(^\u2022\u2022)」

感情は爆発し、疑問は不安を生み、揺れる心はソウルジエムを急速

に濁らせていく。それを見過ごすわけにもいかず、宝具を任意発動し、シャルロッテの助けも借りて穢れを次々と吸い取っていく。このままでは埒が明かないと思ったアンリはマミの肩を掴み、しつかじと自分の眼と彼女の眼を合わせて呟んだ。

「マミー違つだろー？お前にはオレが居る。いつでも、どんなに離れていても穢れを背負つことのできるオレが居るんだ！」

絶望寸前だらうが、後悔に苛まれようがそれでもお前の魂と体は人間のまままで、生きている！

それを、希望が無いとお前は嘆くのか！？

かのアンリ・マユがその時のパートナーへの叱責として使った言い回し。彼とは違つ自分が、ここは『本物』の言葉を使わせてもらつた。

「あ、ああ……」

「大丈夫だ。マミの心はマミだけのものだ。こいつして知つたからにはお前も魔女にはならないから。だから信じてくれ、マミを。自分自身を」

彼女はいまだ揺れる瞳ではあつたが、ソウルジムの汚濁はおさまつた。

『自分自身を信じる』。この言葉を抱いてそのまま彼女は眠りてしまった。この数年間の自分の持つていた世界が崩れてしまい、限界だつたのだ。寝てしまったマミを寝室へ運び、ベッドに寝かせてからアンリは再びリビングへと戻つた。

「お疲れさん、シャル」

「（・ー・）ケプツ」

「あらら、ちよいと喰わせ過ぎたか。でもありがとな？オレ一人じや吸收しきれなかつたからよ。……うん。今は安定してるし、いい夢見てるみたいだ。幸せなオーラがバスを通じて流れてきた」

「（・ー・）？」

「ああ、そうかわからんないか。今つなげてやる……ほり」

「ー（＜＞）ー！」

「氣に入ったか？今度は自分で感じれるように頑張れ」

「（＜＞）／ハーイ ……（・ー・）ணண」

そりやつて肩の上に移動したシャルロッテといくらかの会話（？）をし、アンリも休憩に入った。シャルロッテは元気に返事をした後はそのまま眠つてしまつたようだ。

初めて出合つた夜のように一度は騒がしくなつて、また静けさが漂う夜に戻る。こりして、運命を越えた彼らにはシャルロッテといつ新しい家族と、マミの成長といつ出来事があつたのだった。

史実の物語はその形を失い、骨組みだけが残つた形になつた。その骨組みにも新たな骨が加わり、新しい形を作り上げていく。

最初より美しいものになるか、最後に全てが壊れてしまうのかは分からぬが、今はただ順調に積み上がってゆく。  
完成した物語を知る者は誰一人としていない。

マリ、おせません！断じて！絶対に！

……すいませんヒートアップしちゃいました。なにはともあれ契約もしちゃいました！シャルロット可憐にからしちゃうがない。ウンウン

では、今度はこれまでです。あつがとうございました。

## 休業・人間・解明（前書き）

今回で一巻分が終了です。なるべくオリ展開作れるようにしないと  
(泣)

後書きにはシャルロッテのステータス載せておきます。  
キヤスターなのに筋力その他が高いって…まあ永久機関だからいい  
ですよね？

「ここのはどこの？私はアンリからあの事を聞いて……あの事ってなんだっけ？それよりアンリって誰だつたかしら？」

「どうしたんだい？マミ怖い夢でも見たのかい」

「あらあらー怖かったわね？もつ大丈夫よ、マミこは私たちが居るからね」

「あ！パパ、ママ！怖い夢を見たんじゃなくて、何か忘れているよつな……」

「そうなの？大事な事なら思い出さないと。あなたも考えてみてくれないかしら？」

「うーん。もしかして、友達と何かの約束をしたんじゃないのか？」  
「ううん。たしかアンリって名前の人で、その人は友達じゃなくて、なんていうか、その

「もしかしてマミの大事な人かい？よしーここのはひとつその人と話をつけようじやないか！」

「違うのパパ！そうじやなくて家族つていうか……あれ？でも私の家族はパパとママと私だけなのに……どうしてそう思つたんだろ？」

「やつと思いつてくれたのね？よかつた。マミがあの人の事を忘れたらダメでしょ？」

「せうせ、マミを任せられる人が…僕たちの代わりに、たくさんの事を教えてあげた人がまつてゐるんだからね？」

「パパー・ママー・ビニに行つちやうのー? 私を置いていいかないで…」

「私たちはずっとそこには居られないけど、あの人は違うでしょ? 私たちが居なくとも、もつといろんな人に頼らないと!」

「わうわう。マミが『』になったからつて、一人になることはないんだからさ。……もう僕らもお別れしなくちやね?」

あ、ああ…思い出した。でも、なんで一人がその事…

「……彼一人に任せることしかできなかつた。こんな両親で『めんね』

「でも、マミは幸せになつてもらわないといけないから。だから僕らはさよならだ」

「最後に一つ。居なくなつた私たちは思い出として残るから

「マミはそれを前にして歩いて欲しい」

「私たちはずつと先で待つてゐるから。ゆっくりとくればいいのよ

「僕らもずっと元気でいるから。だから

「「またね? 愛してゐる」」

ずっと忘れない。ありがとうパパ、ママ。私も愛してる……また、  
ね……

「愛してる……」

目の前にはいつもの天井。しかしマミの頬に涙の後は無かつたのでした。

そしてリビング。

いつものテーブルにはいつもの華やかな朝食が置いてあつた。

「……平氣か?ちょっと泣きそつた顔してるわ」

いつの間にか此方の顔をアンリが覗きこんでいた。

「大丈夫。懐かしい夢見ちゃって」

「そつか……それで、どうする?」

主語が無いが、彼の言わんとすることは分かる。このまま続けるか否かだらう。確かに彼が居れば魔女を狩らずとも普通に暮らせることはできる。もう危険な目に合わなくて済む。だが……

「決まってる、私は魔法少女を続けるわ。今までと同じでしょ？違うのは後を知つただけ。……でも、少しは休憩させて貰うわ」

「あいよ。その分はオレがちゃんとやつとく。しっかり休みな

「お言葉に甘えさせてもらつわ。……でもそれじゃ彼女達の体験ツアーハはどうしようかしらね？」

「オレが言つとくや。『ガイドが不調のためしばらくは休憩です』つてな」

「そうね……ふふつ」

いつもより、ずっと穏やかな朝。悲痛な真実にも負けぬ、幸せな時間だった。

絶望の夜は明け、希望の朝が始まった。

これから始まるのは、救いを振り撒く物語。

陳腐な話ではありますが、話の種には持つてこい。救いは誰に？スポットライトは人の数だけ用意します。

誰もが光を浴びましょう。

誰もが主役になれるでしょう。

悪役にも損はさせません。

終わったのは不幸な物語。

始まつたのは幸せの結末。

舞台装置は止まらない。役者の応募は締め切つた。脚本だけが決ま

らない。

そんな自由な幸せを描いた物語。

未来は明るく、ただ一人だけが損をする。さあさ話をまお手を拝借…

その夕方、まどかはほむらと結界での足止めの事について聞き、やの流れの中でもしもマミが死んでいたらという仮説の後、言い合いに発展してしまった。そして、去り際のほむらの態度には疑問が残り、それがまどかの不安を募らせている。

そう考へている間に、空には星が瞬く夜となっていた。家へと歩を進めるそんな中、見知った姿を見かけた。

「どうしたの『美ちゃん。 今日のお稽古事は…』

「…」

いや、何か様子が変だと思った。そんな『美の首には『魔女の口づけ』があつたのだ。

「あら、鹿田さん。『さきづんよ』」

どいかつちな様子で此方を見た。そんな彼女の眼には生氣が無かつた。

どこに行こうとしているのか問いただすが、よくわからない答えが返るばかり。ついには

「やつですね。鹿田さんも是非『一緒に…』」

誘いの声がかかつてしまつ。そんな中、いつの間にか同じようつづつろな人たちが背後に並び歩いていた。

（この人達もまさか…）

同じく魔女に惹かれた彼女らを見過ごすことはできない。そう思い、頼れる人物に連絡を取ろうとするが、彼女は連絡手段としてのつながりが無い事を思い出す。そうしていううちにどんどん彼女達は進んで行つてしまつので、仕方なく自分もそれに着いて行つてしまつのであった。

着いた先はさびれた工場であつた。自分たちが入ると同時にシャッターが閉まり、一つの密閉空間が作られる。その部屋の中心には、自らの失態に絶望した男が椅子に座つていた。

「今の時代に俺の意場所なんて、あるわけねえんだ…」

語り終わり、一人の女性が洗剤のふたを外し、他の洗剤が注がれたと思しきバケツへと近づく。それに疑問を覚えたまどかだが、不意に母の言葉を思い出していた。

いいか、まどか。こういう塩素系の漂白剤はな、他の洗剤と混ぜるととんでもなくヤバい事になる。あたしら家族全員、猛毒のガスである世行きた。絶対に間違えるなよ

それは何気ない生活のルール。だが、絶対に間違えてはいけない日常の落とし穴。危険性に気付いたまどかの行動は早かつたのだが…

「駄目っ！それは駄目！！みんな死んじゃうーー！」

「邪魔してはいけません！」

仁美に腕で遮られ、行動を止められる。腕を掴まれ仁美が語りだし、周囲の人々のボルテージは最高潮になってしまいます。

そんなことで皆が死んでしまっては元も子もない。まどかは仁美の腕を振り払い、バケツを窓の外へ勢いよく投げ捨てる！

甲高い割れる音と共にバケツは外にぶちまけられ、窓のガラスが割られた事で密閉空間からも脱したかに思えた。しかし、ここにいるまどか以外の人物は皆、魔女に惹かれ、死を願わされた者たちばかりである。その行動は見逃せるはずが無くまどかへ全ての人物が殺到する。

必死に逃げようと思い、近くのドアへと身を隠す。鍵が付いていたのでそれを閉め外音人が来られないようになつた。後は自分が脱出し、彼らを死なないように見張るだけなのだが…

(あれ…ここって…物置き！？)

この部屋は出入り口の無い物置。さらには

「あ」

忽然と現れたハコの魔女と人形の使い魔。この工場を根城にしていたのである。だから人を此処へ呼んでいたのである。

これって、罰なのかな

当然まどかは獲物で狩られる対象。

わたしが弱虫で嘘つきだから

結界の中は弱肉強食。

きっとバチがあつたんだ

ましてや一般的な少女にその運命から逃れる力など持ち合わせてい  
るはずがない。

九

影は食らつべ。

— 1 —

その使い魔達へと

え？

突如まどかの影の中からいつしか見た漆黒の『鷹』と『狼』が現れ、使い魔達をその爪と牙で引き裂いた。野生の荒々しさの他にも人間の様な凶暴性を見せるその一匹。人形の使い魔を完膚なきまでに破壊した後、魔女にまで喰らいつく。砂嵐を写したテレビの様な殻が破壊され、人型の魔女が姿を現したと同時に

魔女はその身をバラバラに解体された。さながら人が獸に襲われているようであつた。狼に四肢を引き裂かれ、腹を喰い破られた魔女は残つた頭を鷹に叩き潰されて悲鳴も上げられぬまま消滅した。グリーフシードを残し、部屋の外では洗脳された人々が気を失つて倒れる。

「あなた達は……」

そう問い合わせた獸たちの様子は先程の凶暴さが嘘のようであり、静かにまどかを見、佇んでいた。

「ピイー！」

突然、鶯が鳴いた。驚き振り返つた先にいたのはよく知る人物。

「……約束は守つてくれたようね。ありがとう」

「オオン」「ピイイ」

ほむらが感謝を告げると返事を告げ、魔力へと体を還元する一匹。その役目を全うし、勇姿は溶けるように消えていった。

「鹿目まどか……」

「ほむらひやん……」

この後まどかはほむらに送られるが、帰り道は終始無言であつたといつ。

ここにいるはずの青い少女はその身を天秤には置かず、自らの幸せ

をつかんだ。正史とずれていく物語にも終わりは来る。ただ、この夜は明けたのだろう。

某所。普段は昇らない電線の鉄塔の骨組みにキュウベ『と、ある少女が居た。

「いやあ、まさかキミが来るとはね」

「『ヒツヂマサマミ』の奴がしばらく動けないって聞いてわざわざ来てやつたのに、話が違うじゃんか？」

「悪いね、この土地にはまだあの獣を扱う人物もいるんだ。伝え損ねただけなんだけど」

「はあ？ なにそれ、ちょっとムカつくな

そつ言つと立ち上がり、せりて危険な体制へと移つたが少女自身には怯えを全く感じない。

「でもまあ、こいや、こんな絶好の縄張り、ちょっとアライツも見つけられるかもしないしねえ」

「どうするんだい、杏子？」

「決まつてんじやん。ブツ潰しちゃえばいいんでしょう？ 全部

最後のピースは、当てはまるために姿を現した。

「……………来たか」

二つの影がアンリの体に消える。

「実験は再び成功。そんでもって、予想は答えとピッタリでした……つてところか。よっしゃあ！」

「（。 。 ）？」

「おひ、協力サンキューな？シャル」

「テヘ（\*。ー。）♪」

場所はマニのアパートの屋上だった。アンリの周囲には『泥』での体を構成された様々な種類の動物が佇んでいる。

彼はまたしても実験を行い、自分の予想が当たつて喜び、シャルの頭を撫でていた。

「『魔法』は不完全だつたつー事か。そりや そудわなあ？大量のエネルギーは指向性を持つて働かせれば『大抵は』望み通りの事が起きる。だが、それにはしつかりとした指向性と使う時期・方向・場所・陣が無けりや望んだ事は簡単なもの以外は絶対に起きねえ。聖杯みたいなもんだ。あれでさえもかつて、アインツベルンが『魔法』を取り戻すために作つただけの手段にすぎねえ」

彼が調べていたのは『魔女は人間で在るか否か』という疑問を明かすため。体と魂の変質はどうなつてゐるのかだ。変異した魔女のシャル。そして自然に発生した魔女の体と魂を宝具を使って出した自分の一<sup>：</sup>部である泥に喰らつた時、消す前に自分へと戻してその魂の感覚を調べ上げた。

その結果は…

「白、だな。……シャル、喜ぶべきかは知らんがお前まだ『人間』らしいぜ？」

「（。 。 ；）—！—！」

人間。魂の形が絶望向きになつたせいで、その肉体も醜いものになつただけ。本質は人間であり、人間であり続けるからこそ、自身の殺害権限が働いてあつさりと『異形』を殺すことができた。

アンリは魔法少女の眞実を聞いた時、魂がソウルジエムといつものに変化し、その肉体は魂が碎けない限り回復し続けるのならば、インキュベーターたちは『第三魔法 魂の物質化』を使えるのかと思つたからだ。

だが、第三魔法は『魂そのもの』に命を与えることで不老不死を与え、より高次元の生物へと肉体と魂を昇華させるためのものであり、こんな不完全なものではないと最近思いだした（世界からの電波を受け取つた）からだ。

ならば魔女になる前とその後の魂はどうなつてゐるのか？その結果がこれ、『人間のまま』である。

「まあ、魔女の場合はどつちかつつーと魂は人間、体は『死徒』みたいなもんか」

「？（。・。\*）ハート」

「死徒はオレの世界の吸血種の総称みたいなもんだ。それで27祖つて奴らの中にはな、オレの速さでは勝てねえ奴ら、第1位と第5位にいる犬と蜘蛛がいるんだよ」

「？（。・。\*）」

「『速さ』ってのは人殺しの速さな？ そんでもって死徒ってのは…」

体が似ているといったのは死徒。いわば吸血鬼のような存在で、上位には『死徒27祖』という者もいる。魔女と共に通するのは血を吸つた相手を自らの手下とし、いくつかの段階を踏んでそれもまた死徒と成る工程を持つからである。

「…とまあこんなとこか。ちなみにさつきの1と5は惑星が選んだ  
アルティメット・ワン  
最強種だから勝てるはずもねえ」

「×（・・\*）△H」

「向こうの鉄塔からなんか変な電波も感じじるし、そろそろお開きにするか。そんじゃ戻るぞ…『散開』つと」

「（^ ^）／＼ハイ」

待機する全ての動物をどこかへと走らせ、シャルロッテと共に姿を消したアンリ。今日はこれで引きあげたのだった。

## 休業・人間・解明（後書き）

シャルロッテ・ステータス  
マスター：アンリ・マユ  
クラス：キャスター  
真名：シャルロッテ  
性別：年齢：女性・?  
属性：混沌・中庸  
身長：25cm  
体重：2kg  
筋力・C+(B-)「B+」  
耐久・C(B-)「B+」  
俊敏・C(C+)「B」  
魔力・A(EX)「EX」  
幸運・A(A+)「D」  
宝具・C A++  
クラススキル：キャスター  
陣地作成：A  
魔術師として有利な陣地を作り上げる技能。“工房”を越える“結界”を形成することが可能である。  
道具作成：E  
結界内でのみ具現化された魔力を帯びた物質を作ることができる。  
道具作成：E  
お菓子を作ることができる、無制限に『実体のある』お菓子を作る  
保有スキル  
お菓子のお城：A  
お菓子を作る

『魔法』レベルなので高ランク。なお、チーズ類は作れない。

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。自身の肉体は人から外れているのでとてもタフ。

単独行動：A +

マスター不在でも行動できる能力。元から実体を持つので自分の考えのままに行動できる

自己転生：B +

自身の肉体を全く別の肉体に変化・適応させる能力。元の姿に戻ることも可能。

怪力：C

一時的に筋力を増幅させる、魔物・魔獣が保有する能力。結界内でのみ常時発動し、使用中は筋力を0・8ランク上昇させる（D C -）

執着：A

自身の在り方。特定の人物以外からの精神攻撃を無効化する能力。これを打ち破るには保有者への信頼関係を構築するほかない。自分の興味を持ったモノへ依存しやすい。

宝具

『固有結界・お菓子の魔女（Charlotte）』

ランク：A + + 種別：レンジ：最大捕捉：

由来：自身の在り方

展開した結界がそのまま宝具へと昇華された。この固有結界は通常のそれとは異なり、世界からの修正力を受けないので、展開に魔力

を必要としない。

術者が選択した周囲の生物全てを取り込む事ができ、その大きさ・質量を関係を無視することができる。この結界内で命を落とした場合、その人物の魔力は全て術者へと流れ込む。

この結界には『使い魔』という存在が出現し、おもに術者の求める物を探しているが、侵入者を発見すると襲いかかってくる。使い魔は一体一体が全能力ランクEのサーヴァントと同等の戦力を保有する。

結界と外の情報は完全にシャットアウトされ、術者と同じ系統の魂を持つ者しか結界に侵入できない。なお、結界内に存在する物質の物理法則は殆んど無視されている。

常時展開されるべき結界が宝具となつたことで、魔女の代名詞ともいえる『絶望』を扱えるようになつたため、術者の視界内に限定されるが、前話の様にアンリ・マユ同様『負』を吸收・放出可能となつた。

『セカンドシフト フォルムチェンジ』  
『形態移行・自身転生』

ランク：C 種別：対人宝具 レンジ：0 最大捕捉：1人

自身を全く別の肉体に変化させることができる宝具。固有結界を使用したときのみ使用可能な宝具であり、その姿によつて若干ステータスの変動もある。

ただし、変化できる姿は一定の概念からは遠ざかることができず、ステータスの変動も元のステータスより±1ランクしかできない。とある形態の時のみ幸運がワンランク減少し、爆裂・熱波系の攻撃が弱点となる。

ステータス高めなのは、原作ほむらの台詞から予想してちょっと強めにしました。マスターのアンリと戦った場合、余裕でシャルロッテが勝ちます。

これはサーヴァントとしてスキルが明確になり、靈体化こそできな

いものの、魔力（絶望）供給で大幅に強化されたことにも起因します。それではみなさん、恵方巻きに変身する日をお待ちください。

明 12/9・11編集・本文・文末変更 追記後書きシャルロッテ説

街角・再怪・左右・噛咬（前書き）

初めてまともに戦闘情景が書けたと思います。どうぞお楽しみください。

夜明けの頃。アンリとシャルは魔女狩りに出ていた。

前回より、マミがしばらくの間は休憩のため、その間の町を一人でしっかりと守るためである。そのためには使い魔一匹逃がす訳にはいかず、シャルのように契約する事も出来ないのでいくらまだ人間の括りにいたとしても殺さなければいけないと判断したからだ。彼の元はただの人間であり、英靈と言つても『救うための力』ではなく、『壊すための力』を有しているのだ。ならば、切り捨てるものは切り捨て、足りない力は他人から貸してもらうほかない。切り捨てるそれがまだ人間であつてもだ。

「どうだ、見つかったか？」

「オオン……」

「そうか……次はお前らはこいつだ。オレらは向こいつで探す。……散！」

「「グオオー！」」

……いくらかのおふざけも、まあ、そのためには仕方ないのだろうか。

「結局は見つからずじまいが……おかしいな？」

「 = ( 。 · ) フウ」

その日の昼。

ここまで時間、使い魔さえも見つけることができなかつた。大抵の魔女の活動時間は夕暮れから夜明けまでの間であり、シャルのよう突然孵化でもしない限り魔女が昼に現れることはほとんどない。今は太陽が真上に来ており、マミも学校に登校している時間帯である。彼女も今頃はアンリお手製の弁当とシャルロッテ印のお菓子をクラスメイトにおすそ分けしていることだろう。

あくまで魔法少女の仕事を休憩しているだけで、学校に行かない訳ではない。彼女は正史と違い、学校では人気者で友人も多い。今の彼女を覇気つけるためにも友人とのコミュニケーションを大切にしてもらいたいのだ。

閑話休題。

アンリたちにとってこの時間帯は休憩時間でもあるので、彼らは適当に町を歩いて一つの人が集まっている、ある場所に到着した。

「ここにちは。あら、可愛らしげにねぐらみさんね？アンリさんもいつも一顔があつたんですね？」

「時田さん、どうもつす。実はねいぐるみじゃないんすよ。ほら、シャルロッテ、挨拶」

「（ ）ペニコ」

「「「おおーー」」

「すっげー兄ちゃん…どうしたのコイツ…」

「オレの村での呪術の一種を使って…そうだな、こっちでは『付喪神』みたいなモンでな? こうして自立意識を持たせてみたんだ。つーわけで力もあるし、かなり賢い。これからはコイツもこれからお願いします」

「フツフツ。いいわよ。それじゃアンリちゃんに続いてこの町のマスコット決定ね!」

「ちょ、町内会長! ? 何すかマスコットつて…」

「実のところ去年から決定してたのよーほら、アンリちゃんの模様をまねたキー ホルダー!!」

「い、いつの間に…」

「「「「アッハッハッハ! ! ! 」」」」(\*^ - ^) / / (^ - ^\*) ナカマ!」

上の人たちは町内会のメンバーであり、その中には、この町に立っているビルの社長から近くの家の住人まで様々であり、その誰もがこの町を思う気持ちであふれる人たちだ。

この数年間アンリが慈善活動をしていた所を見たこの会長が建てた会合で、2年前から結成されている。会議などといった堅苦しい事は無く、一人が町の為にやりたいと思った事を皆でするといったノリで、気のいい人たちがたくさん集まっている。

先程の説明で皆が誰一人疑問を持たなかつたのはアンリが最初の会合の折「実際に存在する呪術の発達した村から捨てられた忌み子」と説明をしたからである。それ以来、アンリ頼みで来た人を簡単な

占いや、愚痴を吐きだす心理治療まがいの事が出来る人として受け入れられ、親しまれてきたのだ。

「ハア。 それはそうと、最近どうですか？」

「中々売上が伸びなくてねえ…… そうだ！ シャルちゃんをモデルに家の会社でマスク Gottグッズにしてもいいかしら？」

「だと、どうする？」

「(\*^\_^\*)ノイイヨー。」

「ありがとう！ それじゃ早速撮らせて貰うわね？ あ、アンリちゃんも一緒に！」

「?.?.?.すけど……」

「それじゃ寄つて寄つて…… そつそつ、そんな感じで！ ハイ、チーズ！」

カシャー！

「いい感じにできたわ。 ありがとうね？」

「(\*^o^\*)一。) オワクワク」

「そんじや今日はこれまでっすかねえ。もうこんな時間になつたみたいだし。島野さんはこれから老人ホームじゃないですか？」

「お、そうだつた！ そんじやアンリ君また」

「バイバーイ!」「今度は、マルクナルドで集まりましょうか」「さあ、これから忙しくなるわよ!」「社長。案件の作成しておきました」「それじゃあねー」

「……よかつたな」

「（○）～」

別れの言葉を口々に解散する町内会のメンバー。それぞれが自分の職に戻る中、アンリ達もその場を離れるのであった。

夕方の頃。見滝原中学校、校門前にて

「あ、アンリちゃんー、どしたの?」「んなとこまで来て」

「美樹ちやんか、いや実はな……」

そこで説明した。魔法少女の真実と、そのせいでマリはしづらくなれば休暇を取り、その間は自分がその分の魔女を狩る事。魔女になつても魂は人間のままである事などだ。もちろん周りに聞こえないようにしてだ。

「嘘、そんな」とつて……

「残念ながら本当だ。わりいが鹿田ちゃんも言つとこでくれねえか？」

「うん分かった。伝えておくから。それじゃまたねー。」

「白い生物には『氣』をつけるよー。」

「はいはーいー。」

「つたぐ、軽いなあ……ちょっと不安だが、大丈夫か？」

そつ思つてこるとマリが学校から出てきたよつだ。此方の姿を見つけると近くの友達と軽く別れの挨拶をして、駆け寄つてくる。

「『』みんなさい。待つたかしら？」

「いんや。ああ、やつき美樹ちゃんにも『あの事』言つとこたから。鹿田ちゃんも大丈夫だらつ」

「わい……それじゃ家までお願ひね？」

「りょーかい。行きますか」

一人は歩きだした。

実はこの送迎、マリが十分に乗り切れるまでは一度も変身させないためにアンリが出した提案だ。変身すれば魔力を消費し、その分ソウルジエムが黒ずんでマイナス思考になりやすく、せつかくの休憩も無駄になるためである。

「わいこやマリ」

「なにかしら？」

唐突に切り出したアンリ。一体どうしたところのだらうか…少し陰りの見える顔立ちで次を告げた。

「キュウベえだけ。アイシをどうする？」

「…」

それはキュウベえについてだつた。インキュベーターのやり方やその目的が分かつたのはいいが、これまでの間、マリとアンリは少なからずキュウベえと過ごしてきた。

時にはテレパシーで位置を知らせてくれたり、またある時はちよつとした相談のはけ口として付き合つてくれたこともあり、キュウベえに助けられたことも少なくはないのだ。もちろん、キュウベえにとっては魔女を狩る事によつて彼らのエネルギー収集効率を上げる過程にすぎないのだらう。だが、彼に恩と借りがあり、それを無下にできるほど彼らは冷酷にキュウベえを切り捨てられない。

「出来る事なら…………きゅうベえも『 』してあげたいわ…」

「そうか……分かった。なんじゃやつてやる

「え、でもどうやって？キュウベえ達はみんな…」

「ちよいとやり方は荒いが、確實にあいつだけは『 出来るだらうよ。それともなんだ？オレは今までマリの言つた事を出来なかつた時は在つたか？』

「ふふつ、それもそうね。でも洗濯はどうだったかしり?」

「うえーい、今はもう出来るからいいだろーあーもうー昔の事ぶり返しやがって」

「アハハッ！ごめんなさい。でもお願ひね？」

「ハイハイ。マスターの言つことはやつて見せますよ」

笑う二人。彼らはキュウベえを『 』することに決めたようだ。どうこうことになるのかはまた今度である。

そうして家に着いたマニをシャルロッテが出迎えた。アンリが外にいて、マニが家にいる間の守りはシャルに一任してある。元々の魔女としての能力とサーヴァント補正の付属スキルによつてシャルは大幅に強化されているからだ。

アンリも当然だが、手練れの魔法少女が2人来てもシャルは倒せないほどの強化を施されていたのだ。

そうして家を後にしたアンリは再び夜の街へと繰り出た。夕暮れ時の学校で美樹さやかとの会話中、今度は色つきの鷺を2体さやかの影に潜ませたので、それぞれ一体ずつが守りにつき、美樹さやかと鹿田まどかの安全は保証されている。今回はアンリ一人での戦闘だ。

マニ達魔法少女とは違い、ソウルジエムを持たないアンリが魔女を搜索するのはかなり骨が折れる。

いつも搜索手段として使つているのが、獣の形の泥。オート操作で命令を実行し、獣という指向性を持たせた形なので泥も殆んど消費せず使い勝手がよいが、今は宝具補助なしの限界数をすでに他の人物への警護に当たらせているゆえ、その身一つで搜索をしなければならない。

だが、自分の主の為にも、アンリはサーヴァントとしての身体能力をフルに生かし、結界の搜索を行っていた。疲れを知らず、物を撮らずとも自分で魔力を生成できる彼は夜の街を走り抜けていた。

「見つけた。かなり不安定だから……」これは使い魔の結界か

そして、結界へと突入した。

少し進むとすぐに使い魔を発見。見た目はおもちゃのプロペラ飛行機におさげの女の子がのつた落書きのような姿をしていた。

「発見。つづーかアレってアイツと会った時の奴か?…ま、いい。そつわと狩る!」

そう言つて泥を発動。自律思考を持たせた泥が作れないだけであつて、普通の泥は鞭一本分くらいなら作りだせるので、それを使い魔に命中させ

「待ちな!」

られなかつた。当たつたと思つた瞬間、横から伸びてきた『それは使い魔を弾き飛ばし、別の通路へと吹つ飛ばした。使い魔自身がバリアの様なものを張つていたので、おそらくはノーダメージだろう。

すぐに追おうとも考へたが、ここに結界がある限り使い魔はすぐに見つかる。ゆえにアンリは声の方へと振り向いた。そこにいたのはいつしかの

「よーう。ひっさしふりだなあ?会いたかつたよ、悪神」

「お前か…隨分立派に育つたじゃねえか、『佐倉』？」

凶悪な笑みを張り付けた紅槍の魔法少女。佐倉杏子がそこに佇んでいた。槍を構え、肌に焼けつくような殺氣を此方へ飛ばしてくる。

「あいも変わらず使い魔も狩り尽くすってか? もつたいないなあ。全世界共通語だぜ?」

「そういうテメエもなかなかに曲がった根性が板についたじゃねえか。こんな子に育つてオレは悲しいよ」

「つけ、心にもない事言いやがって。アタシはアンタに育てられた覚えなんざ……」

穂先がアンリを捕える。そのまま槍は

「無いっての!…」

彼目がけて発射された。魔法少女としてずっと戦ってきた熟練の彼女が放つた一撃は恐るべきスピードを持つ。紅い槍はそのままアンリへと命中する。

「甘えつづの」

はずが、たたき落とされる。いつの間にか彼の左手に握られていた歪な剣によつてだ。この数年間き続けたおかげか、すっかり自分の普段着として情報を登録されたライダースーツを消し、魔力を覆つて自分のありのままの戦闘服を纏つた彼が悠然と構えてそこに居た。

「おいおい、結構本気で投げたつてのに弾きやがったよ。おまけに前と違つて随分けつたいな恰好じやねーか」

「ひつとら伊達や醉狂で英靈なんぞやつてねえわ。ついでにこれはオレの本気の戦闘服さね」

「へえ、アタシとやつ合おうつとか?」

「まあな、じうじう雰囲気は大抵がこのまま戦うパターンだ。来るなら先手は譲るぜ?」

「面白いじゃねーかーしつかりと躙けてからアタシの回復台としてヤンよおーーー!」

「上等オーーー!」

ダンーと地を蹴る一人。ヒトヒトの戦いが始まった。

まずは先手。杏子の下段から振り上げた槍がアンリの一の腕を狙う。それをザリチエで受け止め絡ませ、武器を封じてからお返しどばかりにその足を切斷しようとした。

「危ない危ない、乙女の足を切ろうなんぞ随分外道じゃないか!」

「乙女だあ? 寝言は寝てから言いやがれ!」

再び刃と刃が交差する。杏子の槍は増え、その手に握る一本と後方から出現する無数の穂先がアンリへと飛来。そのいくつもの刃がアンリを掠り、その肌に傷をつけていくが、ただそれだけ。アンリ自

身は一度もまともに当たらなかつた。

そして剣舞の押収は続く。

突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。

突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。突く。

防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。

防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。防ぐ。

一進一退の攻防が繰り広げられ、両者の武器はとめどなく破壊され、創造される。不意に、杏子の槍が突きから左薙ぎに変わつた。だが、突然の変化に大した同様も無く、アンリは再び刃を受け止め、破壊する。今度は両手に槍が握られ、袈裟切りと逆袈裟に振り下ろされ、また受け止める。そのまま破壊しようとし、

「クッ……ハア……！」

「…ツチイ！」

予想以上の力に支え切れず、逆短剣を破壊されアンリの両腕を通過するように刃が通り、両腕が切断される。切断された腕は武器を握つたまま転がり落ちた。だが流れる血は無く、黒いもやがアンリの腕の切断面から滲み出していた。

「アンタもよつぽどの化け物じゃないか！血さえ出ないなんてねえ？お次は足を貰うよ！」

「そこ」が甘えつて言うんだよ」

嘲笑しながら突撃してくる杏子にもアンリは恐怖を見せず、あくまで冷静だつた。アンリの両腕からもやが伸び  
ガ、キン！

「んなあつー？」

再び出現したアンリの手に握られ、地面に突き立てられたタリウイ  
によつて止められる。確かに切つたはずの両腕がいまだ健在な事に  
驚愕し、杏子には一瞬の隙ができた。

「しまつ……つて無いー！」

「ヒューー。やる、ねえー！」

隙に付け込まれ、首を狙つた一撃を出現させた槍で弾く。容赦なく  
首を刈りに来た瞬間にぞつとするが、先の攻防の結果、まだ自分が  
有利な事は自明の理。そう感じた杏子だつたが

「強化開始。第一ラウンドスタートだ」

「んなあーーー？」

アンリの全身に奔つた模様に黒い泥が塗りつぶすよつに出現した瞬  
間。アンリの纏う空気が一変する。先ほどよりも一回りパロメータ  
が強化され、アンリの動きは獸の如く変化する。

「シャアツハアーーー！」

「ん…のあーーー！」

迅い。最初に杏子が感じた感想がこれだ。拮抗していた先ほどと違  
い、より獣じみた動きになつた彼を捕えるので精一杯になつたので  
ある。先ほどまで押していたといつのに、その攻防が途端に入れ替  
わつた。

剣線の中。歪な形の短剣は破壊され、その手に握られるたびに、その捻じれ曲がる刃の形を変え、間合いを悟ることが難しい。先ほどからもそうであったのだが、いざ守りに入るところなく厄介な得物であると、杏子は思っていた。

何よりアンリ自身がこの戦闘を楽しみ、格段とその手数と重さを増加させてゆく。

左手の『タルワイ左歯嚙咬』タルワイは『熱』の意味を持つ通りに戦いを燃え上がらせ、右手の『ザリチエ右歯嚙咬』ザリチエは『渴き』の名のままに所有者へ渴きを与え、闘争へと追い立てるのだ。

「クツ、ここのーままじやーー！」

疲れを知らない英靈と違い、杏子には疲労が貯まる。打ち付けられる一撃は腕に響き、確実に自身を陥れる。そして

「ハツハアーー！」

「クソがツーー！」

両者渾身の力を込めた一撃。杏子は全ての力を込めた右薙ぎ。アンリは英靈としての全能力を込めて刃を振り上げる。もう何回かも分からぬ衝突の結果。

パキーンーー！……

武器が砕けた音が聞こえ、決着はついた。

杏子の槍は振り切られた形で、アンリの剣は…その曲がった刃が杏子の首を捕えた形であった。杏子の槍は中ほどから砕け、アンリの体には傷一つ付けられていない。

「「これでチョックメイトだ。おとなしくしな

「クッ……アタシも年貢の納め時つてか？」

「ああ？ 何言つてやがる」

「アタシが居るから取り分が減つちまつ。だから殺さうとしてんだ  
ろ？ そんくらこは分かつて」

「違つつ。せりゃあさつきは楽しかつたが、んな面倒なことは  
やらねどよ

「はあ？ ジヤあコレは一体何だつてんだ！」

「ま、このまま聞いてくれや。チヨイと長い話にはなるがな」

彼女には簡潔に話した。ソウルジムの真実ともう一つ、協力を呼びかけたのだ。『ワルブルギスの夜』の討伐依頼を。

「ふうーん？ ソウルジムが濁りきつたら魔女にねえ……そんなの淨化し続ければいいだけの話じゃないか」

「あーあつまんねえ。もつちよつとリアクションはねえのかよ？」

「「」の状態でそんないとしたら、頭と胴がオサラバしちまつだらうが」

「それもやうか。で、でつけえ魔女の方の「」返事は？」

そう聞き、アンコは剣を離れさせた。杏子は自由になつた体を口キ

「ヤヒと鳴らし、返答を返す。

「つたぐ。ショーがねえ、乗つてやるよ。その代りと申すやあなんだが」

「なんだ?」

「これからしばらく、お前さんじて話題になるし、穢れの回復役になつて貰つ」

「アアー! オイオイ何の冗談だよ

「対価としては別にいいだろ? アタシは残念ながら根無し草の身でねえ。それとも、アンタはこんなに弱い乙女を危険な夜の街に放り出す趣味でも持つてんのかい?」

「乙女つて、それこそ冗談」

バギィーーとアンリの腹には見事な一撃がヒットした。

「ツヅ、グ……」

「え? なんだつて? もう一回書いてくれるか?」

「す、スンマセ、……」

「よのしこ。そんじや宜しくな?」

「まだ腹を押さえているアンリに杏子はイイ笑顔を向ける。何とか手で返事をしたアンリはそのまま田宅まで連れていくのであった。

いつの時代も女性は強い。後にアンリはそう語つたところ。

「あ、『解』そんでもつて『伝』つと

「ん? 何やつてんだ」

結局、マミの家までゆっくりと歩いていける一人。その途中でアンリが何かを解除し、再び何かを飛ばしたのを見た杏子は尋ねる。

「お前に協力を取り付けたつてのを、ちょっと伝言にな

「なんだ、アタシ以外にも居るのかい?」

「まあな

「ふーん。しつかし、今さらだけど、ソウルジエムが本体で、この体はゾンビみたいなもんだって? にわかに信じがたいもんだ」

「なら、試すか? 大体100メートルぐらい離すと肉体の機能が停止すると思うが…」

「流石にやめとくよ。そこまで確信持つちまつたら、もう引き返せない気がするしさ」

「そうかい

あの激しい戦闘で刃を交えた雰囲気はどうやら。とはいえども刃を交えた者同士、なにかが心に伝わったのだろうか、すっかり仲が良くなつていいのだつた。

衝突があり、たがいにその身をすり減らして初めて、人間は相手の歯車とかみ合うことがある。それは人が生きていく中で一度は通る道だ。今回はその例なのがもしかれない。

そしてこの後。

杏子を連れて家に着いた時にもひと騒動が起ころうだが、それはまたの話。

残る期限は2週間。その日に最大の運命が覆され、幸せを得られるのかどうかは、まだ決まつた訳ではない。

だからこそ、この先を知る時の少女と悪の青年は奔走するのだ。  
たとえその身を犠牲にしても

街角・再怪・左右・噛咬（後書き）

がんばれました。十万PV越えたときにはなにかお祝でもしようか  
と思います。外伝。冗談的な意味で。先が長い話ですが、次回作  
のプロットも大体できたので、この作品が終わつた後もこれともど  
も、よろしくお願ひします。

ありがとうございました

誘惑・葛藤・回遊・答案（前書き）

やつらと書けた――――もつなんか口を置いて書いたのでトシシ  
ヨンやら書き方やらこらこらおかしいです。  
それでは、お楽しみください

後日、夜間 鹿田宅にて  
まどかは自室のベッドで呆然と天井を見上げていた。  
さやかからの衝撃の報告、そしてアンリからの伝言動物から『魔法少女体験コース休止』の一報を聞いてから一日が経過した。  
尊敬していた人物の事実。自分が憧れた魔法少女の残酷な真実。インキュベーターの目的。これらの事は彼女の心を追い立てるには十分だった。

「ほむらちやん……」

もう一人。自らが知る魔法少女の名を知らず内に呟いていた。  
彼女はこの事を知っているのだろうか？彼女は初めてその姿を現した時から不思議な雰囲気を纏っていた事を思い出す。  
もしかしたら彼女が何かを握っているのかもしない  
そこまで考えて頭を横に振つた。もし彼女が知つていたとしても、  
つと黙つている必要性が考えられなかつたからだ。

「やあ、元気かい？まどか

突如自分しかいないはずの部屋に響いた声。驚き声のした方を振り向いた先には

「きゅう、べえ……」

「そりゃ、僕だよ。久しぶりだね」

お菓子の魔女の一件から、すっかり姿を見せなかつたキュウベえが

いつのまにか現われていた。

彼は変わらず、愛くるしいぬいぐるみの様な姿だが、事実を知つたからこそ分かる。此方を見つめる紅い瞳にはなんの感情も見いだせない。そこには一種の恐怖さえも覚えた。

それでも彼女は聞かずにはいられない。自分の心が訴えかけるようにして彼女は口を開いていた。

「どうして……」

「？」

「どうしてキュウべえはそんな事を続けるの……？」

言つた。聞いてしまつた。じくじくと心臓は早鐘を打ち、声も震えていたが、それでも尋ねる事が出来た。

「……なんだ、まどかも知つているのかい。なんでと言われても、やむを得ない事情があり、その結果としてこうなつているだけだ」

「事情？」

「全ではね、この宇宙の寿命を延ばす為なんだよ。君は『エントロピー』といつ言葉を知つているかい？」

エントロピー。熱力学の第一法則。

エネルギーは変換することにロスが生じ、全体的なエネルギーは減少するという考え方の事だ。

『燃やす為の木を育てるための労力』が『火を燃やした際に生じるエネルギー』と釣り合つていかない事が分かりやすい例の一つである。

「僕たちは宇宙の寿命を減らさないよう、この法則にとらわれないエネルギーを探し求めてきたんだ」

「…………」

「そして見つけたのが魔法少女の魔力だよ。僕たちの文明は知的生命体の感情をエネルギーに変換する技術<sup>テクノロジー</sup>を開発したんだ。……ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなかつたらね。宇宙の様々な異種族の中から君たち人類を見出した」

その先を要約するところだ。

人間の感情は、その一生を生きる間に作るエネルギーをはるかに凌駕していたとの事。人類の魂は『法則』を覆すエネルギーたり得るものであつた。

とりわけエネルギー搾取の効率がいいのは『第一次成長期の少女』の希望と絶望の相転移。

つまり、脈動するかのような活力あふれる魂が、絶望に支配される瞬間の転落時、まるで全てを焼き尽くす程の炎が、一瞬で燃え尽きるようにしてエネルギーを発生・放出する。

そうした莫大な、いや絶大なエネルギーを回収し、宇宙の寿命へと還元することが彼らインキュベーターの役割なのだという。

「どうして！？最初あなたと会つた時、そんなことは一言も言わなかつたじゃない！？！」

当然まどかは葛藤する。犠牲になつてているのは同じ人間。だからこそ、それは人として正しい感情だ。

キュウべえはそれこそ、本当に、ただ『無情』に、その問いに答えた。

「『聞かれなかつたから』や。さつきだつてそつだらう？君は僕に『どつして』と訊ねた。だから僕は『質問』に『答えた』だけさ」「だからつて……たくさんの人人が死んだりする理由にはならないでしょー？」

「ホント、君たち人類の価値基準は理解に苦しむなあ。今現在で70億人近く、しかも単純計算で四秒に100人ずつ増え続けている君たちが、魔女の被害にあひ、『ごく少数の單一個体の生き死にでそこまで大騒ぎするんだい？』

あくまでキュウベえ達の考えは効率を重視する。それこそ家畜と飼い主の関係のようにだ。

「そんな風に思つてゐるなり、あなた、やっぱり私たちの敵なんだね」

「やれやれ、藪蛇だつたかな？……ああ、そつだまどか」

窓から出ようとして立ち止り、キュウベえは言葉を区切つた。こちらを振り向き、その感情の無い瞳をまどかへ見据える。

それを受け、多少は怯んだが、まどかは負けじとその目を見つめ返した。

「その中でも君は歴代でも見た事の無いほど、最高の魔女少女の才能を持つてゐるんだ」

「…………」

「「」の宇宙の為に死んでくれる氣になつたら、いつでも僕を呼んで。待つてるからね」

そう言い残し、窓の外へと身を翻してキュウベえの姿は消えた。

「…………

まどかはただ、枕を抱きしめ俯くことしかできなかつた。

そうして時は過ぎて往く。

同日、キュウベえとまどかの対談の続く中、杏子を連れ帰った巴家はとこづと……

「ああ……あなたこの前の魔法少女じゃない…ちよつと、アンリ！…  
どうして彼女がここにいるの…？」

「やうやくうちの台詞だ。まさかコイツと一緒に住んでると思わなかつたよ。アンタそういう趣味でも持つてんのかい？」

「笑えねえからな？冗談にしては随分へヴィだからな？」

「わーつてるよホントにただの冗談だから、掴み掛かんな息が苦し

い

「つたく調子のここいつて、……」世話をなるなら家主に挨拶ぐ

らいじとか

「ま、そういうわけだ。アタシは佐倉杏子だ。これからよろしくな  
？」

そういうつて挑発気味に笑いかけながら挨拶をした。

マミの方は「一人がここに来るまでに、アンリからの念話で『討伐の協力者を拾つた』としか聞かされていないので、当然ながらこの事を知らない。

ましてや連れてきた相手がアンリ不在の期間中に魔法少女の在り方で意見が合わず、対立した相手だというのだからなおの事タチが悪い。

「と・に・か・く、どういう心変わりかしら？あれだけ効率重視で周囲の被害を考えなかつたあなた…いえ、佐倉さんがワルブルギス討伐に出ようだなんて」

「コイツが居るからに決まつてんだろ？コイツさえいれば魔女なんざ狩らずともソウルジエムを使わずに済むし、さらには衣・食・住を提供してくれんだ。しかもデカイ魔女一匹殺るだけでこんな好条件が突いてくるときた。それに乗らない手は無いだろ？」

「ハア…呆れた。あなた、どこまでも自己中心的なのね。アンリ！本当に彼女が協力者で大丈夫なの？」

「実力のほどは申し分ねえぞ。ま、少しの辛抱だ。ワルブルギスの夜をブツ飛ばすまでの期間だけここにいるだけだ。まあ押さえてくれると助かる。そんじゃ、ちょっと寝室を整えてくるから後は頼んだ」

ひらひらと手を振つて退出したアンリを見て、またマリはため息を吐いた。

最近アンリが自由すぎではないだろうか？今まで忘れていたがアンリはサーヴァント従者なのだ。令呪でも使って「私の言つ事を聞きなさい」とでも命令してやるつか？とこう考へが一瞬、頭をよぎる。が

（それでも結局、アンリはみんなのために動いてくれるばかりだものね）

今までのアンリの行動でほとんどが良い結果に向かつていた事を思ひ出し、その考へを捨てた。

「仕方ないわね……佐倉さんはそここの左の部屋を使いなさい。……それから、シャルー！！」

「……（\*。。。）ハーハーイ」

そつマミが呼ぶと台所からチーズを口にくわえたシャルロッテが駆け寄ってきた。

「うわーーなんだコイツー？」

「シャルは私たちが留守の間、佐倉さんの見張りをお願い。何か悪いことしようとしたらガブツとしてもいいからね？」

「（\*ーーー）バヨウカイ」

「ハア？ ちょっと待てコイツが監視つて……いや、それよりひつむつて歯み付く、」

「ボク」（〇一〇八）。

「は？」

突如シャルロッテの口からは、恵方巻きのような体と鋭い牙を覗かせる口を持ったナニカがとび出てきた。その巨体は部屋を埋めるほどであり、その口は突然の事で硬直している杏子の頭をすっぽりと覆っていた。

「…」で大きくなつちゃダメでしょ。早く戻りなさい」

「(\*ーー)『メンナサイ』」

マミが叱ると再び元のぬいぐるみの様な姿に戻るシャル。先ほどの変貌ぶりに驚くことしかできない杏子はかなりどもつてている。

「な、なななななんだ今のおー！つうかコイツが何なんだー！」

「」の子はシャルロッテ。現在はアンリの使い魔兼魔女をやつてるわ。そういうわけだから、これから宜しくしてやつて頂戴ね」

「、（ \* ） プロシウ」

「魔女才！？」

こうして彼女達の談話は続いて言った。すぐに杏子へ多少の説明がなされたが、それを聞いて杏子はさらに呆れ果てたらしい。

その後はマリとシャルの杏子イジリが始まり、アンリが寝室の準備と明日の予定を練つて戻つてくるまで散々な目にあつたとか。「マリも中々黒くなつたものだ。」と言つてしまひとアンリはマリの

成長を喜んでいたらしい。

「ぜんつぜん……喜ばしくねえから……！」

……約一人、報われぬものもいるようだが、まあ。

あとは時間が解決してくれるだろう。…

翌日。

「いってきまーす！」

「危なくなつたらすぐシャルに任せろよーー！」

「ええ、大丈夫ーーー！」

今日は一日、取り逃した使い魔は分体に任せ、今日は休憩のつもりなのでシャルをバッグに忍ばせておいた。いざといつ時の最終防衛手段である。

こんないつもの朝と違つるのは・・・

「つたぐ、後もうひょこでアレが来るつてのに随分とのんきだな？」

昨日、新たに戦線に加わった杏子の姿だらう。

彼女はやむにやまれぬ事情があり、小学校中退といつなんともいえ

「何ならお前も遅くはねえ。オレが勉強見てやらい」とも無いぞ？」  
「ジコーダン。アタシはもうしばらぐのまま氣樂に生きるわ」

「ハッ、やうかよ。まあ、ご教授願いたいときはまだも聞こな」  
それとなく勉学の話を振つてみたが見事にあしらわれたようだ。薄く笑いながら肩をすくめて見せるアンリはどこまでも人間くさかつた。

マリの見送りを終え、リビングへ戻つた矢先、杏子がある事に気付いた。  
それは

「なあ、といひでよ」

「ん? 何だ」

「なんでアンタは、いつも他人のための事ばかりしてるんだい? 少なくともアタシが見た中じゃ、アンタはいつも自分の為に動いてるところを見たことがないんだけど」

「オレが? ..... そ、うか、そ、うだつたか! ハーッハハハ! ..... そ、うだそ、うだ、そ、うだつたなあ! .....」

「お、おい!」

アンリはそれを聞き、何かを思い出し笑いだした。その何かを懐か

しむような表情になり、どつかと座った。

そのカーペットの上で天井を仰ぎ、両手で体を支えて形になる。

「ま、座れ。オマエになら話しても面白そうだ」

「まつたく、なんだつてんだ・・・ま、アンタの事だ。ツマラナイ話じやないんだろ?」

「まあな、ちよつとした昔話だが・・・聞くか?」

「ま、これからは暇だし聞かせて貰うとするさ」

「それじや、話そつかね。・・・英靈つてのはその人物の死後、伝承として語られたことでその話を元にして神格化された人間や物語の人物だつて事は知つてゐな?」

「キュウベえから少しは聞いてる。で、それがどうしたつて?」

「オレも元はただの人間だつたんだよ。しかも『現代』の、な」

「ハア?!?けど、アンタの名前は」

「そう。アンリ・マユ。ゾロアスター教の最高神と対立する悪神であり、遙か昔の宗教のもんだ。だけどな? オレはそんな高貴な存在でもねえし、悪神そのものでもねえ。

そんなオレだが、生前はとても不幸だつたんだ。」

「不幸? そんな程度で神と同列の存在になるなんて...」

「普通に無理だ。だけどな? その原因がその『神』。しかも限りな

く存在する、全ての世界の魂を管理するほどの最高クラスの奴が関わっていたとすればどうだ?」

「待てよ……それじゃ またか!」

「その通り。原因はソイツのせいであり、オレはソイツとあった。そこでオレは変わった……いや、変えて貰つたんだ」

この先は『存じの通りだ。彼はこの力を手に入れ、この世界に落ち、そしてマリと出会つた。キュウベえと会い、まどかやさやかと知り合い、杏子と対峙した。

生前では味わえなかつた幸福を、この新たな体に浴び続けたのだ。そうするうちに、いつしか考えるようになつたのだ。

『『』の幸せを壊さないためにもオレが全部背負つてやる』ってな

彼はこの世界を壊したくなかった。それが危機に陥るのなら当然だ。自分が『戦つて打ち破る事の出来る脅威』と戦い、なるべく人を守るために自分ができる事をしたかったのだ。

そのため自分は『悪そのもの』ではなく、『悪を背負つ』事を続けるのである。

たとえその世界に居続ける』とはできなくともだ。

「まさか、死ぬ、つもりじゃねえだらうな……?」

「それじゃまさかだ……でも、ま、消えるかもしんねえな

「消えるつじ……、マリはまだあるつもりだよ。」

「マリにますで言つてある。そしたらアイツ、なんて言つたと思

う？

『それじゃあ、私が死んだらあなたの元へ行くわ。契約の絆はありますから、それを辿ってでも追いついてあげるから覚悟しなさいね？』だとよ。まったく、逞しいこいつた

そつと穏やかな笑みを浮かべた。

所詮、自分は異邦者だ。受け入れられても、自分が異邦であると思う限り、いつかはその場所を去らねばならない。だが、そんな自分について来てくれるというのだ。

これが何とうれしい事だろうか。

「でも、そんな事ホントに出来んのか？」

「できるさ。人間はいつだつて最悪の状況を乗り越えられたんだ。世界の壁如きに止められるものじゃないってな。…ま、シャルもついてくるだらうな」

「へえー、マミも中々。つて、ん？ そうするとこの町はどしきなんだよ？ アイツが居なくなるとしたら、魔法少女になる奴はしばらくいなうだらうし、ワルフルギスの夜なんてデカブツが来たここで狩るもの好きなんて……」

「ま、そこはお前に任せせるや。この町は頼んだぜ？」

「ハアア……やっぱそなうなるわな。でもアタシに任せせるつてこと好きにしてもいいってことになんのか？」

「そのあたりは、後々考えるわ」

「そんな事だらうと思つたよ。ま、アンタが消えちまつんなら、い

い稼ぎ場を陣取つとくのも重要か

そつと立ち上がり、杏子は外へと向かう。

「ちよいと長話を聞いて疲れちまつた。外の空氣を吸つてくるだけ  
れ」

「普通は逆だと思つが…。ああ、一応持つていけ。小遣い程度にや  
るよ。……夕暮れには戻つてこいよ」

「お、サンキュー。そんじやあな

言い残して退出。それを見送つてアンリは一人となつた。

「……っハ、なーんで話したんだりなあ？まあいい。一応張らせ  
とくかね」

そう一人ごちて、監視兼使い魔掃討の分体を放つ。そして部屋の掃  
除を始めるのだった。

それから時間が過ぎ、太陽は真上に差し掛かる頃となる。  
街を歩く杏子の手にはスナック菓子があつた。ビリヤや渡された駄  
賃で買つたらしい。

それからしばらく進み、噴水が中央にある公園にたどり着いた。今

はまだ昼の為、まだ保育園や幼稚園に入る前の幼児を連れ添つたママさんたちがちらほらといる程度だ。

まっすぐに噴水の近くにあるベンチに腰をおろし、スナック片手にボーッと空を見上げる。

「『幸せ』かあ……アイツはなーんて馬鹿な事、考えてんだらうなあ」

アンリが提唱した『幸せを守る』。

それは綺麗な理想に聞こえるが、その実、欠点だらけのたわご」とと同義だ。その覚悟が現しているのは、あくまでアンリが守れるのは物理的な被害であつて、精神的なものまでのカバーはできないと公言しているようなものである。

「その辺考えてんのかよアイツ……でも、考えてんだらうな。意外とぬかりないし、いつでも余裕そうだしな」

杏子から見た彼はいつでも自然体だった。多少のボケに動搖はするが、それも一瞬の事。

昨日戦つた時でもそうだ。高速で槍を投げても、無数の刃に襲われていても、腕を落とされても、常に笑みを浮かべていた。しかも狂気や威嚇ではなく、単純に楽しそうな笑み。見る者がみな安心できるような笑みだ。

「なのに、惹きつけてそれで終わりってか？人の笑顔をみりやそれで満足ってか？アタシにはちょっと、わかんねえよ……」

杏子の足元にはいつの間にか黒犬が座っていた。おそらくは彼の使いだらうと当たりをつける。

「ちょっと疲れたな……。これ、アンタにやるから、寝てる、間は頼ん、だ」

「ウオン」

了解!と言わんばかりにひと鳴き。それを見た杏子はゆっくりと目を閉じ、暖かな光を浴びながら眠りに着いたのだった。

「ウォン! オン!」

「ん、なんだ。もう夕方か……?」

ひと眠りしたおかげで気持ちもすつきりした杏子は、例の黒犬の鳴く声で目を覚ました。

だあがあたりは

「あつちやー、もう真っ暗じゃんか。こりゃあ戻つたら大目玉かね?」

すっかり暗くなっている。頭上には夜空の星が瞬き、杏子の寝ていたベンチには近くの街灯の明かりが照らしていた。

「ま、落ち着いたしさつと帰ろつか、なつとお……ん?」

ふらりと歩き出した杏子の視界の先にはこの闇の中でも映える青い髪を持つ人物ともう一人が見えた。その持ち主が着ている服は少し、見覚えがある。

「ありやあ、マリのところのガツローの制服か……？」こんな時間までお熱い事

少し興味があつた杏子はその一人をつけて見ることにした。黒犬は何も言わなかつたのでそのまま一人を追つ。その先にあつたのはとても豪勢な屋敷だつた。

「「」いやまた」立派な家だねえ。せしづめおぼつかまつてどこかい？」

「……」

青紙の少女が男を見送るよつて別れた後、杏子はほんの興味心から話しかけていた。いつもなり氣にとめることも無かつただろう。

「あ、あなた誰よ……」

「野次馬」とでも言つておいつつか？」

「ちよつとーふざけてんのー?……で、あれ? その変な感じの犬、もしかしてアンコさん?……」

「何だ、アイツを知つてんのか?」

「「」とは、あなた魔法少女なの?」

「およ、正解や。なんで知つてんのか知らないけど、この時間にもなると魔女も出でくる。そろそろ気をつけた方がいいんじやないかい？」

「じ心配どーもー近くに来るでつかい魔女倒すの手伝つてくれるんでしょ？あたしは何にも出来ないけど、頑張つてねーそれじゃ機会があつたらまた会おうーなんぢやつて」

彼の関係者らしき少女は、そうおどけて駆け足で走つて行つた。杏子は、夜の闇に呑まれ、彼女の姿が見えなくなるまでそちらを見続けていた。

「頑張れか……久しぶりに聞いたねえ。中々嬉しいもんじやないか？……さてと、アタシも戻るうか」

彼女もまた帰路についた。心には、ほんの少しの温かみを感じながら。

無論、家で待つていたのは暖かいじ飯だけでなく、マミからの説教もあつた事をここに記しておこう。

考査に課題に進路。もうこうこうなものあきらめてこれ書きあげました。

最近きつすぐる……

今回、最後の方で上条君が夜遅くに帰宅したのは描寫されませんが、見事復帰を果たしたお祝いとして彼女と街を回ることにしたからです。とか言ってみる。

あと、杏子の扱い悪い気がしますが、決して嫌いなわけではありません。何というか、さやかはもう魔法少女にならないからその分彼女には『安定』を魅せてもら王的な？まあそんな感じです。

以下、クラス名を考えてみた。

さやか：セイバー まどか：アーチャー  
杏子 …ランサー マミ …ライダー

ほむら：アサシン

バーサーカーとキヤスターいのちは、まあ、ねえ？

……あ、今気付いたが今回メインキャラほとんど出てんのにほむらだけいね！（「」）

独善・痛魂・会議・集結（前書き）

一万字突破……頭が痛い。というか魔女戦で半分使つて……  
投下します。

あれから一日。

この周回では、ほとんど隠す必要も無くなつたほむらの知識を存分に活用し、次の魔女の出現予想地に三人は集まつていた。余談だが、全てを話したのは等価交換をしたアンリだけであり、杏子やマミ。ましてや、まだかには時間逆行の事は話していないと追記しておいた。

「ここで次の魔女が出現か……本当に出んのかよ？」

「ええ、間違いないわ。この工場の環境は魔女の姿形とも合致する点が多い」

「ふうん。ま、ワルブルギスが来るまで何もしてなくて体が詫つてもいけねえし、今回はやつてやるよ」

「一応感謝はしつくわ」

「素直じゃねえな？ そんなんじゃ彼氏もつくれねえぜ？」

「わうこうあなたは彼女でも見つけたらどう？」

「いらっしゃよ。仮にできても置いて行つまつのが闇の山だ」

「それもわづね…………來たわ」

それを聞き、ほむらの視線を追つと魔女の結界独特の魔法陣が出現しているのが見えた。

「そんじや、気楽にいきますかね」

「油断してやられんじやねーぞ、佐倉」

「それはあなたも同じでしょ?」

三者三様の意見を吐きながら結界に突入した。

その結界は正に一本道だった。全体的にモノクロだが、視線の先には太陽を模したと思われる赤いオブジェが一つ立つており、実際に光を放っていた。

その一つ手前にはなにやら黒い人型の物体が祈っている。

この魔女こそ『影の魔女・エルザマリア』その性質は『独善』だ。何もかもを救おうとして、全ての生命体を自らの結界に引きずり込む。祈りの体勢は崩される事は無く、常に全ての命に祈りをささげているのだ。

「あの魔女は樹木の形状をとつて攻撃してくる、特に大木で埋め尽くすような範囲攻撃には注意しなさい! 身動きを取れなくなつている間に使い魔に串刺しにされる可能性があるー!」

「りょーかい!」

「分かった! …ってなんでそんなこと知つてやがるー?」

「前に倒した時の使い魔が逃げ出していたのーそれより……来るわよー!」

この理由はこの一日間にアンリが提案したものだ。

ほむらが魔女の特徴を知る理由は『逃げた使い魔が成長した』・『前に戦つたが深手を負わせるにしか至らなかつた』・『戦つている途中で気付いた』の三つを通せばいいというものだ。

これならば、ワルプルギスが来るまでの魔女もそんなに多くないため、十分ごまかせると踏んだ故の理由付けである。

侵入したのが魔法少女だったからか、単に入ってきた救済対象の生命であつたからかは知る由もないが、ずっと祈りを捧げる魔女の後ろ髪影が鋭利な刃物と成り、三人に向かつて襲いかかつてくる。その脅威は杏子が投げた槍に負けず劣らずの速度でそれ以上の質量がこちらに向かつってきた。

「そらあ……廻せ廻せえ……！」

そんな攻撃に怯みもせず、杏子は手に持つた槍を高速回転させて枝を切り落とす。魔女自身は此方を向いていないが、それで仕留めたと思わなかつたのか。枝は際限なく伸びてきている。

「アタシが防御に回つてやるー今のうちにそのまま突つ切りなあー！」

そう声を張り上げながら槍を廻す手を休めない杏子。アンリとほむらはそれに静かに頷き、ほむらは空を蹴りながら、アンリは泥で創りあげた魔女への道を駆けながら最高速度で魔女へと接近する。だが、ここで忘れてしまつてはいけないのがここが結界の中だと言う事。ここは魔女に仇なす者が戦う戦場であると同時、魔女にとつてのホームグラウンドでもあるのだ。

つまり

「マズツ！？」

「アンリ・マユ！…」

魔女の手足であり、目と耳でもある使い魔はどこにでもいるということだ。

泥の足場を走るアンリは下方向を見ることができず、よもやこの負の塊を突つ切つてくる事が無いと高をくくっていた事が重なり、突如下から出現した使い魔から不意打ちを受けたのである。

この使い魔は魔女が『救つた』命の塊であり、その中身は動植物から様々なもので構成されている。たかが『人の負』は『混沌と化した命と意思』にはなんの効果も無かつたのだ。さらにはヒト以外の生物も含まれるため、『殺害権限』のスキルが働かない。最弱ではなくなつたが、いまだ英靈としての実力が低いアンリには、まさに天敵と言える相手ともいえよう。

だが、この程度でやられる訳ではない。弾きだされた空中で新たに泥を練り上げ、既存種より一回り巨大化した大鷲を作り上げる。（もちろん色は集中する暇が無いので黒色だが）

「フリイ！大丈夫だ！…」

創造した大鷲へ飛び乗ると、ほむらへ無事のうまを伝えた。そのまま挑戦するように相棒の逆手短剣を構え、使い魔と交戦を開始した。それを見た彼女は再び魔女へと肉薄し、魔力で強化した銃弾を撃ち込む。

ドドドツ！と銃器独特の発砲音を響かせ、射出した弾丸は魔女へと吸い込まれるようにして命中した。だが

「クツ、この程度じゃ効いてないわね」

撃ち込まれた場所にはゴルフボール大の穴があき、ハチの巣となつた魔女は一瞬にして撃ち込まれた箇所を再生させた。魔女は攻撃を受けても変わらず祈り続けている。

「そこどいたあ！！」

使い魔を相手にしたアンリよりも早く、杏子が全ての枝を刈り尽くして魔女へと到達した。無言で了解を受け取つたほむらがその場を離れると、愛槍を上段で回転させながら魔女へその凶刃を接触させた。

ギギイ！と、鋭い木材を裂くような音を響かせ、ついに魔女は祈りの体勢を崩した。

ほむらはその隙に取り出していた手榴弾のピンを抜こうとしたが

「佐倉さんー離れ…ッ」

「クソッ…！…！」

祈りを邪魔された事に憤慨したのか、倒れそうなその姿からノーモーションで髪が大木へと変貌し、二人を覆い尽くす。呑まれた二人のうち、杏子は自身の槍で脱出を図つたが、ほむらはそもそもいかない。

彼女の場合は元々、虚弱な体であるが、それを魔力で強化し補つていた。つまりは従来の魔法少女と異なり、彼女の身体能力としてのスペックはそれほど高くない。加えて彼女には魔法少女特有の具象化された『武器』が無く、あるいは時間を止める能力と身を守る『盾』のみだ。

「くつ、くつ……！」

「待つてろー今すぐ出してやるーー！」

杏子が救出に向かおうと穂先を大木の根元に捕え、切り落とそうとする。元々のエネルギー供給源を切り離せば、本体から切り離された箇所は消滅する事を先程経験したからだ。

「セエエエイーーー！」

掛け声とともに魔力をこめた刺突の一撃は、バツサリと魔女の髪を両断する。晴れて自由の身となつたほむらは、あの密度の中でも離さなかつた手榴弾のピンを今度こそ抜き放ち、3秒ほどの猶予の間にありつたけの魔力をつぎ込み、魔女へと投擲した。

「離れてーーー！」

「言われなくとも！」

途端、大爆発！普段では絶対に使えない魔力の極限消費による一撃は、結界全域に轟音を響かせた。消費した魔力は使つたそばからアンリが吸収しているようで、今だそちらを向くことはできないが、使い魔と交戦しているであるつアンリへと、ソウルジエムの穢れが急激な勢いで向かつて行つた。

視界は今だ爆発の煙で見えないが、その向こうで動く様子がうかがえない事を確認すると杏子が呟いた。

「……やつたか？」

「おやうへは。これでくたばったんじやないかしら」

そう言って一人は武器をしまい、構えを解いた。杏子はアンリの方を向いて終了のよしを伝えた。だが、ほむらは何かをいぶかしんでいる。

「おーーー。おわったみたいだ！」

だが

「よそ見すんな！早く構えろおーーー！」

アンリからは焦るような返答、途端に後方に感じた違和感に気付き振り返る。

そこには此方に迫る無数の枝。巨木や細木・大小様々な凶器が一人を貫かんと迫っていた。武器を取り出すにも、時間を停止させて逃げるにももう遅い。最低でも、次に来るであろう衝撃に耐えられるよう痛覚を遮断した一人だったが

「……う、ん？」

「来ない…？」

来るべき感触が全く感じられない。遮断したのは痛覚のみ。まだ触覚は生きているので体には貫かれる感覚が来るはずだった。だが、無い。

まさか、と違和感を感じた一人が目を開けた前にいたのは

「ハツ、怪我ねえかよ？」

迫っていた全ての枝に刺し貫かれたアンリの姿だった。前回、腕を切り落とされた時のように傷口から出ているのは血ではなく、黒い靄。それが出ていない無事な部分は首から上ののみであり、左腕ははじけ飛び、両足は切断され、心臓など様々な臓器があるべき場所は斜めに縫いとめられている。

そんな怪我をしても彼は何ともないかのよつと言つた。

「いまから隙を作る！そしたら、全力でたたみ込めえ！..！」

「「な……」」

「返事い！..！」

「「つ、了解！」」

あまりの事に呆然としていた一人だが、アンリの叱責によつて各自の得物に魔力を注ぎ込む。

そして

「『ヴェルグ・アヴェスター偽り写し記す万象』アア！..！」

ついに、彼の持つ最後の宝具が発動した。見えない呪いは魔女へと一直線に伸び、相手へと自分の傷を複写する。突如襲つた『体はあるのにそこになにも無いような痛み』に対応などできるはずもなく、魔女はアンリを貫いたまま声の無い悲鳴を上げてのたうちまわる。

「そお、れええ！..！」

「……喰らいなさい！」

「！？」

そんな中、新たな脅威に対応できるはずもなく

「……！」

魔女は渾身の一撃をその体で受け止める。その瞬間、当然ながら魔女の周囲は爆散し、魔女もそれともども体を分解していった。

かくして、影の魔女はこの世界から消滅した。

魔女の崩壊と同時に世界に亀裂が入り、ガラスの碎けるような音と共に再び静かな夜が戻ってきた。

「オイ！大丈夫か！？」

結界が消滅してすぐ、杏子はアンリのもとへ駆け寄る。その反応も当たり前だろう。一般人はともかく、普通の魔法少女でも死に至るほどの傷を受けたのだ。

当のアンリはとくと

「…平気だ」

「本当に…？」

「だあーから！大丈夫つつてんだろ！」

何事もないようにしてその体の全てが元に戻っていた。

アンリは普通の英霊とは違い、通常時の体の『ベース』こそ人間だ

が『構成された体』は全て泥で出来ている。つまり、この泥が無くなるほど消費するか英靈の核『靈核』を直接攻撃しない限りは『消滅』しないのだ。

まあ、先程のように縫い止められてしまえば体は動かせず、本人による魔力の過剰使用によりて閑話のように靈核を自ら傷つけることもあり、あくまで『不死身』なだけで『無敵』ではないのだ。

「それぐらいにしておきなさい、佐倉さん。彼も大丈夫そうよ」

「いい加減元に戻れって、オリヤー！」

「アタツ……悪いね、アタシもどうかしてた」

アンリから額にパッチンをくらつて杏子は正気に戻る。やはり、彼女と言えどこれほどまでの悲惨な場面を見た事がなかつたのだろう。

「そんじや、今日は解散だ。ほむら、これでしばらくな出ないんだな？」

「ええ、出たとしても主を失つた使い魔くらこのものよ」

「ああ……となると、マネキンが出るのかねえ」

「何だ？ 心当たりでもあるのか」

「昨日な、ちょっと買物遅くなつたろ？ そんときに結界見つけたんで入つたんだよ。そしたら大量のマネキンみたいな使い魔の中に、これまた可愛らしい子犬がいたんで思わず『おう、何だあの可愛いらしいの』つづちましたんだよ」

「結界に紛れ込んだただの犬じゃねえか。それがどうしたんだ？」

「まあ、それ言つた途端に妙に一しきに懐いてな？すり寄つてきた  
んで撫でてたらさ、その犬から異様に暗い雰囲気を感じたんだよ。  
人以外の心を感じられないからおかしいな？と思つてちよいとよく  
見たんだ。そしたら

「

「あ、もう大体分かつた。そいつが魔女だつたつてことか？」

「その通り。んで、びっくりしたから、もう反射的にザリチヨ出し  
ちまつて」

「そのままバツサリ。そして使い魔は逃がしてしまつたといつわけ  
ね」

「曉美ちゃん正解。使い魔はまだ狩つてねえから一・三体はーると  
思つ

「わかつたわ。それじゃ暇があつたら狩つておいてあげる……それ  
じゃ、また今度」

「ん、じゃーな」

「次はアンタの家だつたな」

そういうわけで、解散した一行からほむらが離脱した。  
彼女が見えなくなると雨が降り出した。

「おお、降つてきたか」

「ゲ、傘ねえけどどうすんだよ」

「ホイこれ、今作つた」

「お、サンキユ。……にしてもホント便利だねえ」

「応用発展なんでもござれではなーから、時と場合に応じよがな」

「……にしても」

「ああ」

「「疲れた……」」

二人もアンリが作った真っ黒な傘をさして帰路につく。今回の魔女は一人が経験した中でも強敵だったので、その言葉が現すようにその足取りは重かった。

後日、放課後になつてから巴家一行は暁美ほむらの住むマンションへ訪問していた。

「それで、巴マリ。どうしてあなたがいるのかしら?」

「いいじゃない。ワルブルギスの夜が来るこりには私も復帰するつもりなんだし」

「暁美ちゃんの家凄いな。」の中央の額縁、どうやってぶら下がつてんだ？」

「これ、」の町の地図か？「いろんなとこに丸印がついてる」

「（ ）（ ）モグモグモグモグモグ」

……正に一家総出の大訪問となつたが

「はあ、シャルロッテ。」あまり食い散らかさないでちょうどいい」

「（）（）（）（）（）」

「それじゃ、本題に入るわよ。『ワルブルギスの夜』の出現位置及び対策会議を始めます。まず出現予測位置は」の……」

中央に置かれたテーブルの上に広げられた見滝原の地図。幅の広めの川をまたぐ大橋を教鞭で指し示す。

「大橋付近に出現する事が可能性として最も高いわ。統計結果からしてこの説が最も有効よ」

「統計え？この町にワルブルギスが来たなんて話、聞いたこと無いよ？」

「ええ、どういう意味かしら？暁美さん」

「……キコウベえから今までワルブルギスが現れた地理情報を元に予測したものよ、悔しいけど、信憑性は高いわ」

「なるほど、アイツ『嘘』はつかねえもんな」

「これは嘘だが嘘でもない。ほむらと契約したすぐ後、実際にアンリが聞いたというのもあるが、今までの繰り返しの中で得た統計にすぎないのだが、ここで今まで全ての事象を見てきたであろうキュウベえを引き合いで出すことによつて、彼女達に信じさせることは十分だつた。

「なかなか興味深い話をしているじゃないか」

「…………」

名前を呼んだからか、今まで彼女達の前には一切、姿を見せなかつたキュウベえが背後に立つていて、まどかと同じく、眞実を知つてゐるゆえにその田からは何の感情も感じられないといつ事をひしひと感じ取る。

「ど」から沸いて出やがつたテメハ…………

「やれやれ、僕を『キブリ』みたいに囁つのやめてくれるかな

「ああ！？」

「落ち着け佐倉。さつさと槍仕舞え、あぶねえから」

そう言つとアンリに従い槍を仕舞つ。キュウベえは槍を向けられた事を憤慨もせずに続けて言つた。

「……チイ」

「どうやらワルブルギスの夜を倒してくれる算段をしてるみたいだから、助言をしようと思ったんだ。アレは僕らにとつても頭を悩ませるものだからね」

「……言いなさい」

「僕らインキュベーターでも計算をしてみたよ。君の『言いつ』とおり、大橋付近にワルブルギスの夜は出現する。…それから、これは知つてたかい？魔女には特有の文字形態が存在することを」

「で、それが『言いつ』たって？」

「過去にアレを見た事のある個体からの情報によると、ワルブルギスの夜は『舞台装置』という異名を持ち『無力』の性質を兼ね備えているんだそうだ」

「それだけ、なの？ キュウベえ」

「残念ながらこれだけさ。後は強大な力を持っているがゆえに『結界』を必要としない。けど、ある行動を起こすと地上の文明が全てひっくり返つてしまふらし……この程度だね。僕から言えるのはそれだけさ」

「話は聞いたわ。消えなさい」

「……フフ。それとアンリ、なんで外に」

突然言葉を区切ったキュウベえの体にスウ…と縦に赤い線が入り、そのままズレてキュウベえは絶命した。

実行犯はアンリ。事前に皆キョウベえには体のストックがあると聞いていたのでそこまで驚きはしなかつたが、彼が突然このような行動をとつたので部屋は一気に静かになる。

だが、アンリは武器を消し、マミに向つていつ言った。

「マリ、本当にやつかよ?」

「ええ、それでもキョウベえですもの

「へへへ

マミとアンリはそれにしか分からぬ事を話す。頭上に疑問符を浮かべていたが、ほむらが切り出した。

「それせめておき、どう思ひへ.

「やうだなあ……こしても今の情報、なんか役に立つみつないにあつたか?」

「少なくとも『舞台装置』で『無力』つついからこは本体は何もできない要塞で、攻撃は使い魔任せつてといじやねえか?…ま、その使い魔は嫌つづつほど出てくるだうがよ」

「おむねその通りだと思つわ。アレ自体は集中砲火を浴びせればいい。問題は使い魔よ

「ん? やけに知つてゐるじやん。戦つた事でもあんのか?」

「…………

「話しあひまえよ。今回は大丈夫だと思つぜ」

「オイ、どうこいつ」とだよ?」

「……余計な事を」

「おお怖い怖い!」

「……仕方ないわね。それじゃ、あなたに賭けて話してみましょうか。」

私は……」

そうしてほむらは語る。己の長い、長い『過去』について。一週目にある魔法少女に助けられた事。その人に憧れたが、人が死んでしまい、やり直しを求めた事。

二週目にその憧れの人と共に戦い、楽しかった時間の中、最後の最後で真実を知った事。

三週目にある時、全てを打ち明けたが分かりあえず、ある青の魔法少女が魔文化した事がきっかけとなり、金の魔法少女から同士討ちした事。そして一週目と同じ結末になり、憧れのその人を魔文化する前に撃ち殺し、ある決意をした事。

四週目にワルブルギスとの戦いの中、最後までその人を守るために契約させながら、キュウベえの口車に乗せられて、契約させてそのまま魔文化させてしまつた事。

そして、五週目。今まで一度も現れた事の無かつた者の登場で全てが狂つてしまつてゐる事。

「 以上が私の戦い。今回も、あの子を守れきれなかつたら、すぐには次へと移るつもりよ」

長話の中、話を聞いていたアンリ以外は、話の魔法少女についての検討がついていた。同士討ちしたのが誰なのか。全てが狂ったという今回のその人物について。

そんな中、アンリが話します。

「そんなに狂わせた原因つてのが、オレつて訳だ。繰り返してんなら必ずオレは覚えているはず、だがそれが無いという事で、今回の大番狂わせは確定していると」

「その通りよ。あなたが全てを狂わせた。…おかげで前回のうちに考えていた計画がほとんど使えなくなつたわ。まあ、少なくとも狂つたのは私にとつていい方向に。だけど」

そんな事を言つても普通は信じないだろう。が、今回は全員がそれの方法で真実を乗り越えてきた。加え、

アンリと関わつたものは、必ず何かが変わつている。

「アンタの言い分はよーく分かつた。ワルブルギスをブツ倒す為だ。時間の巻き戻し伝々はともかく、アンタをそつまでさせたつていう、ある魔法少女つてのは一体誰なんだ？それに、魔文化した奴は？アンタシやマミは多分違うし、アンタが成つた訳でもない。数が合わないじゃねえか」

「そうね。私もアンリがいたからこそ、何とか無事だったのに。私は多分…同士討ちを始めた方でしょ……？」

「ええ、そうよ。でも今回、魔文化した魔法少女は契約をしていな  
いわ」

「じゃあ、一体誰が

」

「『言つちまえよ、そつちも。齿でそつやつて話しても大丈夫だったんだ。今度はみんなで守つて貰おう』

「『アンリ、オマエ知つてゐるのか』」

「一応、ま、暁美ちゃんに聞いてくれ

結局最後まで話を搔きまわしたアンリ。過去語りひとつ無茶ぶりをせたばかりのほむりに念の遠慮もなく話のきっかけを周囲に広げてしまつた。

「…本当だ、あなたは、余計な事をしてくれる」

「『せひせひ、怖い顔せずに吐こちまいか』

「はあ……………」あなたなら聞いた事があるでしょ。」

「まさか……そんな……」

「憧れたのは『鹿田まどか』。魔女化したのは『美樹セイカ』よ

「つて、オイ誰だそれ？」

唯一面識がない杏子だけが頭を傾げた。それにアンリがフォローを入れる。

「鹿田セイカはともかく、美樹ちゃんはあの公園から佐倉が後をつけた青髪の子だよ」

「ああ、アイツか！……ん？何で知つてんだそんな事…」

「あの泥はオレの一部だから、体に戻すと情報が入つてくれるんだよ」

「は？ストーカーじゃねえか！」

「ハイハイ、うるせえよ。ふり……ま、随分と遅れたが、そう言つ事らしいぜ？」

『鹿田ちやん』に『美樹ちやん』？

「なつ…………！」

アンリがそう言つと部屋の入り口から美しい桃色の髪を二つに束ねた少女と、海の様な青をした髪の少女が入ってきた。

「まいっただな……あたしつて魔女になっちゃつてたんだ。しかも高確率で……アハハ……」

「ほむらちやん……本当に？私なんかのために、どうして…」

一人は苦笑い、一人は真偽を問うように此方に歩み寄る。思ひもよらぬ人物がここにいる事にほむらを含む全員は驚愕する。ほむらはその中でも一番衝撃を受けていた。

何故、ありえない、どうして。そんな疑問が浮かぶが、呼んだのはアンリ。すぐさま彼に歩み寄り、彼の愛用するライダースーツの胸倉を掴み上げ、心のままに叫んだ。

「どうして…まどかがここにいるの……まどかを守るために彼女は避難所にいた方がずっと安全なのよ……なのに、こんな……どうして……答えなさい……アンリ・マコ……」

「ちよ、落ち着け！」

「暁美さん……？」

いつか似たような事をアリエもされたなあと、彼は懐かしみを覚えたが、すぐに思考を切り替える。掴まれている事をこれまた何ともないよう切り返し、言った。

「いや、な？どうせなら『魔法少女』が全員集まつて会議した方がいいじゃねえか。それにどうせやう鹿田ちゃんもキュウベえからなんか聞いてるっぽいしわ」

「え……？」

「アイタツ……」

それを聞いたほむらはアンリを放り投げ、まどかへと向きを向く。

「まどか。本当に……アイツから何を吹き込まれたの？」

「えと……その……キュウベえが言つてたんだけどね

そうしてまどかも話を始めた。キュウベえは人類をエネルギー搾取の為の燃料と考えている。など、まどかの覚えていいる限りのインキュベーターの活動に関してだ。

とぎれとぎれに、だが確実にその事を伝える頃にはキュウベえ達インキュベーターの不信感は最高潮まで高まっていた。だが、アンリはここで疑問を持った。

「なんでだ？」この事を鹿田ちゃんに話す必要性が全く感じられない。アイツが言うほどなら鹿田ちゃんがもし魔女化した時に出来るエネルギーはそれこそ無限大のはず。だつつのにその事を鹿田ちゃんに話してしまうと契約できるチャンスを自ら失いに言つてるようなもんだぞ」

確かにそうだ。じつして話したのはここ数日の間と予測できる。が、普通こう言つては迫り詰められるほどギリギリになつてから話し、弱つた心にさらなる衝撃を与えて契約を迫る方がよっぽど効率がいい。

アンリがいるからか？魔法少女が誰一人脱落していないからか？それとも……

疑問は尽きない。なぜ効率重視のインキュベーターがじつもチャンスを逃すよつたな真似をするのか。

「チツーもう少しアンタらが来るのが早かつたら聞けたのにね」

「あ、あの……」めんなり

「ああーもつ、まじかは謝んなくともいいでしょー。じつじつのは全部あいつが悪いんだし」

こうして会議はてんやわんやの事態になつてしまつ。そんな中、意外な人物から鶴の一声

「？？（・ー・\*）ワルブルギスハー？」

「「「「「あー」」」」」

……

「とにかく、話を戻しましょうか？暁美さん、続けて」

「え、ええ。……それじゃワルブルギスの夜、出現位置はこじとして、対策をどう立てるかなのだけれど……」

「それじゃ、シャルが結界を張つて、ワルブルギスを閉じ込める。そんで周囲への被害を無くして結界内で戦うつてのはどうだ？」

「お、それいいね」

「はいはーい。さやかちゃんは疑問なんだけど、結界の中つて私たちに有利なの？」

「それは心配ないと思つわ。アンリがいない時、私がよくシャルと話してたのだけど、結界内はシャルの自由自在。障害物や使い魔も全部そうじよつと思えば私たちに味方してくれるやつよ」

「あの、シャルちゃんは戦えるんですか？魔女の中でもその、ちっちゃいし、アンリさんが呪文となえてる時も泥に囮まれて動けなかつたし」

「その辺は心配ない。正直シャルはオレより断然強いから」

「「「「「嘘……？」」」」

「こや、マジもマジの大マジだつて。…暁美ちゃんがヒカルと一緒に貸してくれ」

「じゃあ、これ使つて…」

「ほこサンキロ」

やつぱり紙にシャルと自分のステータスを比べるよつて書き始めた。宝具令め全てを書き終えて皆に見せる。

「ほひ、これ見りやわかんだろ」

「へえ、じつやあ」…

「シャルちゃんの基本ステータスが圧倒的だね~」

「アンリとシャルつてこんなに違うのね。クラス補正はアンリには無いけど、お菓子のお城か…。サーヴァントになると、能力がはつきり効果として出るのね」

「シャルロッテの結界はともかく、『固有結界』？普通の結界とどう違うのよ~」

「アンリさとつて、こんなにたくさんのスキルを持つてたんだ……」

自分たちのステータスを見せた後、攻撃手段や使い魔の対応法。一番の戦力として期待できるシャルロッテをどう使うか。近く中距離と遠距離・オールレンジの魔法少女三人と、一般人としてのまどかやこの中で唯一、ゲームなどで大型の敵をビックリさせるショミラー

トをするさやか。英靈としてのアンソの考え方と魔女として結界の活用を皆に伝えるシャルロッテ。

種族・役割・個性・世界。それぞれが全く違つ者たちが一丸となつて脅威に立ち向かおうとしていた。

最終的に作戦が決まり、まどかの契約はさやかが阻止、まどかも契約はしないと約束し、マミはついに復帰すると宣言した。これからワルブルギスの夜が出現するまでは、シャルロッテの結界内でどう動き、どう戦うかを仮想敵を使い魔で作つて貰い、練習することに決まった。

この会議が始まってから様々な事があつたが、最後にほむらが気になる事を言つ。

「昨日戦つたあの魔女だけど、今までのループの中で圧倒的に強化されていたわ。ワルブルギスの夜もそうかもしれないから皆、気を引き締めて頂戴」

「マジか…ま、アタシは本気出すだけだ。油断はせつてえしねえさ」

「私もリハビリね。しつかり引き金を引けるようにもう迷わないようになくちゃ」

「キュウべえ来たらアンリさん呼べばいいんだつけ?大衆の田も氣にしないほど大声でちゃんと呼ぶから、さやかちゃんとまつかせときなさい!」

「あたしは何にも出来ないけど、みんなが絶対に無事に戻るよう祈るよ!」

「魔女の強化か……たしか魔女は内包する絶望の量に比例して強くなるんだつたな?こつちでも調査はしておくさ」

「（＊、？）シャルガンバル！！」

こうして対策会議は解散した。誰もが口を高めるために精進を始め、着々と準備を始める。

だが、腑に落ちないのはインキュベーターの行動。奴らが何を思つてまじかへ真実を話したのか？今になつて強化された魔女の真実とは？

そして、杏子だけが今だ自らを隠している。それは隠されたままとなるのか、それとも……？

この物語はまだ、決まつた道をたどつてゐる訳ではない。だといつのに最終電車の明かりは、未だ点いていないという現状。

すぐそこまで迫つてきつたタイムリリット。舞台装置の歯車は、外装を得て動き出した。

世界は、<sup>うきよ</sup>変わらぬ時を刻み続ける。

全ては…………まだ始まらない。

なんかすげく疲れました。さやかが魔法少女にならなかつたのつて  
ここに命めてめちゃくちゃ少ないんじや……あとほむらが時間停止ま  
つたく使ってない（泣）

話の展開からも分かるように、あと数話このままでギ編も終わ  
ります。

でも、アンリ自身の旅はシリーズものとして続けていくつもりです  
ので、これからもよろしくお願ひします。

全部終わつたらおまけとしてなんか書くので楽しみにして待つて  
くれると作者はうれしいです。嬉しそうで死んじやうかもしれませ  
んが。

## 選択肢を選んでください

周りの状況を見て私もクリスマスかお正月の特別番外をやろうと思つた  
うんですが、どちらがいいか投票をとつて見ようかと思います。

どちらかだけやろうと思つています。

クリスマスは1～3日遅れ、お正月は当日投稿になりますが、もし  
ご希望されるなら特別編を書かせていただきます。

「希望の方をお選びください。

A・ゾロアスター教?まあそうだけど、お祝いとしては別にいいじ  
ゃん?クリスマス企画

B・郷に入つては郷に従え。元日本人だし、風習を大切にしましょ  
う!お正月企画

なお、次話投稿には何の支障もありませんので安心…といつか一緒に  
に投稿しますのでどうぞ

**選択肢を選んでください（後書き）**

あ、次の話は現在の状況確認とも一緒に投稿するので一挙3話分と  
いうことになります。

ついでに最終章突入しますのでよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4512y/>

---

魔法少女と悪を背負った者

2011年12月25日20時56分発行